

國營總合農地開發事業

母畠地区遺跡発掘調査報告VI

杉内B遺跡

杉内C遺跡

杉内E遺跡

十三塚E塚群

序 文

国営総合農地開発事業である母畑開拓建設事業は、福島県中通り地方を貫流する阿武隈川上流右岸の郡山市・須賀川市・石川町・玉川村・東村・中島村の2市1町3か村にまたがる長さ約30km、総面積約4,379haの広大な地域を対象にして、農業近代化のための農地開発をする事業です。

阿武隈川の流れは、古代以来その流域に豊かな耕土を形成し、政治・経済・文化の中核となる地域を形成して都市の発達をうながし、県民生活の大動脈となっていました。流域には、古墳・官衙跡・寺院跡さらにそれらを支えた集落跡・生産跡など貴重な遺跡を数多く残しております。

当母畑地区もその一部で、数多くの遺跡の存在が判明いたしております。今年まで遺跡の数は518を数え、これら遺跡の保存と開発との調和を図るために、昭和55年度の開発に際し、東北農政局母畑開拓建設事業所と事前協議を行い、石川町の杉内B・杉内C・杉内E遺跡と十三塚E塚群、須賀川市の大久保A・沼平・沼平東遺跡と沼平塚群・細桿城跡の9遺跡について、調査することにいたしました。発掘調査に際して福島県教育委員会は、財団法人福島県文化センターに調査を委託し、記録保存を図ることといたし、ここに調査成果を報告書として刊行することができました。本書が、埋蔵文化財の活用、さらに学術研究に役立つことを念願いたします。

最後に、ご協力いただいた地元有志、須賀川市・石川町各教育委員会関係者、市・町の関係者、東北農政局母畑開拓建設事業所および開発関係各位の埋蔵文化財に対するご理解に対し、深く感謝の意を表します。

昭和56年3月

福島県教育委員会

教育長 邊見栄之助

あいさつ

開発に伴う埋蔵文化財の調査は、年々その数を増加しております。財団法人福島県文化センター遺跡調査課は、その調査の一端を担い、阿武隈川東岸の南北30kmの長さにわたる母畑開拓建設事業地区内の発掘調査を行い、原始から近世にわたる歴史の解明に大きな成果を上げております。

今までの発掘調査面積は、すでに48,000m²以上におよび、それらの結果から、主に阿武隈川東岸における律令制国家期前後からの白河郡石川郷地方の各集落の変遷過程や集落を構成する各遺構の様子が具体的な姿となってあらわれてきています。これらの具体相は、中世以降のこの地方の人々の生活にも大きな影響を与えていたのはずで、発掘調査の持つ意味あいは、それだけに重要性を増すものでしょう。

昭和55年度調査にあたっては、調査員の人員増をいたし調査体制の強化をはかりつつ、発掘調査9遺跡、試掘調査45遺跡、表面調査約1,000haを行いました。それらのうち本報告書は、発掘調査についてまとめたものです。調査した遺跡は、縄文・弥生・奈良・平安の各時代から中世、そして近世までと多岐にわたりますが、それらはいずれも母畑地区内の埋蔵文化財として貴重なものであります。

埋蔵文化財の調査は、今後も継続して予定されており、それらについても遂次報告書を刊行いたします所存であります。将来、これらの報告書は、阿武隈川東岸の歴史を理解する基本的な資料として貴重なものになると存じます。本報告書がいささかでも関係各位の参考に供され、学問向上の一助となれば幸いと存じます。

昭和56年3月

財団法人福島県文化センター

館長 高橋哲夫

例　　言

- この報告書は、国営総合農地開発事業母畠地区にかかる遺跡の、昭和55年度発掘調査した報告である。
- この報告書には、昭和55年度発掘調査を実施した9遺跡のうち、石川町に所在する4遺跡を収めた。
- この母畠地区事業の促進にあたっては、東北農政局(母畠開拓建設事業所)と福島県教育委員会(文化課)とが埋蔵文化財についての協議を行い、埋蔵文化財の保存を図るとともに、事業計画上保存困難な地区について発掘調査を実施し、記録保存に努めている。
- 昭和54年度の発掘調査費は、国庫補助・県費と東北農政局の負担金からなる。
- 福島県教育委員会は、発掘調査を財団法人福島県文化センターに委託した。福島県文化センターでは、55年度は次の職員を配して調査にあたった。

遺跡調査課長	目黒吉明(福島県教育委員会出向)	文化財主事	石本 弘(文化センター職員)
専門文化財主査	渡部正俊(福島県教育委員会出向)	文化財主事	芳賀英一(文化センター職員)
文化財主事	阿部正行(福島県教育委員会出向)	文化財主事	安田 稔(文化センター職員)
文化財主事	玉川一郎(福島県教育委員会出向)	文化財主事	松本 茂(文化センター職員)
文化財主事	大越道正(文化センター職員)	文化財主事	高橋信一(文化センター職員)
文化財主事	橋本博幸(文化センター職員)	嘱 託	石川俊英
文化財主事	阿部俊夫(文化センター職員)		

- 各遺跡ごとの調査員名は各編中間に記した。
- 本報告書は下記により分担執筆し、目黒が監修した。

序　　章	渡部、阿部(正)
第1編 杉内B遺跡	大越、阿部(俊)、松本、安田
第2編 杉内C遺跡	阿部(俊)、松本、安田
第3編 杉内E遺跡	大越、松本、安田、石川
第4編 十三塚E塚群	玉川

凡 例

- 1 本報告書は調査員が分担執筆した。執筆者名を文末に記載した。
- 2 用字・用語については統一を計ったが、時間的な制約から細部に不統一な点がある。
- 3 報告書執筆の基準は次のとおりである。
 - (1) 実測図中の方位は磁北を示し、本文中に記した方位角度は磁北からの偏度である。
 - (2) 実測図中および本文中の P₁・P₂……は 1 号ピット・2 号ピット……を現わす。
 - (3) 造構実測図は原則として $\frac{1}{10}$ ・ $\frac{1}{40}$ ・ $\frac{1}{60}$ ・ $\frac{1}{80}$ ・ $\frac{1}{100}$ 縮尺で採録し、各々にスケールを付した。
 - (4) 遺物実測図は原則として石器を $\frac{1}{2}$ 、鉄器、拓影を $\frac{1}{2}$ 、土器を $\frac{1}{2}$ で採録し、各々にスケールを付した。
 - (5) 土器実測図および拓影の断面は、縄文土器・弥生式土器・土師器は白ヌキ、須恵器・陶器はベタ黒に区別した。なお土師器内面のスクリーントーンは内黒土師器を示す。
 - (6) 遺物写真は任意の大きさでレイアウトした。
- 4 各編での引用文献については執筆者の敬称を省略し、参考文献として各編末尾に記載した。
- 5 本文中で使用した造構の略号は次の通りである。

S I	……堅穴住居跡	S B	……掘立柱建物跡	S K	……土	坑
S A	……柱	列	S D	……溝	跡	
- 6 発掘調査の資料は次の略号の組合せにより整理し、福島県文化センターにおいて保管の予定である。

市町村略号		
石川町	…… I K	
遺跡略号		
杉内 B 遺跡	…… S U + B	
杉内 E 遺跡	…… S U + E	
	杉内 C 遺跡	…… S U + C
	十三塚 E 塚群	…… J Z + E 塚

目 次

序 章	1
第1節 調査経過	1
1 昭和54年度までの経過(1) 2 昭和55年度の調査経過(3)	
第2節 遺跡周辺の環境	7
第1編 杉内B遺跡	11
第1章 調査経過	13
第1節 位置と地形	13
第2節 調査経過	13
第2章 遺構と遺物	17
第1節 壑穴住居跡	17
1号住居跡⑰ 2号住居跡⑯ 3号住居跡⑳ 4号住居跡㉗ 5号住居跡⑳	
第2節 土坑・その他	34
土坑⑩ 柱列⑮ 溝跡⑩ 耕作跡⑩ ピット群⑩ 遺物包含層⑩ 表土出土の遺物⑩	
第3章 考 察	45
第1節 遺物について	45
第2節 遺構について	47
第2編 杉内C遺跡	73
第1章 調査経過	75
第1節 位置と地形	75
第2節 調査経過	75

第2章 遺構と遺物	79
第1節 壘穴住居跡	79
1号住居跡79 2号住居跡80	
第2節 土坑・その他	91
土坑91 ピット群95 表土出土の遺物94	
第3章 考 察	100
第1節 遺物について	100
縄文時代の遺物(100) 奈良・平安時代の遺物(101)	
第2節 遺構について	102
縄文時代晩期の住居跡(102) 奈良時代の住居跡(103) その他の遺構(103)	
第3編 杉内E遺跡	121
第1章 調査経過	123
第1節 位置と地形	123
第2節 調査経過	123
第2章 遺構と遺物	126
第1節 挖立柱建物跡	126
1号建物跡(126) 2号建物跡(128) 3号建物跡(128) 4号建物跡(131)	
5号建物跡(132) 6号建物跡(133) 7号建物跡(133) 8号建物跡(135)	
9号建物跡(133) 10号建物跡(135)	
第2節 その他の遺物	137
第3章 考 察	140
第1節 遺物について	140
第2節 遺構について	141
第3節 遺構の年代とその性格	142

目 次

第4編 十三塚E塚群	153
第1章 調査経過	155
第1節 位置と地形	155
第2節 調査経過	157
第2章 遺構と遺物	158
第1節 塚	158
第2節 土坑	162
第3節 遺物	164
第3章 考察	165

挿図・図版目次

序 章

挿図		挿図	
第1図 母畠地区位置図	4	第3図 調査遺跡位置図	8
第2図 母畠地区開発計画図	5	第4図 杉内B・C・D・E遺跡周辺地形図	9

第1編 杉内B遺跡

挿図		挿図	
第1図 杉内B遺跡周辺地形図	14	第30図 表土出土遺物	43
第2図 杉内B遺跡棲出遺構配置図	15	表	
第3図 1号住居跡	18	第1表 ピット一覧表	41
第4図 1号住居跡出土土師器	19	第2表 包含層出土遺物一覧表	43
第5図 2号住居跡	20	第3表 壕穴住居跡出土土師器一覧表	46
第6図 2号住居跡カマド	21	図版	
第7図 2号住居跡出土支脚	22	1 杉内B遺跡遠景	51
第8図 3号住居跡	23	2 杉内B遺跡東区遠景	51
第9図 3号住居跡カマド	24	3 1号住居跡	53
第10図 3号住居跡出土土師器・須恵器	26	4 1号住居跡カマド	53
第11図 3号住居跡出土石器・鉄器	27	5 2号住居跡	55
第12図 4号住居跡	28	6 2号住居跡カマド	55
第13図 4号住居跡カマド	29	7 2号住居跡カマドセクション	57
第14図 4号住居跡出土土師器	29	8 3号住居跡	57
第15図 5号住居跡	30	9 3号住居跡カマド袖石	59
第16図 5号住居跡出土土師器	32	10 2・4号住居跡	59
第17図 5号住居跡出土铁器	33	11 5号住居跡	61
第18図 1~3号土坑	35	12 5号住居跡野獣穴遺物出土状況	61
第19図 4・5号土坑	36	13 5号住居跡カマド遺物出土状況	63
第20図 1・2号柱列	37	14 5号住居跡カマドセクション	63
第21図 1号溝跡	38	15 5号住居跡カマド掘り方	65
第22図 3号溝跡	39	16 2号土坑	65
第23図 3号溝跡出土陶器	39	17 3号土坑	67
第24図 2号耕作跡出土石鏡	40	18 2号柱列	67
第25図 ピット群	40	19 2号耕作跡	69
第26図 ピット群	41	20 ピット群	69
第27図 ピット群	42	21 杉内B遺跡出土遺物	71
第28図 ピット群	42		
第29図 西区南端斜面遺物包含層断面図	43		

第2編 杉内C遺跡

挿図	挿図		
第1図 杉内C遺跡周辺地形図	77	第24図 表土出土土師器・須恵器・ 砥石	99
第2図 杉内C遺跡遺構配置図	78		
第3図 1号住居跡	80		
第4図 1号住居跡出土土器類・鐵鏃	81	表	
第5図 2号住居跡	82	第1表 ピット計測表	82
第6図 2号住居跡出土繩文土器	83	第2表 2号住居跡出土石器一覧表	90
第7図 2号住居跡出土繩文土器拓影	84	第3表 ピット群計測値一覧表	97
第8図 2号住居跡出土石器・鍬器・ 磨石・凹石・石製品	85		
第9図 2号住居跡出土磨石・凹石・ 石核	86	図版	
第10図 2号住居跡出土石核	87	1 杉内C遺跡遠景	105
第11図 2号住居跡出土石核	88	2 杉内C遺跡遠景	105
第12図 2号住居跡出土剝片	89	3 1号住居跡	107
第13図 1号土坑	91	4 2号住居跡	107
第14図 2・3号土坑	92	5 1号土坑	109
第15図 4号土坑	92	6 2・3号土坑	109
第16図 5号土坑	93	7 4号土坑	109
第17図 6号土坑	94	8 5号土坑	111
第18図 7号土坑	94	9 5号土坑セクション	111
第19図 7号土坑出土繩文土器	94	10 6号土坑	111
第20図 8号土坑	95	11 7号土坑	113
第21図 9号土坑	95	12 8号土坑	113
第22図 ピット群	96	13 9号土坑	113
第23図 表土出土繩文土器拓影・ 石核・剝片	98	14 2号住居跡出土繩文土器	115
		15 2号住居跡出土石器類	117
		16 2号住居跡・表土出土石器類	119

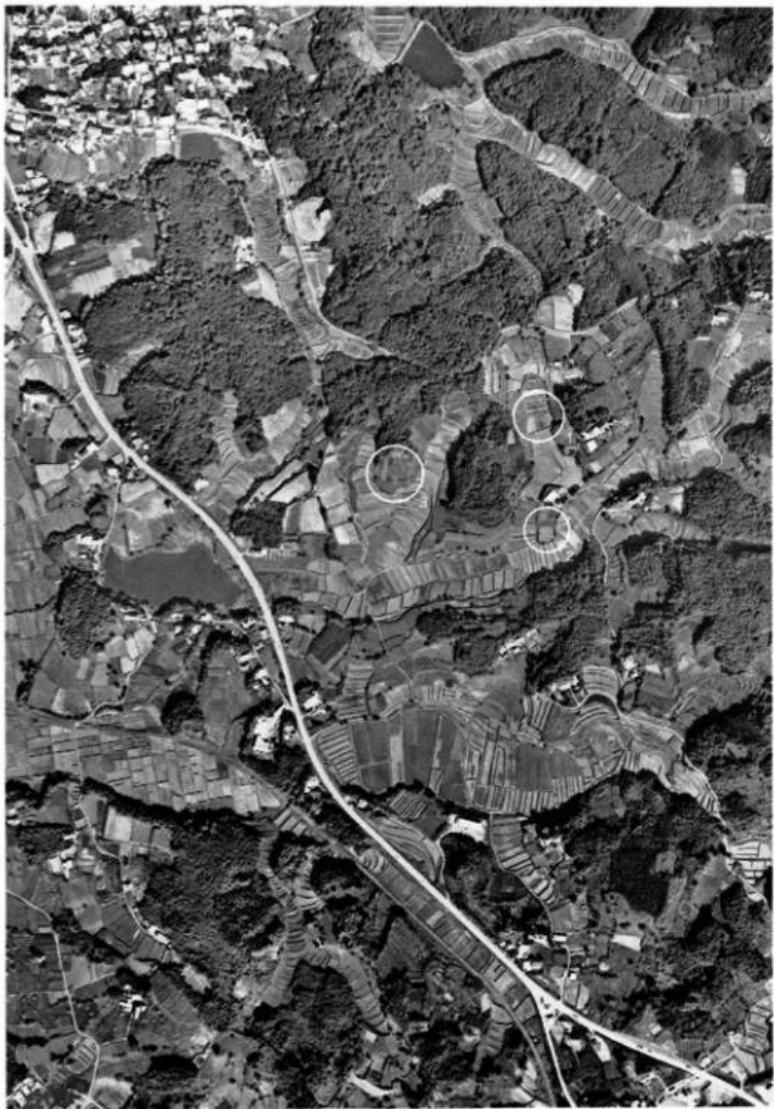
第3編 杉内E遺跡

挿図	挿図		
第1図 杉内E遺跡周辺地形図	124	第10図 10号建物跡	136
第2図 杉内E遺跡遺構配置図	125	第11図 弥生式土器拓影	137
第3図 1号建物跡	127	第12図 表土出土土師器・須恵器	138
第4図 2号建物跡	129	第13図 須恵器甕出土状況	139
第5図 3号建物跡	130		
第6図 4号建物跡	131	表	
第7図 5号建物跡	132	第1表 1号建物跡柱穴一覧表	126
第8図 6号建物跡	133	第2表 2号建物跡柱穴一覧表	128
第9図 7・8・9号建物跡	134	第3表 3号建物跡柱穴一覧表	128

表	図版
第4表 4号建物跡柱穴一覧表	132 1 遺跡の遠景
第5表 5号建物跡柱穴一覧表	132 2 遺跡の遠景
第6表 6号建物跡柱穴一覧表	133 3 1号建物跡
第7表 7号建物跡柱穴一覧表	134 4 2・3号建物跡
第8表 8号建物跡柱穴一覧表	134 5 4号建物跡
第9表 9号建物跡柱穴一覧表	135 6 5号建物跡
第10表 10号建物跡柱穴一覧表	136 7 6号建物跡
第11表 挖立柱建物跡一覧表	141 8 7・8・9号建物跡
第12表 出土土器集計表	142 9 杉内E遺跡出土土器・須恵器
	143 143 145 145 147 147 149 149 151

第4編 十三塚E塚群

挿図	図版
第1図 遺跡周辺の地形図	156 3 1号塚調査前全景
第2図 十三塚E塚群全体図	159 4 1号塚セクション
第3図 1号塚	160 5 2号塚調査前全景
第4図 2号塚	161 6 2号塚セクション
第5図 1・2号土坑	163 7 1・2号土坑全景
第6図 縄文・弥生式土器拓影	164 8 1号土坑全景
	169 169 171 171 173 175 175
図版	9 1号土坑セクション
1 遺跡の遠景	167 10 2号土坑全景
2 調査後全景	167 11 2号土坑セクション
	177 177



杉内遺跡付近航空写真 1. 杉内B遺跡 2. 杉内C遺跡 3. 杉内E遺跡

序 章

第1節 調査経過

1. 昭和54年度までの経過

国営総合農地開発事業母畑地区は、福島県の中通り地方を南北に貫流する阿武隈川の上流右岸沿いに、南北約30 kmにわたり細長く展開する丘陵台地で、郡山市・須賀川市・玉川村・石川町・中島村・東村の6市町村にわたる、面積4,379 haにおける大規模な開発事業である。阿武隈山地の西縁に展開するこの地域は、多くの開発可能地を抱えながらも開発が遅れ、地域住民からの開発に対する期待は強かった。

東北農政局は、この地域の総合開発事業を計画し、昭和35年度から国直轄の調査を開始した。水源として、阿武隈川支流、北須川の上流石川町大字母畑に千五沢ダムの築造を計画し、昭和43年3月から国営総合バイロット事業に着手した。その後、昭和45年度から始まった米の生産調整を含む農政転換があり、開田予定地が畑地灌漑に切り変わる等の事業内容の変更はあったが、現在では昭和63年度に事業を完成させることを目標にして、事業が進められている。

福島県教育委員会では昭和44年に母畑事業地区内の遺跡分布調査を実施し、さらに昭和51年時点で一部の詳細分布調査を実施し147箇所の所在を確認した。同年から母畑事業での開墾・圃場整備等の面工事が開始されるに及び、県教育委員会と東北農政局母畑事業所との間で、埋蔵文化財の取り扱いについて協議が重ねられた。一方、協議が継続されるなかで国庫補助および東北農政局の暫定的な費用負担をうけて次の調査を行った。

試掘調査 石川町(15工区)

『母畑地区遺跡試掘調査概報1』(福島県文化財調査報告書第61集)

発掘調査 上森屋段遺跡 石川郡石川町大字赤羽字上森屋段

『石川町上森屋段遺跡発掘調査概報』(福島県文化財調査報告書第60集)

昭和52年度には、財団法人福島県文化センター内に遺跡調査課を新設し、県教育庁からの出向職員を中心に5名の職員を配置し、母畑事業区内の埋蔵文化財に関する調査体制を整えた。昭和52年度の事業は、母畑地区の19遺跡の試掘調査と7,400 m²の発掘調査を県文化センター遺跡調査課が行った。

表面調査 東村(16工区) 上野出島地区 100 ha

試掘調査 石川町(15工区) 赤羽地区 4 遺跡、沢井地区 10 遺跡

東村(16工区) 上野出島地区 5 遺跡

『母畠地区遺跡分布調査報告Ⅱ』（福島県文化財調査報告書第66集）

発掘調査 佐平林遺跡(Ⅰ～IV区)	西白河郡東村大字上野出島字谷地前	2,500 m ²
佐平林遺跡(V区)	西白河郡東村大字上野出島字佐平林	800 m ²
谷地前C遺跡	西白河郡東村大字上野出島字谷地前	1,600 m ²
赤根久保遺跡	西白河郡東村大字上野出島字赤根久保	2,500 m ²

『母畠地区遺跡発掘調査報告Ⅲ』（福島県文化財調査報告書第67集）

昭和53年度は、母畠事業の進展とともに拡大し、これと同時に遺跡の調査面積も増大した。また53年度以降の事業計画を推進するためにも早期に事業区内の埋蔵文化財の実態を把握する必要があった。事業地区内の遺跡数は多く、総合農地開発という事業の性格から、広大な面積にわたり遺跡が壊滅的な影響を受けるために、開発と文化財保護の調整が大きな問題となった。この問題は単に県教育委員会と母畠事業所の二者だけの問題だけではなく、早期の開発を要望する各地権者にとっても切実な問題であった。

昭和53年度以降の母畠地区開発事業の施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて、事業及び埋蔵文化財調査の円滑な推進を計るため、福島県教育長と東北農政局建設部長との間に覚書が交換された。(54・1・12)

こうした経過のなかで県教育委員会は、県文化センター遺跡調査課に4名の職員を新たに出向させて調査体制を強化し、年間1,000 haの表面調査、20遺跡の試掘調査、10,000 m²の発掘調査を前提として母畠事業所との間に埋蔵文化財保存協議を行い、調査を県文化センターに委託した。

昭和53年度の分布調査は、54年度までの工事予定地域を含む工区を主対象にして、当該工区全域の表面調査を計画し、須賀川市(5工区)・石川町(11工区・15工区)・東村(16工区・17工区)の5つの工区1,008 haの表面調査を完了した。調査の結果、新発見の遺跡106箇所を確認した。

試掘調査は、昭和53年度工事実施予定地域の須賀川市(5工区)9遺跡、石川町(11工区)3遺跡、東村(16工区・17工区)5遺跡、計17遺跡と、昭和54年度工事予定地区的須賀川市(5工区)7遺跡、石川町(11工区・15工区)2遺跡、東村(16工区)1遺跡の計10遺跡、その他4遺跡を試掘した。

『母畠地区遺跡分布調査報告Ⅳ』（福島県文化財調査報告書第73集）

上記の分布調査の結果をもとに、昭和53年度工事予定地内における埋蔵文化財保存協議が行われ、開発工法などによる遺跡保存対策を含め、4遺跡について記録保存のための発掘調査を実施した。調査面積は当初の予定面積を大きく上回り最終的には13,000 m²を数えた。

発掘調査 佐平林遺跡(VI区)	西白河郡東村大字上野出島字佐平林	3,000 m ²
板倉前B遺跡	西白河郡東村大字上野出島字板倉前	1,000 m ²
笊内古墳群	西白河郡東村大字上野出島字笊内	3,300 m ²
達中久保遺跡	石川郡石川町大字赤羽字達中久保	5,700 m ²

『母畠地区遺跡発掘調査報告Ⅴ』（福島県文化財調査報告書第74集）

昭和54年度県文化センター遺跡調査課では、4月から新たに6名の専門職員を採用し、調査体制の強化を計り、母畠地区の遺跡調査に併行して、阿武隈地域広域農業開発事業、国営総合農業開発事業矢吹地区の埋蔵文化財分布調査を行うこととした。

母畠地区的分布調査における表面調査は、昨年度に引き続き1,000 haの面積を目標として、郡山市(2工区)・須賀川市(6・7工区)・石川町(13・14工区)の調査を実施、総面積1,037.7 ha、新発見を含む遺跡数186を確認した。

試掘調査は、昭和54年度工事区内に含まれる7遺跡と昭和55年度工事予定区内の18遺跡、合計25遺跡の調査を実施した。当該市町村は、須賀川市(5・6工区)・石川町(11工区)・東村(16工区)で、調査の期間は農作物の作付けとの兼ね合いもあり空きとなっている4月と11月以降の時期を集中的に調査期間とした。

『母畠地区遺跡分布調査報告IV』(福島県文化財調査報告書第83集)

発掘調査は、前年度である昭和54年2月8日に母畠事業所から54年度の工事実施予定地区的説明がなされ、これに伴う埋蔵文化財の保存について、県教育委員会と母畠事業所との間で協議が行われた。53年度の試掘調査の結果から54年度工事実施地区内における遺跡の要発掘面積は、約100,000 m²を推定していたが可能な限り盛土工法等で遺跡の保存を計るという方向で協議が進められ、須賀川市・2遺跡、石川町・3遺跡、東村・3遺跡4地区について記録保存を目的とする発掘調査を行うこととし、県文化センターに調査を委託した。

発掘調査	下小山田古墳群	須賀川市大字下小山田字山田	1,000 m ²
	山田B遺跡	須賀川市大字下小山田字山田	500 m ²
	源平A遺跡	石川郡石川町大字曲木字源平	800 m ²
	源平C遺跡	石川郡石川町大字曲木字源平	1,200 m ²
	十三塚塚群	石川郡石川町大字沢井字十三塚	500 m ²
	佐平林遺跡(Ⅳ区)	西白河郡東村上野出島字佐平林	700 m ²
	西原遺跡	西白河郡東村上野出島字西原	2,000 m ²
	谷地前C遺跡	西白河郡東村上野出島字谷地前	4,000 m ²
	佐平林遺跡(Ⅴ区)	西白河郡東村上野出島字谷地前	2,500 m ²

『母畠地区遺跡発掘調査報告IV・V』(福島県文化財調査報告書第84・85集)

以上、前年度までの調査経過はこれまで出版された調査報告書からの抜粋である。

2. 昭和55年度の調査経過

昭和55年3月7日、母畠事業所から55年度の事業実施予定地区的説明がなされ、これに伴う埋蔵文化財の保存について、県教育委員会と母畠事業所との間で協議が行われた。54年度の試掘

調査の結果から55年度工事実施地区内における遺跡の要発掘面積は、約50,000 m²を推定していたが可能な限り盛土土法等で遺跡の保存を図るという方向で協議が進められ、9遺跡について記録保存を目的とする発掘調査を行うこととし、県文化センター遺跡調査課に調査を委託した。

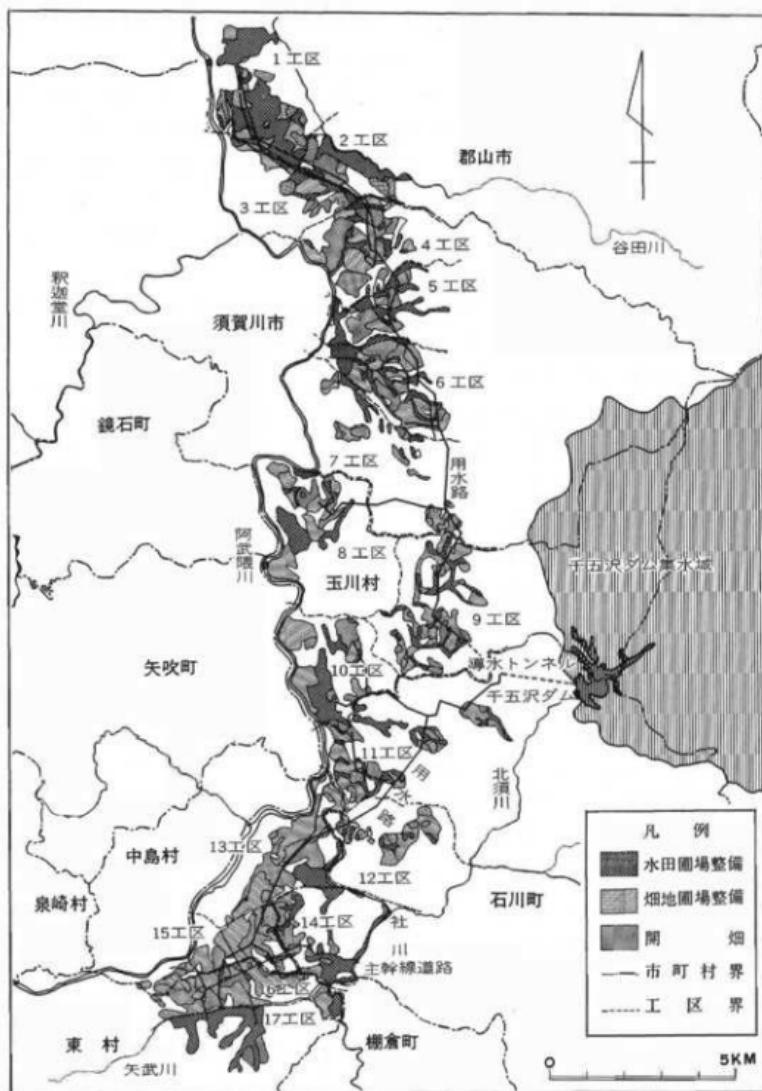
県文化センター遺跡調査課では、4月から新たに5名の専門職員を採用し、調査体制の強化を図り、母畠地区の遺跡調査に並行して、阿武隈地区広域農業開発事業地内の埋蔵文化財分布調査を行うこととした。

昭和55年度の母畠地区発掘調査は、須賀川市5遺跡、石川町4遺跡が計画された。農作物の作付状況、農繁期における作業員の確保等で調査を実施する際の困難などが予想されたので、調査期間はそれらの諸問題を検討して全体の調査計画を調整し、A・B・Cの三班を編成して調査にあたった。各遺跡の調査期間・面積は次の通りである。

大久保 A 遺跡	須賀川市大字塩田字御堂内	3,000 m ²	5月 19日～11月 7日
沼平塚群(26基)	須賀川市大字小倉字沼平	1,400 m ²	5月 19日～1月 8日
杉内 B 遺跡	石川郡石川町大字中野字杉内	1,500 m ²	5月 19日～6月 27日
杉内 C 遺跡	石川郡石川町大字中野字杉内	1,000 m ²	6月 3日～7月 18日
杉内 E 遺跡	石川郡石川町大字中野字杉内	200 m ²	6月 26日～8月 5日
細桟城跡	須賀川市大字小倉字新屋敷	3,700 m ²	8月 5日～11月 6日
沼平遺跡	須賀川市大字小倉字沼平	600 m ²	9月 2日～10月 31日
沼平東遺跡	須賀川市大字小倉字沼平	1,600 m ²	9月 12日～11月 21日
十三塚 E 塚群(2基)	石川郡石川町大字沢井字十三塚	400 m ²	11月 25日～12月 10日



第1図 母畠地区位置図



第2図 母畠地区開発計画図

須賀川市の大久保A遺跡、沼平塚群、それに各遺跡が至近距離にある石川町杉内B・C・E遺跡は、年度の初期の段階で幾分の発掘できうる条件が整ったため、大きく2グループに分け同時に調査を開始した。しかし継続して調査が進行し終了することができたのは杉内B・C・Eの3遺跡のみで、他の遺跡は秋口になって調査を開始した遺跡を含めて、地権者の協力が得られないことや、農作物の作付けの問題等種々の条件が制約となり、発掘後の整理に相当な懸念されたが、諸事情を勘案し調査開始時期の延期や調査地点の細分によって対処した。特に沼平塚群の一部は地権者の協力が得られなく、冬期間雪中時の調査を余儀無くされ最終的には年を越した1月9日に終了した。

9遺跡の発掘調査を6ヶ月の短期間に終了させることに加え、種々の事情から調査が秋に集中したことから、遺跡の全体測量および一部の遺構測量は空中撮影による航空測量とし、11月8日沼平・沼平東・細桿城の3遺跡について実施した。

調査日程の関係で、各遺跡ごとに現地説明会を開催することはできなかったが、須賀川市教育委員会の協力を得て11月5日、位置的に近接している沼平・沼平東・細桿城の3遺跡の発掘現場の見学を通して、埋蔵文化財について理解を深め、郷土の歴史を考えることを目的とし、一般の方々を対象に遺跡見学学習会を行った。またこの学習会とは別に、小塩江小学校の主に6年生が大久保A遺跡や沼平東遺跡の見学会を行っている。

本書には、発掘調査した9遺跡のなかでも、石川町に所在する4遺跡についての調査結果を収録した。

- 第1編 杉内B遺跡(石川町) 奈良～平安時代の集落跡
- 第2編 杉内C遺跡(石川町) 繩文・奈良時代の集落跡
- 第3編 杉内E遺跡(石川町) 平安時代の集落跡
- 第4編 十三塚E塚群(石川町) 中世以降の塚2基

本書未掲載の須賀川市の5遺跡については、『母畠地区遺跡発掘調査報告 VII』(福島県文化財調査報告 第96集)に収録した。概要は、次の通りである。

- 第1編 大久保A遺跡(須賀川市) 繩文(陥し穴群)・弥生(墓跡)・平安(窓跡)
- 第2編 沼平遺跡(須賀川市) 奈良～平安時代の集落跡
- 第3編 沼平東遺跡(須賀川市) 奈良～平安時代の集落跡
- 第4編 沼平塚群(須賀川市) 中・近世塚群
- 第5編 細桿城跡(須賀川市) 中世城館跡

分布調査の結果については、『母畠地区遺跡分布調査報告 V』(福島県文化財調査報告第集)にとりまとめた。

(渡部)

第2節 遺跡周辺の環境

母畠地区の開発事業は、阿武隈川上流の右岸南北長約30km、東西幅約5kmにわたりその面積総計4,379haを測る。この広範な地域は丘陵や台地、河谷平野等を含む、地域によって様々な様相を呈しているが、大別して石川町南部付近を境として地形的に比較的起伏の緩やかな南部と起伏に富んだ山間の地形が連続する北部とに分けられる。

本報告書に採録した杉内B・C・E遺跡と十三塚E塚群はともに石川町に所在するが、石川町のなかでもそれぞれ北部と南部とに位置し、遺跡を取り巻く環境が各々相異なるため、以下杉内B・C・E遺跡が所在する野木沢地区と、十三塚E塚群の所在する沢田地区との2つの地区について、地形的特色や周辺の景観について略述する。

野木沢地区 石川町北西部を占める野木沢地区は中野・曲木・塩沢の3地区より構成されている。この地区は老年期山地である阿武隈山系の西縁にあたり、阿武隈川を挟んで西側に広がる矢吹ヶ原と対峙している。阿武隈山系は花崗岩を基盤としているが、特に須賀川市や玉川村にかかる阿武隈東岸では基盤の花崗岩を一部鮮新世から浜積世の初期にかけて形成された石英安山岩質熔結凝灰岩が覆っており、この状況は杉内B・C・E遺跡が所在する玉川村と石川町の町村境いまで観察される。

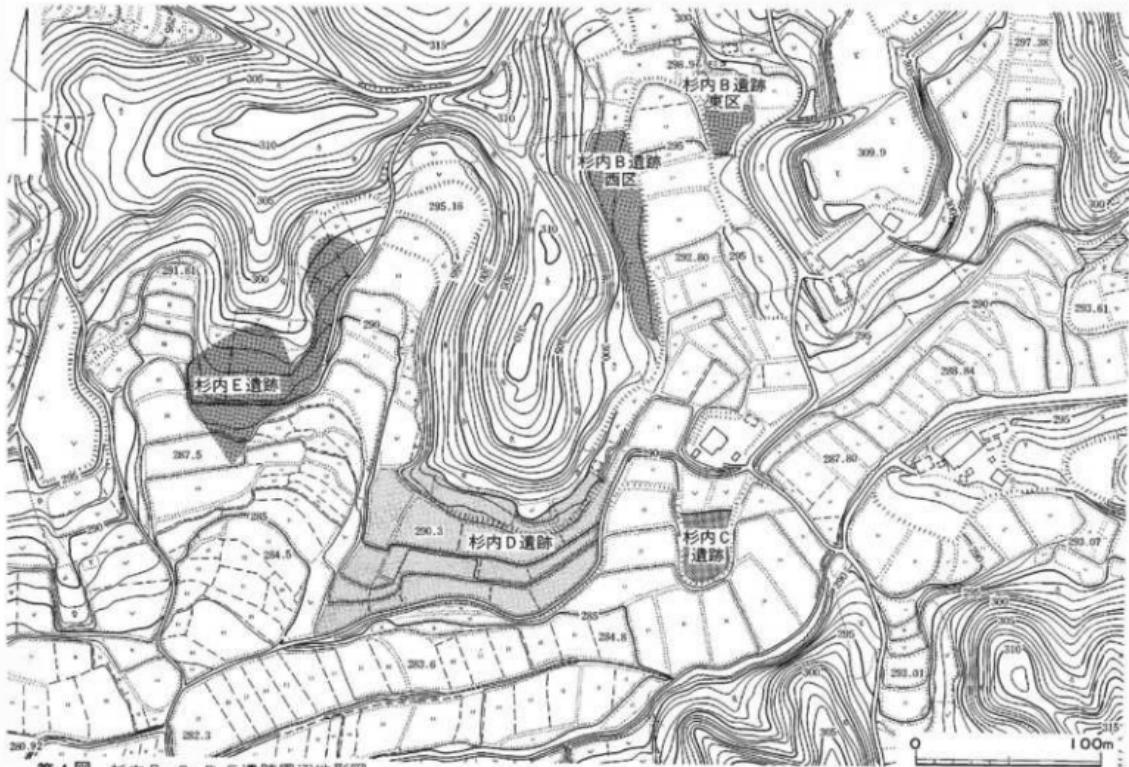
この阿武隈山系の西縁は、地形的には標高350～500mの丘陵と樹枝状に無数に入り込んだ侵食谷とが複雑な景観をつくりだしている。現在の土地利用は、侵食谷は谷頭付近まで谷地田として水田化され、丘陵の緩斜面と塬部は主に畠地として利用されている。また丘陵上や急斜面には雑木林が広範囲に広がり、一部植林地としても利用されている。

杉内B・C・E遺跡は、玉川村内にある武道池から東方へ入り込む侵食谷の北側、丘陵裾部に近接して点在している。この付近の遺跡の分布は石川町教育委員会や当課の踏査によってほぼ把握されかかっており、一部は発掘調査あるいは試掘調査がなされている。今回の3遺跡の調査では、縄文時代の晩期と奈良～平安時代の集落跡の片鱗が明らかとなったが、周辺の遺跡をも概観すれば、縄文時代晩期の遺跡では弥生時代の再葬群で著名な鳥内遺跡や和久遺跡、それに極近接した位置にある杉内D遺跡があげられる。この内発掘調査されたのは鳥内遺跡のみであるが一部分の調査のため全貌が明らかになったとは言い難くまだ未知な面が多いといえよう。

奈良～平安時代では、3遺跡が密接な関係にあることは言うまでもないが、近辺にはこの他に杉内A遺跡、堀ノ内遺跡、源平A・B遺跡等がある。いずれも狭小な侵食谷に面する小規模な遺跡で杉内の各遺跡の在り方と共通する点を多く持っている。現在でも水田や畠作を基本とする自然村落的な集落は、往時の集落立地と重なる部分が多く、この地域の農業経営を基盤とした開発



第3図 調査遺跡位置図



第4図 杉内B・C・D・E遺跡周辺地形図

の歴史が奈良時代まで遡ることを示唆するものとしてとらえられる。

沢田地区　社川西岸の石川町西部に位置する沢田地区は、南部の丘陵地帯を除くと、郡山面と呼ばれる標高295m前後の平坦な洪積台地が広がっている。また阿武隈・社両川の流域にはやや広い沖積平野もみられるなど全体的に起伏が小さく、広義の郡山盆地の一角を占めている。洪積台地は、郡山面と呼ばれ中通り南部低地帯に広く分布する凝灰岩質の基盤を被う、礫・砂泥層で構成され、その上面を那須火山群が噴出源とする0.5～1.5mの黄褐色ローム層と、0.4～0.8mの茶褐色ないし黒色の表土層に被われている。この表土層は基本的に3層に細分され、好条件下では縄文の遺構が下層を、土師の遺構が中間層を掘り込み面としているのがとらえられる。

台地の北西辺は、阿武隈川氾濫原との間に比高20mほどの段丘崖を形成し、南方には同じく比高20～30m前後の丘陵が点在して社川支流、矢武川との分水界をなしている。十三塚E塚群の所在する台地南部の丘陵も、この中の一つであり、凝灰岩質の基盤岩をローム層・表土層が被っている。丘陵・台地上の開発は水利の不便もあってかなり遅れ、第二次大戦後に進んだようである。現在の土地利用を見ても水田は数えるほどの谷地を利用しているにすぎず、畠地が大半を占め、雑木林も広い面積を占めている。

十三塚E塚群は、残丘化した丘陵の頂部に立地している。この塚群の立地する面よりも下位にある段丘面には、十三塚塚群が近接して位置し、昭和54年度に4基の塚を発掘調査している。これらの塚は形態や積み土の状態に共通する特徴を有するが、2遺跡の考古学的調査からはその機能や性格について証明することはできなかったといわざるをえない。今後、母畠地区にとどまらず散発的に確認される塚も含め、考古学的研究と同時に民俗学や宗教史的な方向からのアプローチも必要となろう。

第1編 杉内B遺跡

遺跡記号 IK-SU・B
所在地 石川郡石川町大字中野字杉内
時代・種類 奈良・平安時代-集落跡
調査期間 昭和55年5月19日～6月27日
調査員 大越道正 阿部俊夫
松本茂 安田稔
協力機関 石川町教育委員会

第1章 調査経過

第1節 位置と地形

杉内B遺跡は石川町大字中野字杉内に所在する。杉内C・E遺跡と同じく、石川町の北端に位置し、国鉄水郡線川辺沖駅の南東約1.5kmにあたる。この地点周辺は、阿武隈山系の西縁部にあたり、さらに西側で阿武隈川東岸に広がる冲積面に接している。阿武隈山系の西縁部には、標高300～350m前後の丘陵が連なり、阿武隈川に灌ぐ支流の水源をなす開析谷が複雑に入りこむこれらの丘陵は、西方に向い舌状に張り出している。

杉内B遺跡は、短い開析谷の谷頭部に位置し、標高約310・320mの2つの舌状に張り出した丘陵裾部、東・西斜面上に立地する集落跡である。2つの丘陵に広がる杉内B遺跡の範囲は、中世城館跡を含む繩文・土師器の散布地46,000m²と推定されていた。昭和54年11月当課は、工事区予定の丘陵裾部の緩斜面の試掘調査を行い、奈良・平安時代に相当する集落跡、2,500m²であろうことが推定されるに至った。調査地区は、40～50m前後の幅をもつ開析谷をはさんで、東・西にわかれ調査地区名も東区・西区とした。東区は、東側の丘陵裾部西斜面上に、西区は、西側の丘陵裾部東斜面上に立地する。斜面の標高は、いずれも約300mであるが、東区は盛土造成され、西区は削平されており、原地形は著しく改変されている。西区北側の斜面西端は、湧水地点であり、湧水は開析谷に灌いでいる。東・西区の立地する丘陵裾部両斜面の現況は、桑畠・畠地である。

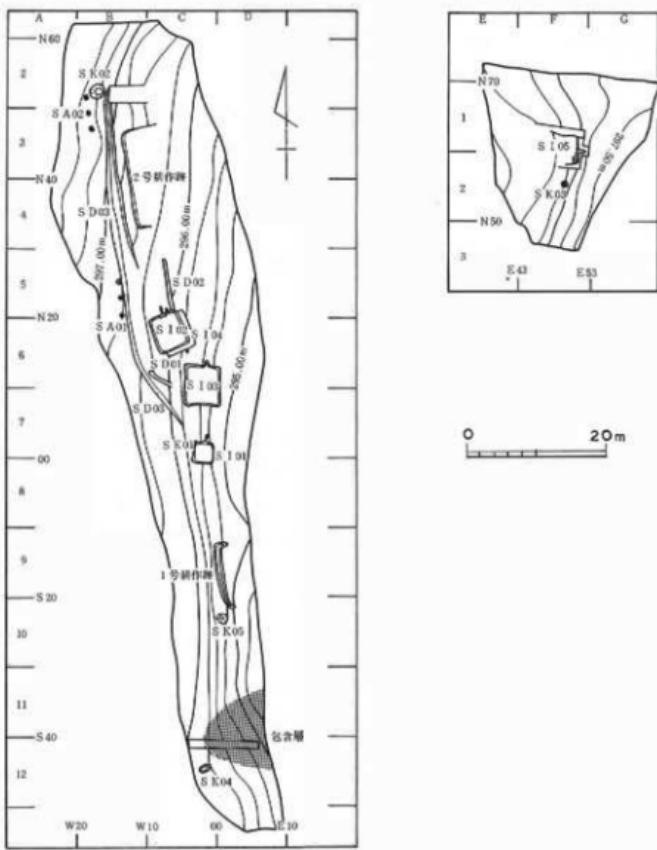
県文化センター遺跡調査課では、母畠地区の開発事業に伴う発掘調査に備え、石川町赤羽地区以南の層序を4層に区分してきたが、当野木沢地区では凝灰岩及び花崗岩が基盤となっているため、その上層に形成された土壤にも基盤の風化粘土粒子が多量に混入している。遺構の検出面は後世の深耕により良好ではなかったが、斜面下方の比較的耕作の及んでいないところでは、奈良・平安時代の竪穴住居跡が、Ⅲ層とした粘性のある暗褐色土において検出された。
(阿部)

第2節 調査経過

杉内B遺跡は、昭和46年12月の踏査により発見され、「石川町遺跡台帳」(昭和46年石川町教育委員会)・「全国遺跡地図・福島県」(昭和49年文化庁)に既登録の遺跡である。県文化センター遺跡調査課は、本遺跡周辺が母畠地区の工事予定地内に含まれるため、昭和53年6月に踏査を、翌54年11月に試掘を行い、本遺跡の範囲を再確認した。試掘では、中世城館跡を除く地域を対



第1図 杉内B遺跡周辺地形図



第2図 杉内B遺跡検出遺構配図

象に7本のトレンチを設定し、その結果、溝1条・竪穴住居跡3軒が検出された。これにより、本遺跡が奈良～平安の集落跡であることが明らかとなり、集落跡の範囲は、遺物の散布状態から2,500m²と推定されるに至った。今回の発掘調査は、集落跡2,500m²のうち、工事工法の変更が困難な1,500m²を対象に昭和55年5月19日から6月27日まで実施された。延日数は、30日間である。調査経過は、下記の通りである。

発掘調査日誌概要

- 5月19日 本日から調査区域1,500m²を対象に調査を開始する。調査区域は、開析谷に開かれた水田をはさんで約45m、東・西区に分かれているため、西区の調査を優先させる。午前中、発掘器材を地権者宅に搬入する。午後は、重機による表土剥ぎを西区南側から始める。
- 5月20日 西区南端にベンチマーク296.07mを設定する。約2/3の表土剥ぎを終了し、遺構検出作業にかかる。中央部で1号住居跡を検出する。
- 5月22日 昨日の台風3号による雨で、午前中西区の排水作業を行う。西区の表土剥ぎを終了し、北端にベンチマーク297.0mを設定する。1号住居跡の掘り込みを始める。東区の表土剥ぎを始める。
- 5月23日 西区1号住居跡の北側で、2・3・4号住居跡を検出する。
- 5月29日 ブレハブを設置し、発掘器材を地権者宅から搬入する。
- 6月2日 東区の表土剥ぎを終了し、ベンチマーク297.0mを設定する。10m間隔を基本とする基準杭を設定する。西区2・3号住居跡の掘り込みを始める。
- 6月3日 東区中央部で5号住居跡を検出する。但し削平により遺構の大半は失われ、東壁とカマドしか遺存していない。
- 6月4日 本日から本遺跡の調査と杉内C遺跡の表土剥ぎを並行して行う。5号住居跡の掘り込みを始め、地下式の煙道部を検出する。
- 6月6日 西区南端から10m間隔を基本とする基準杭を設定する。
- 6月10日 午前中、昨日の雨の排水作業に時間を費す。2号住居跡カマド東側に接した状態で4号住居跡カマドを検出する。
- 6月19日 西区南側の遺物包含層の掘り込みを始める。
- 6月24日 西区の全体測量を行う。
- 6月25日 東区の全体測量を行う。
- 6月27日 本日で、すべての発掘調査を終了する。

(阿部)

第2章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居跡

検出された住居跡は、東区で1軒西区で4軒、総数5軒である。住居跡同士の重複関係は西区で1ヶ所みるのみで他はすべて単独で検出されている。時期は伴出遺物が少なく不明確な点も多いが、概ね奈良～平安時代に位置づけられる。

1号住居跡 S101

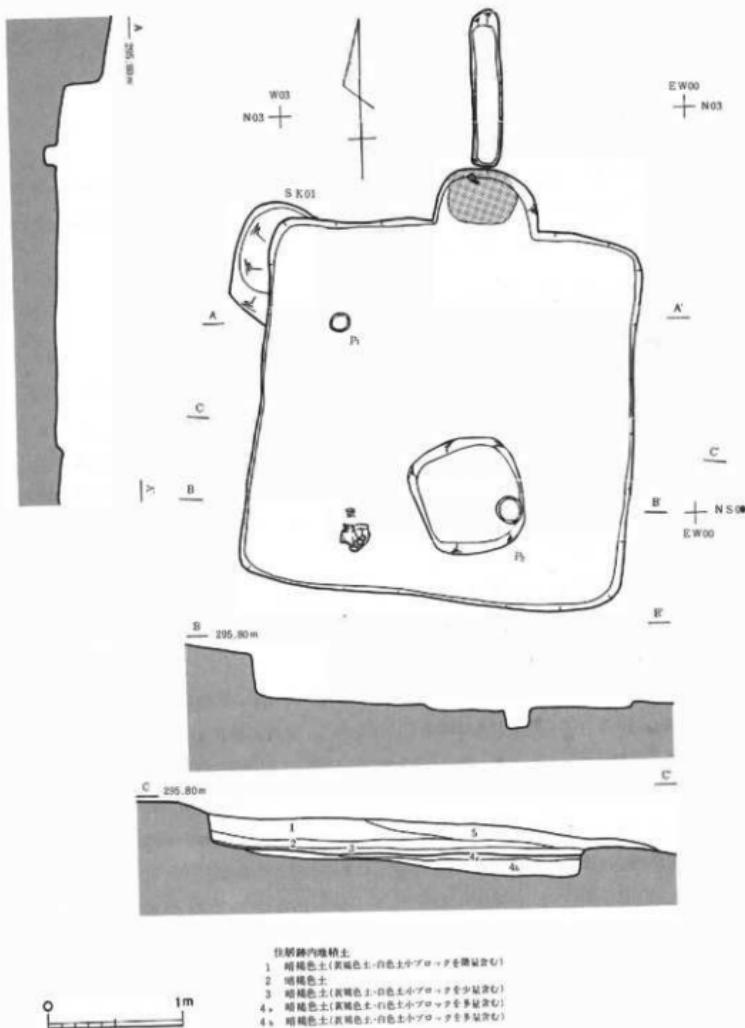
遺構(第3図、図版3・4)

C-7・8グリッドにかけて検出された住居跡で、調査区のなかでは最も南端に位置している。遺構検出面は西側斜面上方で黄褐色土層(VI層)、東側斜面下方で茶褐色土(III層)である。プランは、北壁にカマドを有す一辺約2.8mの方形を呈し、北壁と南壁の各中点を結ぶ軸線の偏度は、N-6°-Eを測る。遺構内堆積土は黒褐色土で、混入物により4層に細分されたが、大略西側斜面上方からの流れ込みによる自然堆積と考えられる。北西コーナーにおいて1号土坑と重複し、壁の一部を破壊されている。

残存壁高は、西壁で約20cm、東壁でわずか5cmを測り、約80°の傾斜角を持って立ち上がっている。床面は、黄褐色土や白色粘土を混入させた暗茶褐色土を5～15cm程度入れ貼り床としたもので、全般に踏み締まりが強い。

カマドは煙道をもつ構造で、北壁中央やや東寄りに位置している。燃焼部は北壁を住居外に45cm程度抉り込んでつくられ、焚き口幅は70cmを測る。煙道は幅20cm、120cmの長さで燃焼部奥壁から北側に延びているが、煙道基部は燃焼部奥壁とは連続せず3cm程度離れている。煙道自体3cmと浅いことからして多分に上部が削平されたためと思われる。煙道先端部の焼土は弱い。このカマドは袖部の検出もなく、火床面も壁を抉り込んだ部分でのみ確認されていることから、住居跡内にはほとんど張り出していなかったものと考えられる。

ピットは北西区に1個(P_1)、南東区に1個(P_2)計2個検出された。径約20cmの円形で深さ15cm程度のいずれも同様な規模の小ピットである。埋土は軟質な暗褐色土であるが、検出数や位置から柱穴とするには疑問の残るところである。また住居跡南半には85×80cmのほぼ方形で、浅く皿状に窪んだ部分が検出された。底面の状態は床面の踏み締まり具合と変りなく、床面構築時に意識的に窪ませたものか、使用の結果として窪んだのか判然としないが、底面の強度からすれば使用の結果としてとらえた方が妥当であろう。



第3図 1号住居跡

遺 物(第4図、図版21)

遺物の出土量は極めて少なく、堆積土内から土師器壺破片19点、土師器杯破片2点、須恵器杯破片1点、床面から土師器壺1点を数えるのみである。

〔土師器〕

壺(第4図1) 住居跡南西コーナー付近の床面から検出された遺物で、体部上半から口縁部にかけわずかに欠損している。口径15.2cm、底径9.2cmで最大径を口縁部にもつ。器高は14.9cmを測る。成形は体部下半から底部にかけ数段の接合痕がみられることから粘土紐の積み上げによってしたものと思われる。底部外側には木葉痕を残す。体部は若干の丸味をもって立ち上がり、外反して口縁となる。頸部での大きな括れはみられないが、体部との境いに軽い段が認められる。調整は口縁部両面ともヨコナデ、体部から底部の外側はヘラナデ、外側は器面の荒れによって観察が困難となっているが胎土中の砂粒が器表面から沈み込んでいることからナデ調整と考えられる。

ま と め

当住居跡は一辺2.8mと小規模であるが、カマド全体を住居外に張り出させ構築しており、狭いながらも住居内空間をより有効に使用しようとする意図が窺われる。

伴出遺物は土師器壺1点と少なく住居跡の時期決定を困難にしている。この壺は奈良時代を中心として前後に時間幅を有している土器であり、一応住居跡の時期も大きな年代幅でとらえておきたい。

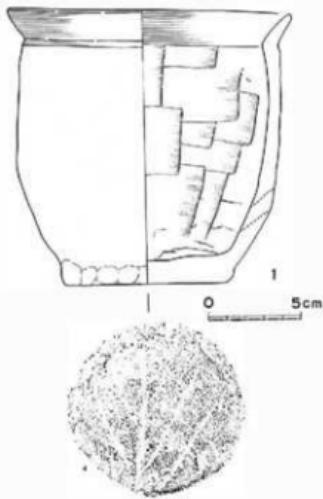
(松本)

2号住居跡 S102

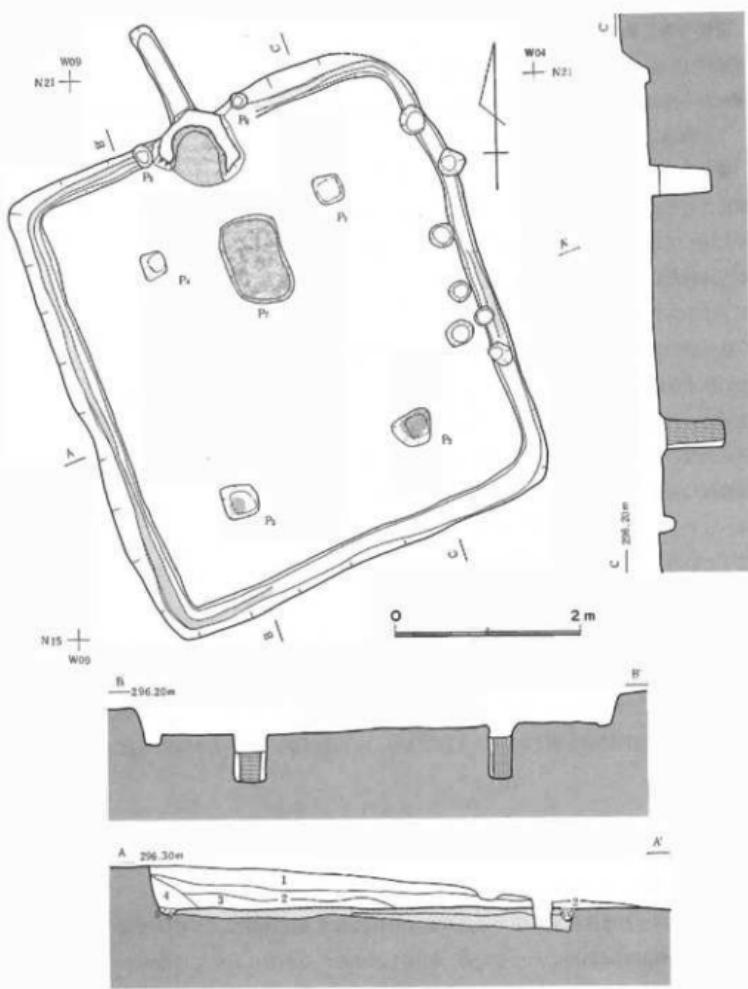
遺 構(第5図、図版5・6・7)

西区で確認された住居跡の中では最も北よりに位置する住居跡で、4号住居跡を切って構築されている。検出面は斜面にあたるため、斜面上部にあたる西方においては地山ローム面、下部にあたる東方においては茶褐色土(L-III)面である。

遺構内堆積土は斜面に沿って西側から東側に向かって順に堆積しており自然堆積と考えられる。床面は暗褐色土と黄褐色ロームとを5~20cm程度入れたたきしめたもので、西側に比較し東側が厚い。

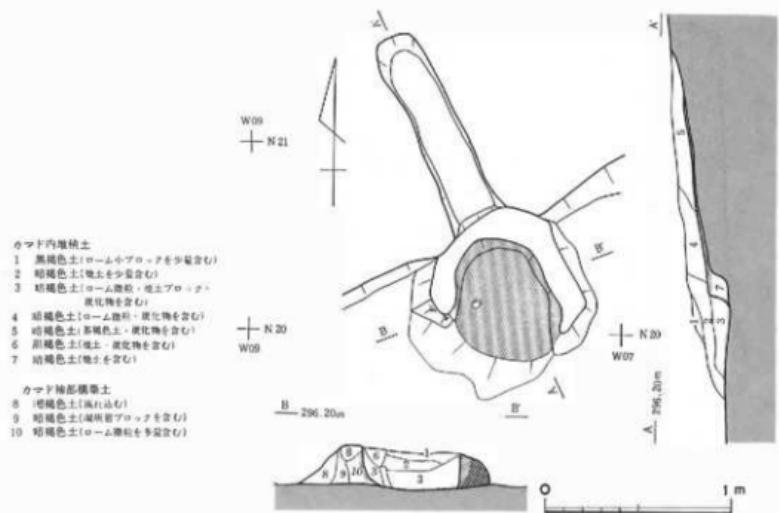


第4図 1号住居跡出土土師器



- | | |
|---------------------|------------------------|
| 住居跡内施設土 | |
| 1 黒褐色土(高麗瓦小ブロックを含む) | 4 細褐色土(ロームブロックを含む、堅膜層) |
| 2 暗褐色土(ロームブロックを含む) | 5 細褐色土 |
| 3 黒褐色土(砂利土を含む) | 6 黑褐色ローム |

第5図 2号住居跡



第6図 2号住居跡カマド

平面プランは、北壁にカマドを有す東西4.5m、南北5mの長方形で、南辺と北辺の中点を通る軸線の傾きは磁北より約20°西に偏している。壁は西辺で現存高約50cmを測るが、東辺では削平され遺存しておらず床面の周囲を巡る溝によって住居跡のプランが想定できるのみである。

カマドは破壊が著しいが、残りのよい右袖は住居北壁より60cm住居内へ張り出している。燃焼部内の広さは最大幅で55cm、焚き口部から奥壁まで65cmを測る。燃焼部奥壁は火床面から北壁ラインで10cm強立ち上がって煙道底面に移行する。煙道部幅27cm、長さ110cmで住居跡北壁に対しほば直角に取り付いている。

柱穴は住居跡対角線上に4個($P_1 \sim P_4$)検出されたピットが相当するものと考えられる。一辺30~40cmの方形を呈した掘り方で、柱痕から推定するに柱は一辺約20cmの角柱と思われる。この主柱の他にカマド両袖基部に計2個($P_5 \cdot P_6$)のピットが検出されたが、これはカマド上部の上屋に関連する柱穴と考えられる。

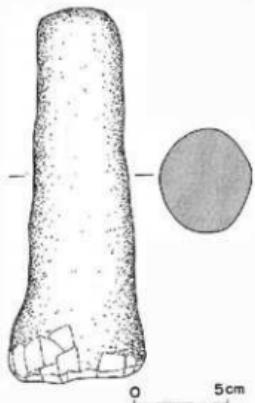
カマド前面には長辺100cm、短辺64cmを測る不整長方形を呈するピット(P_7)を検出した。床面からの深度は約10cmで堆積土は木炭粒を多く含み、底面が強く焼けていることが特徴である。

周溝はカマド部を除いて幅約20cmで住居跡を一周している。埋土は、検出面及びセクションから暗褐色土層と黄褐色ロームを基調とした層の2層に分けることができ、暗褐色土が約10cmの幅で周溝内に帯状に確認された。

遺物(第7図)

遺物の量はきわめて少なく、図化できたものは土製支脚のみである。他に覆土中より土師器片が34片出土している。

〔土製品〕



支脚(第7図) カマド燃焼部に設置された状態で検出された遺物で完形品である。長さ20cm、先端部径6.4cm、基部径7.3cmを測り、形態は棒状に近い。胎土は砂粒を多く含み、中央部から先端部にかけ火を受け磨滅しているが、特に先端部の磨滅が激しい。基部の側面には手持ヘラケズリの痕跡が観察される。

まとめ

本住居跡は南北にやや長い長方形を呈している。基本的

第7図 2号住居跡出土支脚 には4本柱の構造であるが、 $P_5 \sim P_6$ はカマドの上屋を高くするため補助的な支柱穴としてとらえられる。周溝内の暗褐色土の存在は側壁の板材の跡と考えることができるが、深さなどの点から断定はできない。住居跡の時期は遺物が少なく不確定であるが、堆積土中からの破片でみると、ロクロ土師器使用以前であることがいえる。(安田)

3号住居跡 S I 03

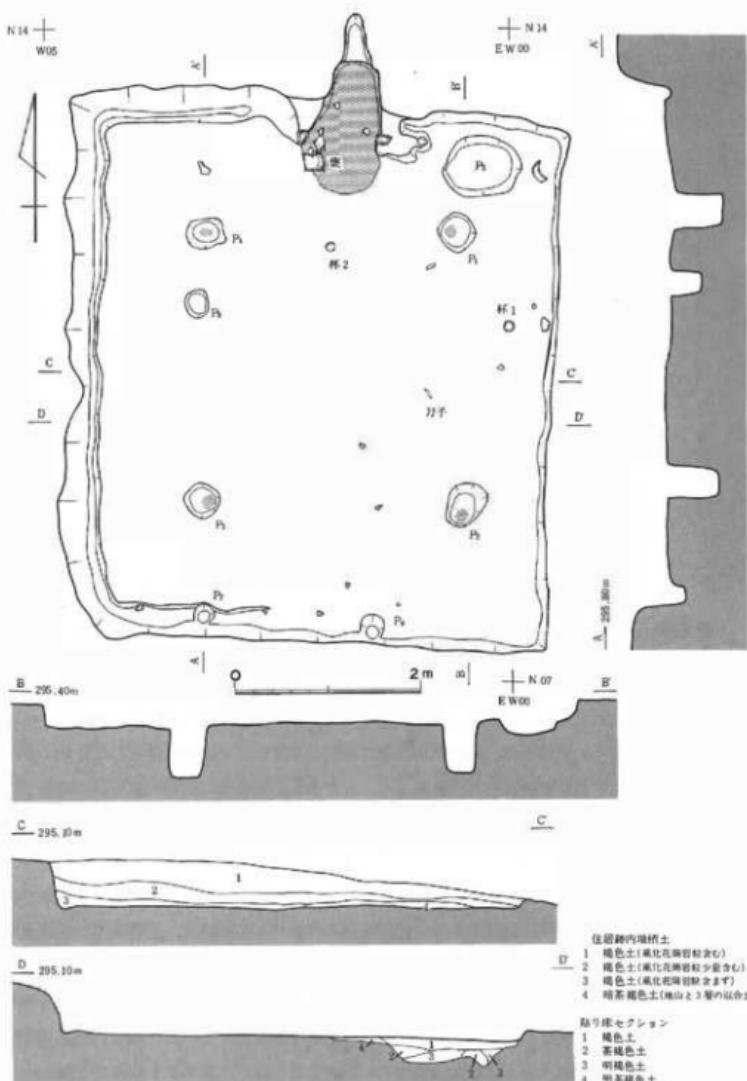
遺構(第8図、図版8・9)

本遺構は、西区中央部にあたるC-6・7グリッドで検出された。

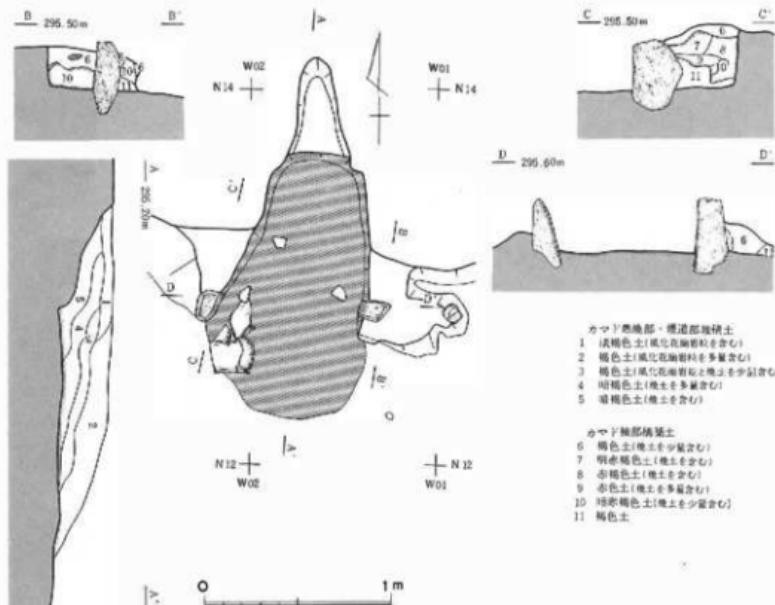
平面プランは、東壁5.6m、南壁4.9m、西壁5.8m、北壁5.3mで、東・西壁が、やや長い方形を呈する。南・北壁の中点を結ぶ軸線の傾きは、磁北より約2°東に偏している。北東コーナーから南東コーナーにかけて、後世の削平が著しく、東壁は5~10cm前後しか遺存していない。壁高は、最大が北西コーナー付近で62.9cm、最小が南東コーナー付近で3.3cmを測る。遺存の良好な西壁は、約80°の傾斜で立ち上がる。遺構内堆積土は、褐色土・暗茶褐色土など4層からなる。各層とも、斜面にそって西壁から東壁に向かって堆積しており、自然堆積土と考えられる。

壁溝は、カマド左袖から南壁中央部にかけて検出されたが、東壁では認められない。深さ約5cm、幅5~15cmを測る。床面は、ほぼ平坦であるが、西壁から東壁に向かって僅かに傾斜している。西側では、地山ローム面を直接床面とし、東側では粒子の粗い褐色土、茶褐色土を貼り床としている。

ピットは、総数8個($P_1 \sim P_8$)検出された。対角線上に並ぶ $P_1 \sim P_4$ が主柱穴で、各ピットのプランは、やや丸味を帯びた一辺35~45cmの方形である。床面からの深さと柱痕の径は、



第8図 3号住居跡



第9図 3号住居跡カマド

P_1 54 cm × 14 cm, P_2 52 cm × 15 cm, P_3 56 cm × 20 cm, P_4 52 cm × 13 cm である。底面は、ほぼ平坦である。カマド右袖近くの P_5 は、その位置から貯蔵穴と考えられる。長軸 85 cm, 短軸 64 cm の楕円形のプランである。堆積土は、東側から西側に向かって堆積し、3 層確認された。 P_7 , P_8 は、南壁中央部で検出された壁柱穴と考えられるピットである。径約 25 cm, 床面からの深さ約 10 cm である。 P_9 は、 P_3 , P_4 間に位置し、床面からの深さ 33 cm, 径 27 cm である。3 層の堆積土を確認したが、柱痕は、検出されなかった。柱穴とは、性格を異にするピットであろう。

カマドは、北壁中央部、やや東側寄りに付設されている。煙道部の大半は削平により失われているが、カマドの遺存状態は良好である。煙道を含めたカマドの軸線は、北壁に対しほば直交する。袖は、北壁から住居跡内に右袖で 63 cm, 左袖で 51 cm 張り出し、風化花崗岩粒子を含む粘土で構築されている。袖の先端は凝灰岩を袖石として使用し、袖石は床面下 10 ~ 20 cm を掘りくぼめ付設されている。焚き口幅 78 cm, 焚き口から燃焼部奥壁まで 88 cm を測る。燃焼部奥壁は、北壁から 32 cm 北側に張り出し、急な段差をもって煙道部へ続く。削平をまぬがれた煙道の長さは、51 cm である。

遺 物(第10図、図版21)

本遺構から出土した遺物の量は少ない。堆積土中からの遺物は、すべて破片状態で出土し、大半は土師器片である。須恵器片は数点にすぎない。遺構に伴うと思われる遺物は、主として遺構中央部から東側で出土している。

〔土師器〕

杯1(第10図1) 東壁近くの床面から出土したロクロ成形の杯である。体部から口縁部の一部を欠くが、全体の約2/3が遺存している。外面の調整は、底部周縁から体部下半まで手持ヘラケズリ、体部上半から口縁部までロクロナデを加える。内面は、底部に一方向のヘラミガキ、体部から口縁部に横方向のヘラミガキを行い、さらに黒色処理されている。体部から口縁部にかけての立ち上がりは、多少内彎気味である。底部外面に線刻があり、「九」と読める。器高3.1cm、底径6.0cmで、推定口径11.3cm。

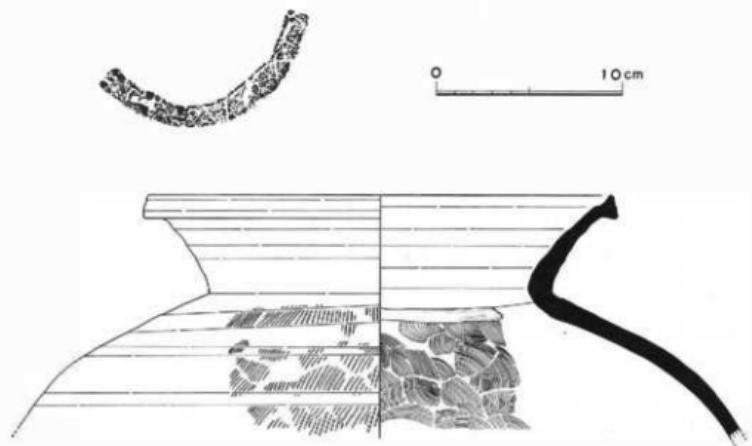
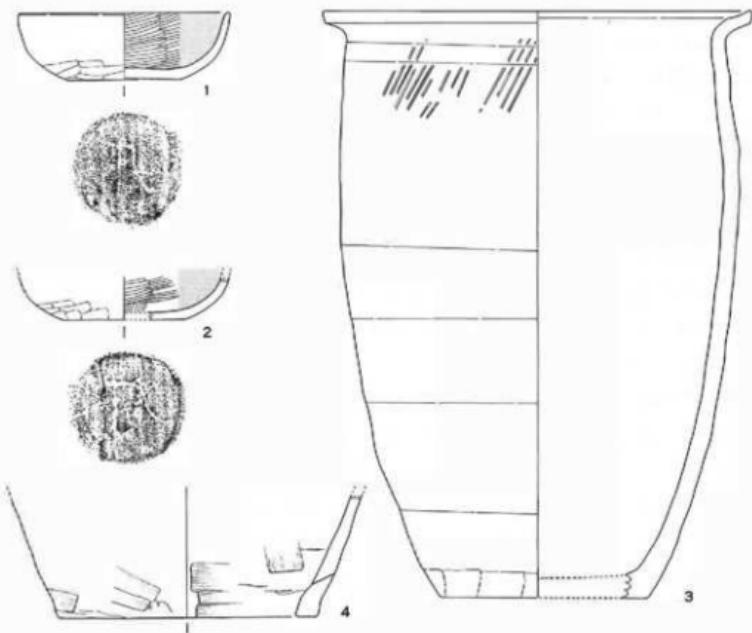
杯2(第10図2) カマド燃焼部南側の床面で検出された。体部の一部と底部が遺存している。成形はロクロによる。器面調整と体部立ち上がりは、杯1と同一で、さらに底部外面に「九」の線刻を有している。底径6.4cm、残存高2.3cmを測る。

壺(第10図3) カマド左袖際から出土した壺で、体部中央部の一部と底部を欠くが、ほぼ完形である。成形はロクロによる。胎土に1~2mm大の石英質粒子を含み、焼成は良好である。外面の調整は、頸部から口縁部に平行タタキ目を加え、さらに口縁部から体部をロクロナデにより仕上げている。体部下端は、器肌の荒れのため不明瞭であるが、ヘラケズリを行ったと思われる。内面は、器肌の荒れが著しく、確認されなかった。体部は、わずかに丸味を帯びて立ち上がり、頸部で「く」の字状に外傾し口縁部に至る。口縁端部は、面取様に引き出され稜を作るが、わずかに丸味を帯び緩く外傾している。体部の一部に二次加熱によるススの付着が認められ、上半から下半にかけて広い範囲に渡って、カマド構築土と思われる粘土がはりついている。器高31.4cm、口径23.0cm、復元による底径11.0cm。

瓶(第10図4) 遺構北側の堆積土内から出土した無底の瓶である。体部下端と底部の一部が遺存している。多量の砂質粒子を含むが、焼成は良好である。調整は、内外面とも横方向のヘラナデを認めるが、器肌の荒れのためやや不明瞭である。推定底径13.8cm、残存高7.0cm。

〔須恵器〕

壺(第10図5) 破片が散乱した状態で出土した壺である。出土地点は、北東コーナー、P₄北側東壁中央部付近の床面とカマド煙道部の4ヶ所にまたがり、破片のうち3点は、遺構南側の堆積土から出土している。遺構に共存する遺物と考えられるが、断定できない。口縁部、体部の一部が遺存している。胎土は緻密で、焼成は良好である。器面調整は、口縁部内外面ともロクロナデを加える。外面は、頸部から体部に平行タタキ目を施し、さらに2.0~2.5cm間隔で、1.0~1.5cm



第10図 3号住居跡出土土師器・須恵器

幅のナデにより仕上げてある。

内面は、体部に同心円状のアテ具痕が認められ、頸部にナデを加える。体部立ち上がりは、丸味を帯びて内彎し、頸部で強く「く」の字状に外傾し、口縁部に至る。口縁端部は、

上下に稜を有し、直線的に内傾している。

推定口径 24.8 cm、残存高 12.5 cm。

〔鉄製品〕

刀子 1 (第11図2) P_1, P_2 のほぼ中間の床面から出土した。鏽化が進行している。茎部の一部を欠くが、ほぼ完形である。平棟平造りである。断面は、茎部が方形、刃部が二等辺三角形を呈する。刃は、切先に向かってわずかに傾斜する。現存長 11.1 cm、うち茎部 4.0 cm。刃部幅、棟幅は、刃部中央部で 1.0 cm, 0.3 cm を測る。

刀子 2 (第11図3) P_1 南西側付近の床面から出土した。刃部と茎部の一部を欠損する。平棟平造りで、刃部・茎部の断面は、二等辺三角形・方形を呈する。刃と棟は、切先に向かってわずかに傾斜する。現存長 11.3 cm、うち茎部 1.6 cm。刃部幅と棟幅は、最大で 2.5 × 0.3 cm を測る。

〔石製品〕

磨石 (第11図1) P_3 南側の床面で検出された。石質は細粒花崗岩である。最大長 11.0 cm、最大幅 9.1 cm、厚さ 5.2 cm を測る。全面を利用しているが、磨滅は表裏面に顕著である。

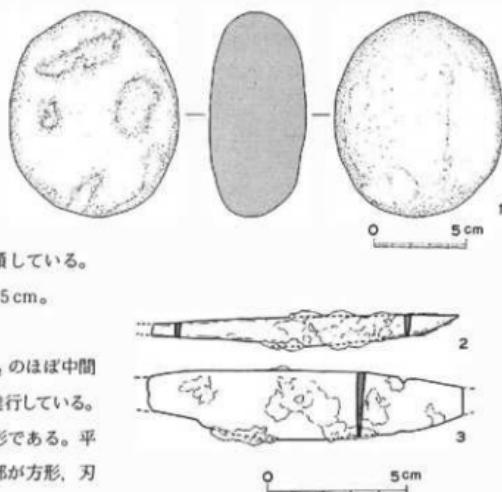
ま と め

本遺構は基本的に四本柱の方形を呈する住居跡である。カマドは燃焼部が住居外に張り出し、より密室的な構造といえる。出土遺物で上記した磨石のはかにカマド左袖脇床面から 21 × 15 cm、厚さ 5 cm 程度の、表裏二面が僅かに皿状に窪んだ偏平な黒雲母片岩が出土したことを付記しておく。住居跡の時期は床面から出土した土器器杯によって、ロクロ土器使用段階に位置づけられる。(阿部)

4号住居跡 SI04

遺構(第12図、図版10)

2号住居跡と重複し大半が破壊されているため、壁は南辺と北東コーナー部の一部分しか確認



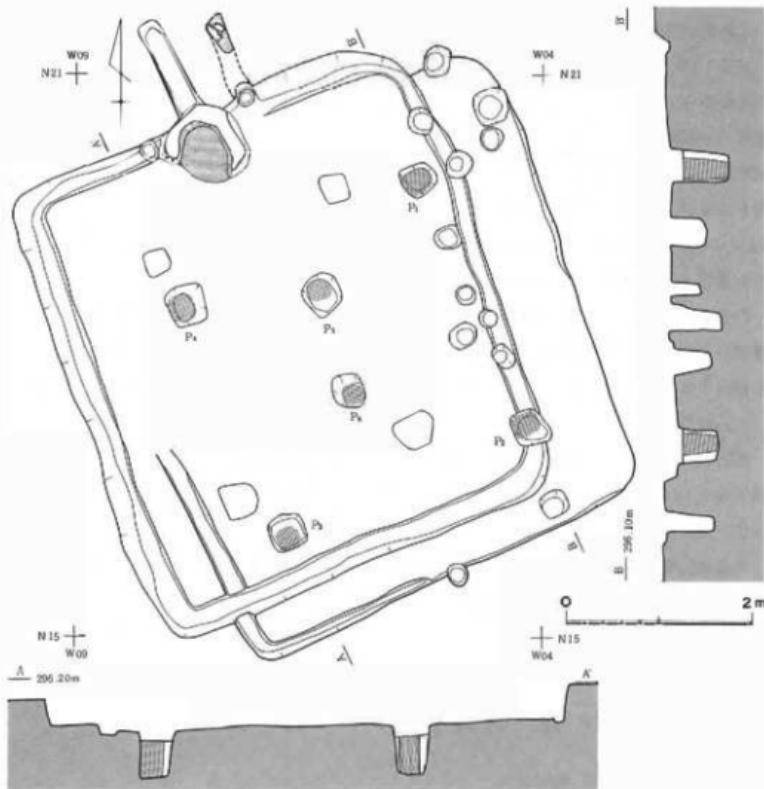
第11図 3号住居跡出土石器・鉄器

されなかった。検出面は2号住居跡と同様地山ローム面とL-III黒褐色土面である。

遺構内堆積土は確認部分が限られていたため明らかにはできないが、南辺部にわずかではあるが将棋倒し状の堆積が認められた。床面は暗褐色土と黄褐色ロームを入れてたたきしめたもので、2号住居跡の床面とはほぼ同様である。

平面プランは残存部から推定すると、一辺4.5m前後の方形を呈していたと思われるが、柱穴及び煙道の位置から考えると、やはり南北にやや長いプランを有し、住居跡の軸線もほぼ2号住居跡と同様と考えられる。

カマドは2号住居跡の北壁に煙道部のみ確認されている。煙道は地下式のもので2号住居跡北

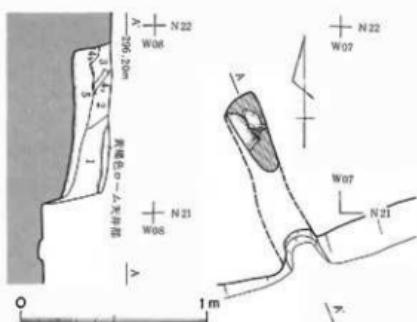


第12図 4号住居跡

壁より85cm外方へ伸びたところで煙出し部となっており、壁面は全体的によく焼けていた。煙出し部には、底部を欠いた土師器の長刺甕が検出されている。

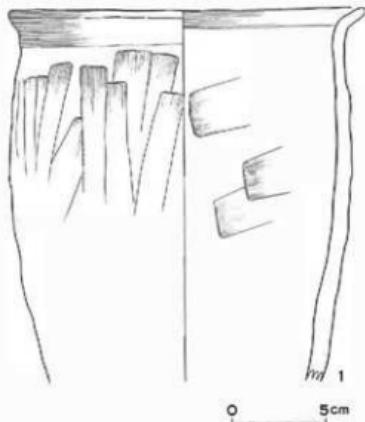
ピットは6個($P_1 \sim P_6$)検出されており、 $P_1 \sim P_4$ は一辺40cmの方形で深さ約50cmを測り主柱穴と考えられる。 $P_5 \cdot P_6$ は他の4個に比べてみると、平面は差程変わらないが、深さ10~20cm程度浅く、明確に柱痕と思われるものも検出されてないが、その位置から上屋を想定すれば棟持ち柱の柱穴と考えることも可能である。柱痕の確認できたものは角柱と考えられるものが多い。

周溝は南壁西半から西壁南半にかけて検出された。深さ3~5cm、幅10~20cmを測る。埋土は暗褐色土で2号住居跡のそれと同様である。2号住居跡のプラン内に延びる西壁の周溝は2号住居跡の床面をはいだ時点での確認された。この点からも2号住居跡と4号住居跡の重複関係が妥当であるといえよう。



- カマド内埋土
 1. 暗褐色土(瓦築色ロームブロック・複数岩小ブロック・地土を含む)
 2. 暗褐色土
 3. 暗褐色土(瓦築色ロームブロック・複数岩小ブロック・地土を含む)
 4. 黄褐色ローム
 4a. 黄褐色ローム
 5. 暗褐色土(複数岩小ブロック・地土を多量含む)

第13図 4号住居跡カマド



第14図 4号住居跡出土土師器

遺物(第14図、図版21)

遺物はカマド煙出し部より出土した土師器の壺と、土師器破片2点のみである。

〔土師器〕

壺(第14図1) カマド煙出し部より出土した土師器で、体部下半から底部にかけて欠損している。最大径を若干外反する口縁部に有する長脚の壺で、一部火をうけて脆弱になっている。調整は口縁部ヨコナデ、体部外面は縦方向、内面は横方向のヘラナデを施している。口径19cmを測るが高さは不明である。

まとめ

当住居跡の柱は6本と考えられ他の住居跡の上屋構造との相異が推定される。住居跡の時期

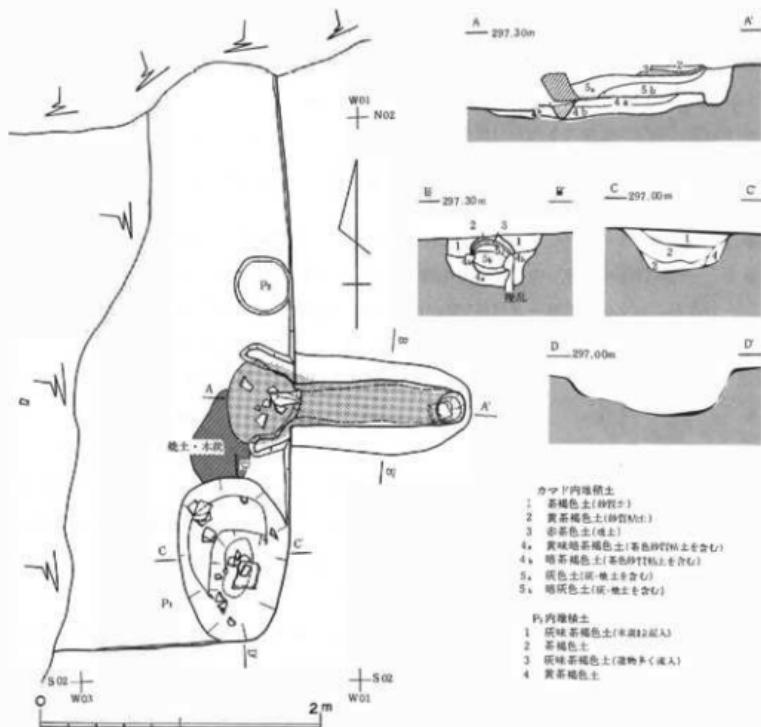
は、図化できた遺物が僅一点だけのため、その判断は困難である。

(安田)

5号住居跡 SI05

遺構(第15図、図版11~15)

東区のはば中央に検出された住居跡である。後世における削平や攪乱が著しく、現存部分は住居跡全体の規模を想定してみた場合、東側約1/3程度とみることができる。壁は東壁が比較的



第15図 5号住居跡

良好な残りで4m、南壁が1.5mの長さを測る。壁高は最大高で9cmである。埋土は黄褐色砂質土が東壁際に幾分堆積しているのみで主体は暗褐色砂質土である。床は東壁から1~1.7mの幅で遺存しており、地山である黄褐色砂質土をそのまま床面としている。

内部施設としては、カマドとピット(P_1, P_2)2個が検出された。

カマドは東壁や南寄りに検出された。地下式の煙道をもつ構造で、カマド軸線は壁に対しほぼ直角に取り付いている。焚き口部幅60cm、焚き口から燃焼部奥壁まで50cmを測る。奥壁近くには、高さ約20cmの割石が据えられてあった。袖は、灰味茶褐色砂質粘土でつくられ、壁面に対し「ハ」の字状に取り付けられている。幅15cm弱、長さ30~50cmを測る。煙道部は地下式であるが前以て短軸65cm、長軸175cmの梢円形に広く掘り窪め、そこに砂質土と砂質粘土とで煙道を構築し地下式としている。煙道先端部は径15cmのほぼ円形に煙道底面よりも8cm程掘り込んである。

P_1 はカマド右脇で住居跡の南東コーナーに位置している。短軸80cm、長軸115cmの平面梢円形で深さ30cmを測るが、ピット北半の中位に幅約20cmの平坦面がある。埋土は木炭粒を含む自然堆積層で、底面付近に遺物の混入が多い。

P_2 はカマド左脇にあたり、径約40cmのほぼ円形を呈し深さ10cmを測る。埋土は暗茶褐色土の單一層であるが、粒子が均一なことから自然堆積層と判断される。

P_1, P_2 とも住居使用時には開口していたもので、貯蔵穴としての機能が考えられる。

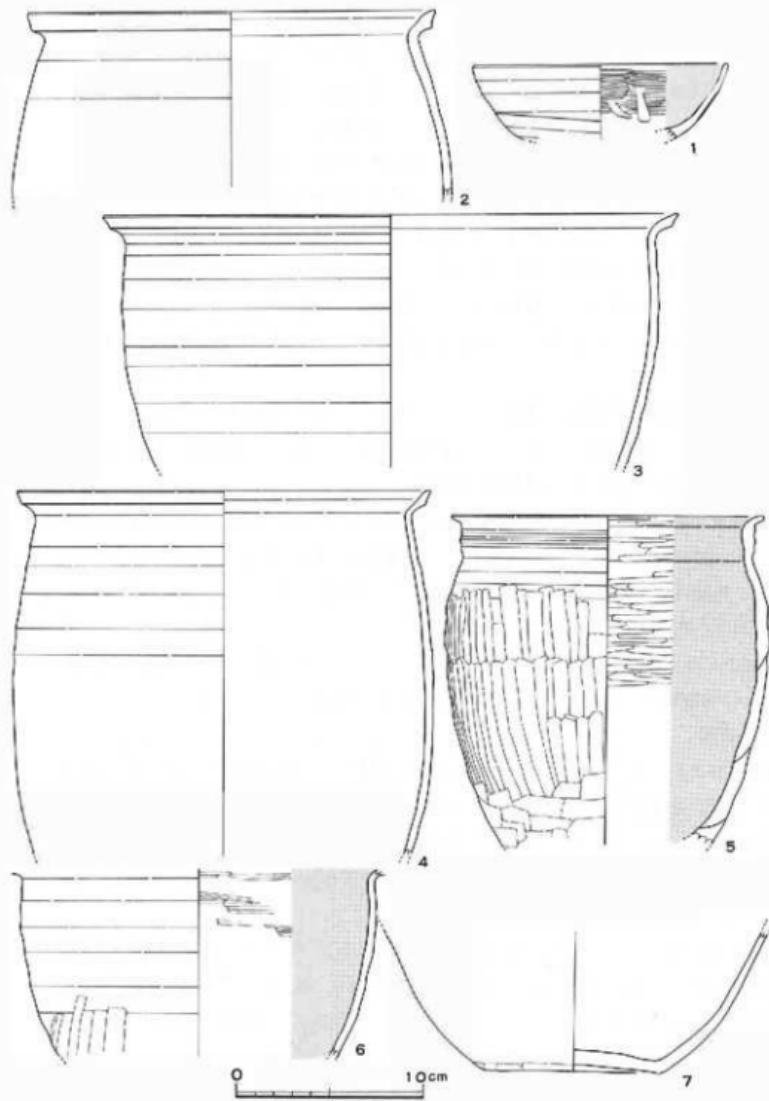
遺物(第16図、図版21)

住居跡に伴うと考えられる遺物の出土状況は、カマドと貯蔵穴から集中して検出されている。大半が土師器類で、須恵器は壺の胴部破片1点のみである。

〔土師器〕

杯(第16図1) カマド燃焼部内から検出された遺物で、口縁部から体部下端にかけ約1/5の破片である。推定口径13.5cm、現存高4cmを測る。ロクロ成形で外面の調整は体部下半以下が回転ヘラケズリ、内面はヘラミガキに部分的なナデを加え黒色処理している。検出地点がカマドの内であるが、内面の黒色が消失せずに残っていることからカマド廃棄時以後に流れ込んだものと考えられる。

壺1(第16図7) カマド内と P_1 内から検出された破片が接合したもので、底部から体部下半にかかる遺物である。底径10cm、現存高7.5cmを測り、底部は若干揚げ底気味である。器肉は底部で8mm前後、体部下半で4~6mmを測る。調整は、体部下端に横位の手持ヘラケズリがみられ、内面では底部にヘラミガキ、体部下半は幾分ヘラミガキが施されていると思われるが基本はナデ調整で黒色処理されている。カマド内から検出された破片の内面では黒色が一部消失しているため、カマド廃棄以前に破損し破片の一部がカマド内に紛れ込んだものと思われる。



第16図 5号住居跡出土土師器

壺2(第16図6) P₁ 内堆積土第3層から検出された遺物で、頸部から体部下間にかかる破片である。推定頸部径18.8cm、現存高9.8cmを測る。成形にはロクロを使用した痕跡が外面に残る。内面の調整は、頸部付近では横方向のヘラミガキが密に施されているが、頸部以下はナデ調整が基本となりヘラミガキは疎らとなる。外面では、破片の下位に縦方向の軽いケズリがみられる。

壺3(第16図5) P₁ 内南西隅底面付近から検出された遺物で、口縁部から体部下端にかけ1/2程度を遺存している。推定口径16.8cmであるが最大径は体部半ばやや上にあり17.4cmを測る。現存高17.4cmである。体部下端付近の欠損状況からみて程無く底部となると思われ、量感に溢れた安定のある器形になると考へられる。頸部はこの時期の一般的な壺とは異なり、やや長めに一旦垂直に立ち上がった後短く開いて口唇となる。ロクロ成形で、外面の調整は頸部に近い部分を残して大部分が縦方向の手持ヘラケズリ、体部下端に至って横方向の手持ヘラケズリである。内面は黒色処理されているが、口縁部から体部上半はヘラミガキ、体部下半はナデ調整が施されている。

壺4(第16図2) カマド内から検出された遺物で、口縁部から体部上半にかけ約1/4が遺存している。推定口径21.8cm、現存高9.8cmで最大径は胴部半ばにあると思われる。ロクロ成形で、頸部は大きく「く」の字状に曲げられ口唇部は面取りされ上下の稜線が明瞭に作り出されている。その他これといった調整痕は観察されない。

壺5(第16図3) 煙道先端部から検出された遺物で、口縁部から体部下間にかけ約1/5が遺存している。推定口径30.6cm、現存高13.4cmであるが最大径が口縁部にあることから形態的には鉢に近い。ロクロ成形で、頸部から口唇部の形態は壺4同様「く」の字状に屈曲し、口唇上下に稜を作り出しているが、口唇端面の傾斜角は壺4より緩やかである。外面には煮え溢れと思われる黒色の付着物が部分的にみられる。

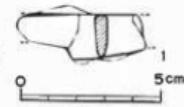
壺6(第16図4) P₁ 底面より5cm程度浮いた状態で検出された遺物で、口縁部から体部下間にかかる1/4の破片である。推定口径22cm、現存高19.5cmで、最大径は胴部半ばにあり22.4cmを測る。ロクロ成形で、頸部から口縁部にかけての形態は壺5に類似するが、口唇端部の傾斜角は壺5より若干きつい。体部半ばから下半にかけての外面には筋入りの粘土が薄く付着している。

〔鉄製品〕

刀子(第17図1) 住居跡検出面から出土した刀子で茎を中心とし刃部の一部を残す。現存長45mmで茎の部分は18mm、刃部は27mmを測る。全体に著しく錆化しており刃部の断面は鈍角となっている。

まとめ

当住居跡は大半が破壊されていたが、カマドや貯蔵穴を含む部分が残存していたため、遺物も



第17図 5号住居跡出土鉄器

数多く採取できた。カマドの掘り方は煙道部だけではなく燃焼部の下部にも至っていることから、煙道部の構築のみならずカマド全体の除湿も考慮に入れた方法であると考えられる。貯蔵穴としたP₁からの遺物出土状況は完形品もなくすべて流れ込みの状況を示しているところから、本来この貯蔵穴は土器以外のもの置き場としていたと思われる。当住居跡の時期は検出された土師器杯の外面調整から考えて3号住居跡よりは後出するロクロ土師器使用時期に位置付けられる。(大越)

第2節 土坑・その他

ここでとりあげるのは、土坑5基、柱列2本、ビット群、溝3条、耕作跡2ヶ所、包合層、表土出土の遺物についてである。

土 坑

土坑は東区1基、西区に4基検出された。その性格や時期については調査の状況からつかみえなかったため、以下事実報告にとどめておく。

1号土坑 SK01(第18図)

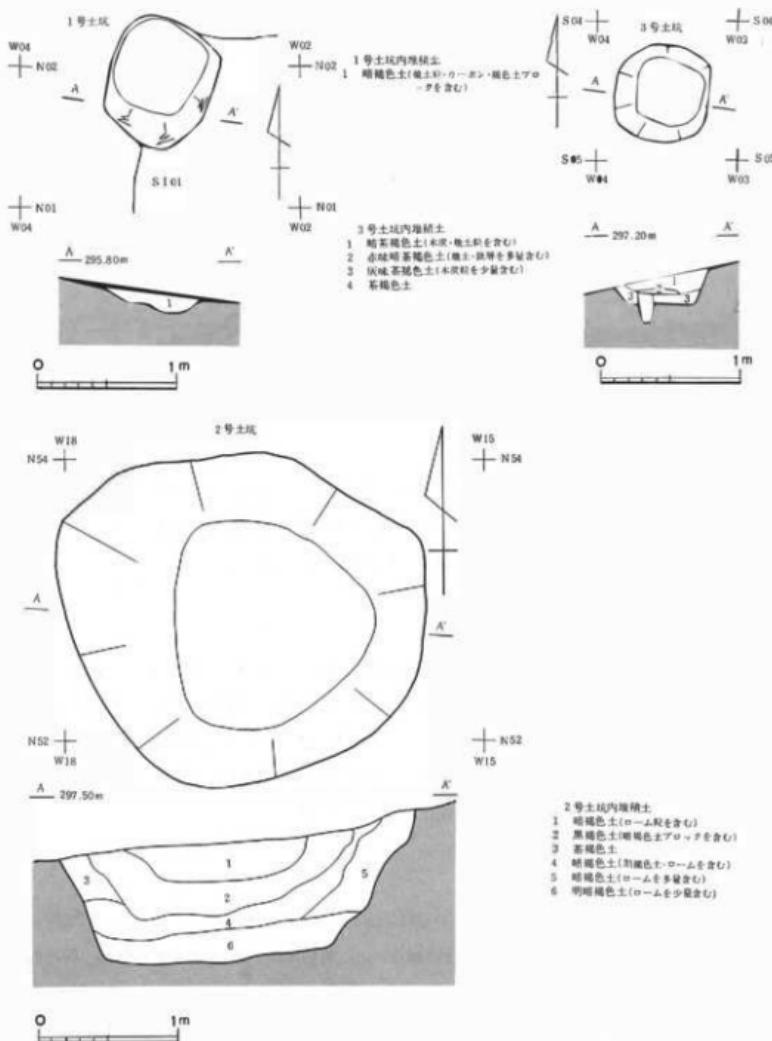
第1号住居跡の北西コーナーを一部切って構築されている。平面プランは長軸87cm、短軸74cmの不整隅丸方形を呈し、確認面よりの深さは12cmを測る。堆積土は焼土、木炭、褐色土ブロック(地山土)を混入するやや綿りの弱い暗褐色土で、堆積状態は堆積土が一層であるため人為堆積、自然堆積とも判断し得ないが、底面・壁面とともに加熱を受けた状態が観察されない事から、焼土・木炭が投げ入れられた事が考えられ、人為堆積の可能性が強い。壁は北、西壁は急傾斜で立ち上がるが、南東壁では緩やかに立ち上がっている。底面は西側より緩やかに傾斜している。遺物は土師器の小片が数片出土したのみであり、時期、性格ともに不明である。 (松本)

2号土坑 SK02(第18図、図版16)

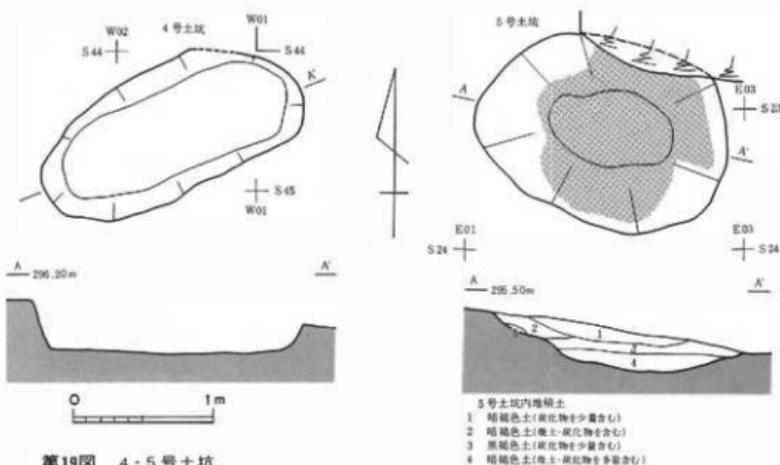
B-2グリッドで検出された土坑で調査区北端に位置している。平面プランは長径250cm、短径230cmの不整円形を呈し、確認面よりの深さは100cmを測る。壁は急傾斜で立ち上がり、底面には凸凹が認められる。堆積土は1~6層に分層され、レンズ状で自然堆積と理解される。遺物の出土はなかった。 (松本)

3号土坑 SK03(第18図、図版17)

5号住居跡の南側に検出された土坑で、直径約70cmの円形を呈している。底面はほぼ平坦で、



第18図 1～3号土坑



第19図 4・5号土坑

壁は直線状に50°～70°の角度をもって立ち上がる。埋土は、底面付近に木炭粒を僅かに含む灰味茶褐色砂質シルトが7cm程度堆積し、木炭・焼土を含む暗茶褐色砂質土との間に、焼土とスラグの層が薄く挟まれている状況を示している。時期を考定する遺物はない。

(大庭)

4号土坑 SK04(第19図)

C-12グリッドで検出された土坑で調査区南端に位置する。平面プランは長軸196cm、短軸90cmの梢円形を呈し、確認面よりの深さは33cmを測る。壁は急傾斜で立ち上がり底面はほぼ水平である。堆積土は暗褐色のシルト質土をベースに混入物により3層に別けられた。堆積状態は東西方向からの交互の堆積が観察されたが、自然堆積とも人為堆積とも判断し得なかった。遺物は2点の土師器破片が堆積土中より出土したものである。

(松本)

5号土坑 SK05(第19図)

C-10グリッドで検出された土坑で、1号耕作跡の南1mに位置する。平面プランは北壁の一部が、後世の削平を受けているものの長軸180cm、短軸130cmの平面不整梢円形、断面皿状を呈する。遺構確認面からの深さは38cmを測る。堆積土は1～4層に分層され、いずれの層にも焼土・カーボンが含まれている。堆積状態はレンズ状の堆積が認められ、自然堆積と考えられる。壁は緩やかに立ち上がっており、底面は熱変している。遺物は土師器小破片が堆積土中より數片出土したのみである。

(松本)

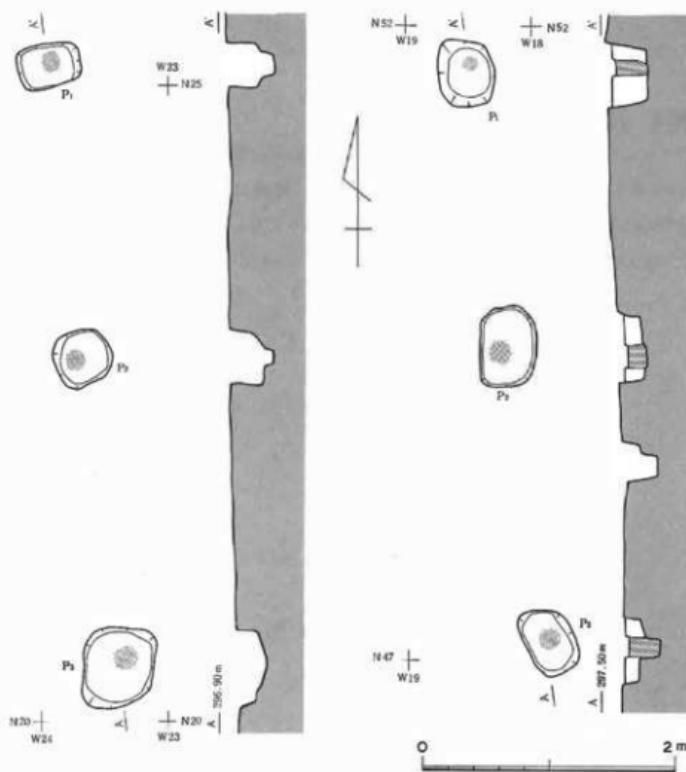
柱 列

柱列は西地区にのみ2本検出されている。各々1号・2号としたが、規模・構造等極めて共通性をもっている。

1号柱列 SA01(第20図)

B-5グリッドに検出された柱列で、柱穴3個($P_1 \sim P_3$)で構成されている。柱間は北から2.30m + 2.40mを測り、柱痕を通る軸線は磁北から7°西へ偏している。掘り方は一辺40~60cmの不整隅丸方形であるが、 P_1 と P_2 は掘り方底面よりも柱にあたる部分を5~10cm程度深く掘り込んでいる。遺構内からの遺物の検出はない。

(大越)



第20図 1・2号柱列

2号柱列 SA02 (第20図、図版18)

B-2・3グリッドに検出された柱列で、柱穴3個(P_1 ～ P_3)で構成される。柱間は2.30mを測り柱痕を通る軸線は磁北から7°西へ偏している。掘り方は一辺40～60cmの不整隅丸方形で、深さは15～30cmを測る。柱痕は径15～20cmと考えられるが、 P_2 に比較し P_1 と P_3 の柱は多少深めに据えられている。埋土は、柱痕には黒色シルトが入り込み、掘り方は風化花崗岩もしくは凝灰岩の粒子を多く混入した黒褐色砂質シルトがたたきしめられている。遺構内からの出土遺物はなく、時期について不明である。

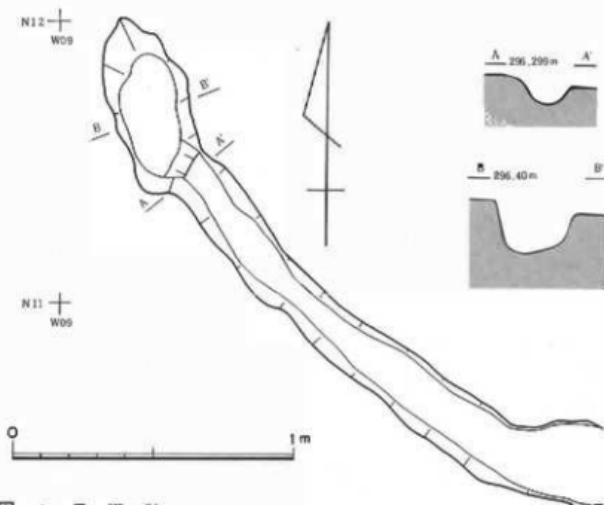
(大越)

溝 跡

西地区に3条検出されている。いずれも奈良・平安時代の竪穴住居跡群よりは後出する遺構であろう。

1号溝跡 SD01 (第21図)

C-7グリッド内に検出された溝で、3号住居跡の西側に位置している。若干彎曲しているが全長4.9mを測る。幅45～60cm、深さ10～15cmで、底面は東南方向に緩やかに傾斜している。溝跡の北西端では溝底面よりも約15cmの段差をもってピット状に落ち込んでいる。検出面からの最大深度は36cmを測る。上場の平面も溝全体からみれば多少膨らんだ状態を示している。



第21図 1号溝跡

埋土は、茶褐色シルト質土がブロック状に混入した暗褐色砂質土である。堆積土中からは土師器甕破片4点が検出されたが、直接遺構に伴うものではない。

(阿部)

2号溝跡 SD02

西区中央部で検出した。2・4号住居跡と切合い関係にあるが、新旧関係は本遺構のほうが新しい。南・北端ともさらに延びていたと思われるが、削平されて遺存していない。全長約13.5m。幅17~34cm。検出面からの深さは、最大で15.4cm、最小で6.5cmを測る。底面は丸味を帯び、壁は緩やかに立ち上がる。溝跡の断面は全体で半円状を呈する。堆積土は黒褐色土の単層で遺物の出土はない。

(阿部)

3号溝跡 SD03(第22図)

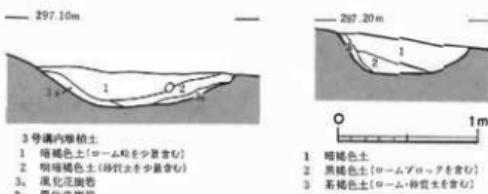
本遺構は、西区北半の東側斜面で検出された溝で、北端において鉤の手に東へ方向を転じていて。さらに東方・南方に延びていたと思われるが、削平により遺存していない。現存長52.3m、最大幅3.5m、最小幅1.4mを測

り、検出面からの深さは最大で約30cmである。壁の立ち上がりは緩やかで、底面はほぼ平坦であるがわずかに丸味を持っている。堆積土は自然堆積層が3層確認されている。

遺物は、すべて堆積土から出土した。土師器片・須恵器片2点を数える。外に団化できた小型の陶器1点が、底面近くの堆積土から出土している。小型の陶器(第23図)は、口縁部を欠くが、ほぼ完形である。胎土は、緻密で焼成は良好である。内外面は、ロクロナデで調整し、さらに全面を鉄釉で仕上げてある。外面底部は糸切り痕を有している。底径3.9cm、残存高2.1cmを測る。

この溝の時期は、上記した遺物の中で最も時代の下る小型の陶器の使用時期(近世以降近代?)が上限として考えられる。

(阿部)



第22図 3号溝跡

第23図 3号溝跡
出土陶器

耕 作 跡

1号耕作跡(第24図)

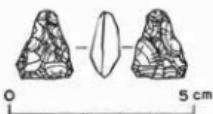
本遺構は、西区南側斜面で検出された。遺構の東半は、すでに削平されて遺存していない。西

辺の長さは、8.6mを測る。堆積土は有機質に富む黒褐色土である。斜面上方の西側には、幅50～70cmの溝がとりついている。深さは地山検出面から60cm程度を測り、掘り込み底面から20cm前後を測る。底面はほぼ平坦である。掘り込みの南・北辺は削平のため西側の一部しか残存していない。本来は東側へ延び、全体的に平面方形を呈していたと思われる。遺物は堆積土中から土師器杯破片5点、同甕破片79点、須恵器甕破片2点を検出しているが、すべて遺跡の主体をなす集落跡からの混入と考えられ、直接時代を検討する資料にかけている。

(阿部)

2号耕作跡(第2図、図版19)

西区北端の斜面で検出された遺構である。削平により遺構の東側は失われており、西側のみ遺存している。西辺の長さは13.7mで、南・北辺はそれぞれ1.8m・5.5m遺存している。西辺は、



ほぼ垂直な段差をもって落ちこみ、平坦面に続く。堆積土は、
1号耕作跡と同様であるが疊まじりの地山を掘り込んでいるせいか小石の混入が多い。

遺物は、すべて堆積土から出土している。土器片の内訳は、
土師器甕片84点・土師器杯片4点・須恵器甕片1点である。いずれも破片状態で出土した。他に図化できたものとして頁岩製

で基底部に抉りがない平面二等辺三角形を呈する石錐一点がある。

検出状況から規模の相異はあるが、1号耕作跡と同じものと考えられる、本遺構の時期については不明である。

(阿部)

ピット群(第25～27図、図版20)

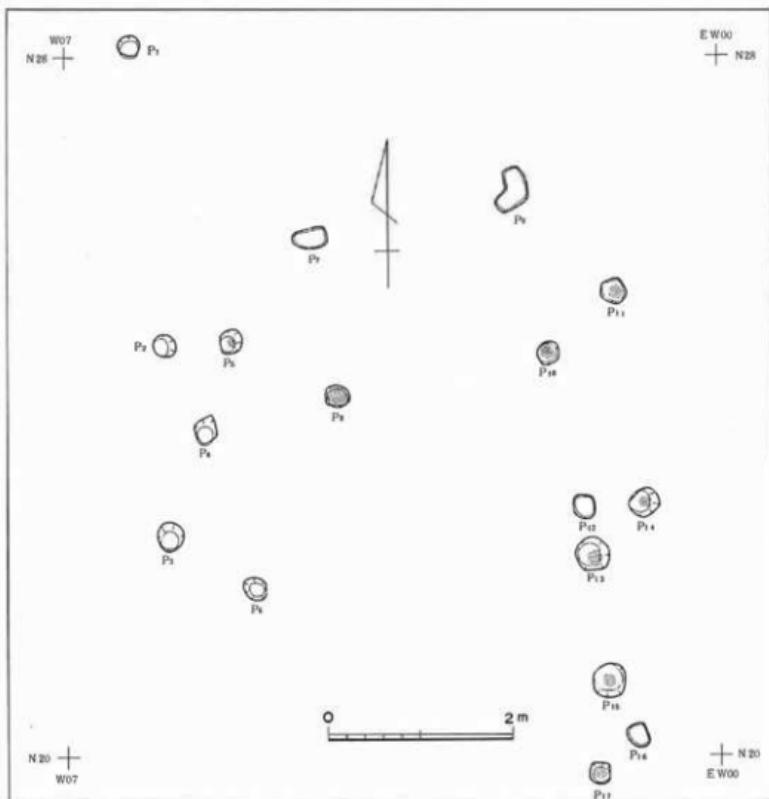
遺跡の立地する舌状台地の裾部に多く認められ、C列の5・6グリッド部分で多く検出されている。2・4号住居跡、D-9グリッド付近の耕作跡と重複しており、いずれもピット群のほう

が他の遺構を切った状態で検出されている。検出面は、ほとんどがし—Ⅱ黒褐色土面であるが、台地のやや上部にあたる部分では一部地山ローム面で確認されている。

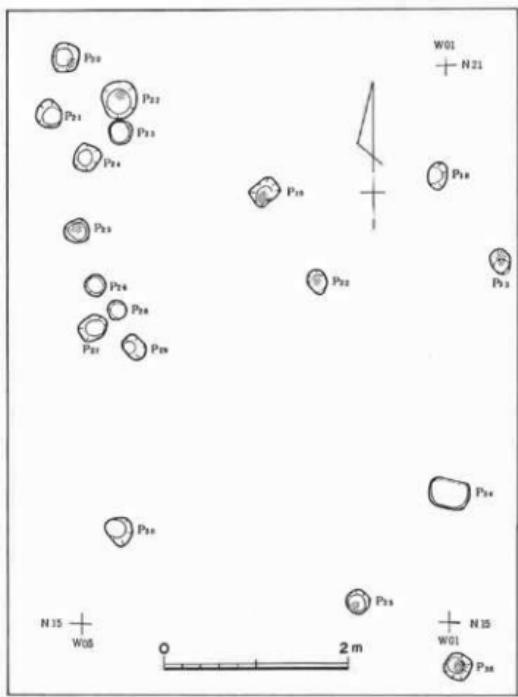
ピットの総数は40個であるが、掘り方自体が小さく深さも深いもので70cmにおよぶものもあるため、充分なセクション観察ができず、明確に柱痕の存在が確認できたものは15個と限られている。柱痕の確認できなかったものも含めて組み合わせ及び平面形を検討したが、建物跡となるよう組み合わせは認められず、その性格は不明である。

第1表 ピット群一覧表

NO	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
深さ	6	8	10	8	10	7	2	3	2	7	8	4	14	10	12	2
径	24	24	32	24	27	27	36×22	26	22×40	24	28	28	36	32×24	36	27×24
NO	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
深さ	6	6	16	18	8	18	4	8	10	4	7	4	10	10	8	8
径	22	22×28	30×24	25×32	30	40	26	27	26	22	32×24	20	20×27	30×26	20×24	30×26
NO	33	34	35	36	37	38	39	40								
深さ	8	3	12	8	4	6	4	7								
径	20×27	44×30	26	28	26×30	30	28	29								



第26図 ピット群



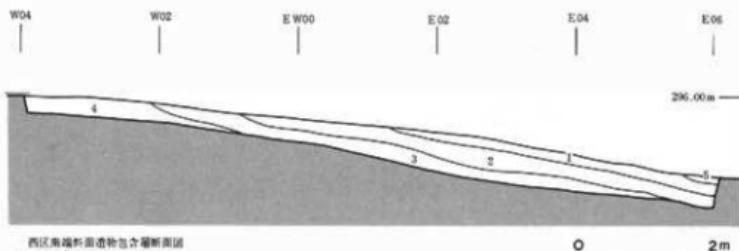
第27図 ピット群

遺構の時期については、掘り方から出土した少量の土師器片は磨滅が激しくその考定資料とはならず、重複関係からみるしかないが、切り合っているとはいえ、検出時点での層位からすると他の遺構との間には相当な差がみられ、その時期も大幅に下がるものと考えられる。(安田)

遺物包含層(第28図)

西区の南端、1号耕作跡南側の斜面で検出された。遺物包含層は、南北4~6m前後の範囲で広がり、丘陵斜面が急に立ち上がる地点を西端とする。東端は、開析谷へ向ってさらに延びていると思われる。

層序、堆積土は、表土直下で露呈し、地山の傾斜に従っ



- 西区南端斜面遺物包含層断面図
 1 暗褐色土(炭化花崗岩粒を含む)
 2 暗色土(炭化花崗岩粒を多量含む)
 3 黒褐色土(炭化花崗岩粒を含む)
 4 黒色土
 5 暗茶褐色土(炭化花崗岩粒を含む)

第28図 西区南端斜面遺物包含層断面図

て西から東に向って、斜面下方に厚い自然流入状態で堆積している。5層に分層され、基本層序のⅡ層に対応する。各層の層厚は、10～30cm前後であるが、5層の状況から遺物包含層は、西から東へ向って削平されたことがわかる。

遺物の出土状況は2層から主として出土した。須恵器は壺片頸部1点で、他はすべて土師器杯・壺片である。いずれも破片状態で出土し、完形品はなかった。

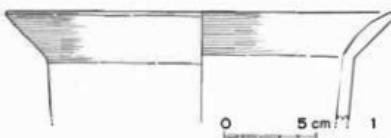
土師器の器種、器形による内訳は第2表の通りである。図化できたものは2層出土の土師器壺1点だけである。

壺(第29図1) 口縁部から体部上半の一部が遺存している。器面の調整は、口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面がヘラケズリされる。内面に指頭痕が観察され、後ヘラナデ調整されたものと思われるが、器肌の荒れのため明瞭でない。胎土は、多量の砂質粘土を含むが、焼成は良好である。頸部は「く」の字状に外傾し、全体で長胴壺を呈していたと思われる。頸部はヨコナデにより形成された軽い稜を持つ。

(河部)

第2表 包含層出土遺物一覧表

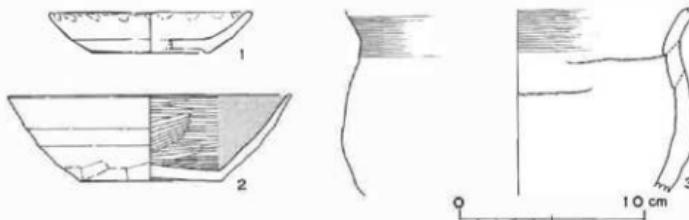
層	口 縁 部		体 部		底 部		不明
	壺	杯	壺	杯	壺	杯	
Ⅰ	2	33	12	85	8	25	2
Ⅱ	163	1307	—	21	—	4	
Ⅲ	8	11	27	5	—	3	2
Ⅳ	2	—	2	—	2	—	
Ⅴ	—	17	1	—	—	—	



第29図 包含層出土遺物

表土出土の遺物

ここでは、表土(L-1)出土の遺物についてとりあつかう。土器は、すべて破片状態で出土した。大半が土師器壺破片で占められるが、図化できた遺物は土師器(杯・壺)、陶磁(菊皿)の計3点のみである。



第30図 表土出土遺物

〔土師器〕

杯(第30図2) 西区で出土した。口縁部から体部の一部と底部、全体の約1/2が遺存している。ロクロ成形の杯である。ロクロからの切り離しは、静止糸切りによる。外面の器面調整は、底部周縁から体部下半を手持ヘラケズリ、体部から口縁部をロクロナデ、内面は底部を一定方向のヘラミガキ、体部をヨコ方向のヘラミガキで調整され、さらに黒色処理されている。底径7.5cm、器高4.6cm、図上復元による口径15.2cm。

甌(第30図3) 西区で出土した。口縁部から体部上半の破片である。器面調整は、口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面がヘラケズリ、内面がヘラナデである。内面に積上げ痕が認められる。胎土は1~5mm大の石英質粒子を多量含み、焼成は、やや不良である。器肌は、2次加熱を受け著しく荒れている。色調は、外面淡赤褐色、内面黒褐色である。内面は、焼成時ないし2次加熱により変色したものと思われる。体部立ち上がりは、球形を呈し、頸部から口縁部にかけて緩く外反する。残存高10.0cm。

〔陶磁器〕

菊皿(第30図1) 東区で出土した。志野の菊皿である。底部から口縁部にかけて全体の約1/5が遺存している。外面底部を除き、乳白色の釉が薄くかけられてある。外面体部下半は、回転ヘラケズリ調整されていると思われるが、断定できない。図上復元による口径10.9cm、底径3.0cm、器高2.2cmを測る。

(阿部)

第3章 考察

当遺跡の立地は、小規模な開析谷頭の東西両緩斜面である。当初は予定の調査対象区が谷の縁辺を取り巻く緩斜面の遺物散布範囲すべてを含んでいたため、検出された遺構・遺物だけで遺跡が構成されると考えていたが、終盤になってから調査した包含層は、同時期の遺物を混入しており、西側丘陵の一部にまで遺跡の範囲を広げて考えねばならない状況に至った。従ってまだ未調査の部分があることを踏まえ、本章では検出された遺物・遺構に対し総括しておく。

第1節 遺物について

当遺跡から出土した遺物は、土師器・須恵器・土製品・鉄器・石器があげられる。遺物量は全体的に少なく、特に遺構に伴う遺物は非常に限られている。以下遺構に伴うと考えられる資料を中心に分類・検討しておく。

〔土師器〕

土師器の器種には、杯・壺・瓶が確認された。

杯 3号住居跡から2点、5号住居跡から1点検出されている。これらは成作技法からI：ロクロ成形によらないものと、II：ロクロ成形によるものに大別され、さらに器面調整や器形の特徴から次のように分類される。

I : 体部外面中央部に段を有し、調整は外面で体部下半が手持ヘラケズリ、上半ヨコナデされ内面はヘラミガキされて黒色処理される。

II_a : 比較的小型で口径に比して底径が大きく、体部は内彎気味に立ち上がる。底部周縁から体部下半は回転ヘラケズリ調整される。

II_b : 体部が直線的に外傾し立ち上がる。体部下半から底部は回転ヘラケズリ調整される。

壺 1・3・4号住居跡から各1点、5号住居跡から6点検出されている。これも杯同様非ロクロ成形(I)とロクロ成形(II)とがあり、細部の特徴によっていくつかに分けられる。

I_a : 長胴の壺である。

I_b : 小型の壺である。頭部に軽い稜線がみられる。

II_a : 長胴形に近いもので、なかに黒色処理されるもの(a₂)とされないもの(a₁)がある。

II_b : 口縁の広がりが鉢に近い広がりを示すもので、黒色処理の点でb₁とb₂がある。

甕は上記のように4類に分類されるがI_aのなかに最終的にロクロ使用ではあるが、前段の成形の痕跡にタタキ目を残すものがある。

概 3号住居跡の堆積土中から検出されている。無底式の瓶で体部下端底面に木葉痕を残す。

以上、土師器について分類を行ったが、これらについて各遺構ごとの共伴関係を示せば第3表のとおりになる。この他に図していないが5号住居跡からI類に分類される杯が検出されている。

ただこの杯は全体の土器組成からすれば形式的に相當出するものであり、住居より流れ込んだものと考えられる。

第3表 積穴住居跡出土土師器一覧表

住居跡番号	杯			甕						瓶
	I	II _a	II _b	I _a	I _b	II _{a1}	II _{a2}	II _{b1}	II _{b2}	
1号住居跡				1						
2号住居跡										
3号住居跡		2			1					1
4号住居跡				1						
5号住居跡	1		1		2	1	2	1		

性がある。特に杯・甕を問わずI類土師器を伴う1・2・4号住居跡が極端に少ない。当然予想される器種を欠いており、全体の土器組成を問題とするには不明な点が多い。

〔須恵器〕

団化できたもので3号住居跡から甕が1点検出されている。口縁部から頸部付近の破片で他の部分は欠損している。遺構に伴う出土はない。

〔土製品〕

2号住居跡カマド内から帽のやや広がる棒状の製品が1点検出されている。検出状況から支脚として使用したことが明らかで、上半分が再酸化され黒くなっている点からも裏付けられる。

〔鉄器〕

3号住居跡床面から2点、5号住居跡床面上層から1点検出されている。

〔石器〕

石鎚 2号耕作跡堆積土中から1点検出されている。無茎の鎚であるが、直接遺構に伴うものではなく、周囲に存在する縄文時代の遺跡からの所産と考えられる。

磨石 3号住居跡床面から1点検出されている。この他に同住居跡のカマド付近から20cm程度の両面中央が若干窪んだ偏平な黒雲母片岩が出土したが、表面の風化が激しく磨石とセットとなるものかどうかの判断は困難である。今年度当課が調査した須賀川市沼平遺跡5号住居跡からも同様に磨石と石皿が検出されている。

土器群の編年上の位置

前述した土器群はとくにI類の土器群のなかに欠落する器種が多いため証然としない部分が多いが、大旨從来いわれている国分寺下層式から表杉ノ入式に並行する時期の範囲でとらえ、奈良から平安時代の所産と考えておく。当然非ロクロ土師器(I類)からロクロ土師器(II類)への移行が想定される。

近年当課が行ってきた調査事例のなかに杉内B遺跡の土器群と時期的に並行する遺跡がいくつか報告されている。このなかで東村佐平林・谷地前C遺跡 25・27号住居跡等で非ロクロ土師器とロクロ土師器とが共伴する、いわば過渡的様相をもつ土器群の存在が知られるようになった。杉内B遺跡ではこのような土師器の組成は検出されなかったが、Ⅱ類のなかに極めて前出的な特徴をもつ土器が検出されている。この土器は3号住居跡から検出された「九」の線刻を底部にもつ小型の杯2点である。この土師器杯はロクロ成形であることからⅡ類として分類したが、形態的には口径が11cm強と一般の杯形土器に比較し小型である点、体部から口縁部への立ち上がりが内彎気味である点の2点の特徴をもつ。この形態的特徴をもつ杯は国分寺下層式に相当する非ロクロ土師器のなかでの共伴例(前述した佐平林・谷地前遺跡等)が多く知られており、ロクロ土師器前段の小型杯に系譜をもつと理解される。とすればロクロ土師器のなかでも比較的早い時期の所産と考えられ、この杯を含む3号住居跡の土器群は5号住居跡の土器群よりも前出するものとしてとらえられる。

(阿部)

第2節 遺構について

当遺跡で検出された遺構は、竪穴住居跡5軒、柱列2本、柱穴群、土坑5基、耕作跡2ヶ所、溝3条を数える。前節では出土遺物のなかで大半を占める土器類について分類を行ったが、遺物の絶体数が少なく分類自体を困難にしているとともに、遺構の時期決定をも困難にしている。

伴出遺物からの時期決定が可能であったのは、3号・5号竪穴住居跡の2軒のみであった。他の遺構は時期が明確に位置づけられた遺構との重複関係を持たないことから、ある程度大きな時間幅で考えるか、少ない遺物から時期を類推するしかない。また遺跡内の遺構構成が今後まだ増加する可能性が大きく、集落跡としての内容的な検討を困難にしている面もある。これらの制約を念頭において以下検出された遺構について若干の検討を加えたい。

竪穴住居跡

総数5軒検出されている。各住居跡の伴出遺物から次のように分類される。

I期：伴出遺物が非ロクロ土師器のみで構成される住居跡…1・2・4号住居跡

II期：伴出遺物の大半がロクロ土師器で構成される住居跡…3・5号住居跡

上記の如く二期に大別されるが、I期では2号住居跡と4号住居跡とが重複していることと、II期の3号住居跡と5号住居跡の伴出遺物が時間差をもっていることを考慮すれば、住居跡の変遷は、4号住居跡→2(1)号住居跡→3号住居跡→5号住居跡の順で辿ることができる。ただ1号住居跡は堆積土第1層からロクロ土師器杯の小破片が検出されているためII期に入る可能性を充分に残しているが、もし入ったとしても伴出した土師器甕の特徴からすれば、5号住居跡より

は3号住居跡の時期に近いと考えられる。

以上が伴出遺物と遺構の重複関係とからみた住居跡の変遷過程であるが、次に細部の構造や内部施設等を列挙しておく。

規模 2～5号住居跡までは一辺が4～6m内に納まる規模で、土師器を伴出する住居跡のなかでは一般的な大きさになる。ただ1号住居跡は1辺が3m強で小型の部類に入る。

軸線偏度 カマドを有す壁の中点と対辺の中点とを結ぶ直線を軸線としたが、大きくみて磁北から東西に5度前後の振れでおさまるもの、いわば磁北に近い軸線を有する住居跡(1・3号)と、磁北から20度前後西へ偏している住居跡(2・4号)とに分類できる。

柱穴 主柱穴の検出総数で分類すれば、1)柱穴のないもの…1・5号住居跡、2)4本柱のもの…2・3号住居跡、3)6本柱のもの…4号住居跡、の3種類になる。

4本柱の2軒の住居跡のうち2号住居跡では、カマド両袖基部に各1本、計2本の小規模な柱穴を検出しているが、これはカマド部にかかる上屋を高くすることに有効で、多分にその可能性が強いと考えられる。3)の6本柱に関しては、果して一時期に6本柱すべてが機能したのか、または2本柱と4本柱との二者があり、建て替えによる前後関係をもっているのか判然としない。いずれにしても上屋の設定は可能であるが、2本柱・6本柱は一般的な4本柱とは異なり、中央の2本の柱穴を結ぶ線上にカマドが設置されているため、カマド前面の空間利用からすれば相当な制約を受けることは確実であるが、カマドの両脇に補助柱をたてなくとも切妻的な上屋を考えればカマド上部を高く保つ利点があげられる。

カマド 全ての住居で検出されている。カマドは燃焼部に煙道を取り付け煙の排出を考慮している点では大きな形態的な差はみられないが、設置の方法で二つの相異点があげられる。第1点は燃焼部のつくりかたで、1・3号住居跡にみられる壁面の一部を抉り込んで燃焼部とするものと、2・4(?)・5号住居跡のように住居跡壁面を目立って抉り込んでいないものとの相異点で、第2点はカマド部に掘り方を持つものと持たないものとの相異である。第1点目ではカマドが住居外に張り出すことで住居内の空間がより広くなると考えられ、第2点目では掘り方を掘り込んだ地山層が西地区よりも軟質であることからあらかじめ煙道を設置する部分よりも広く掘り込んだものと考えられる。

周溝 検出されたのは2～4号住居跡である。2号住居跡では周溝内に有機質土が確認されたが、単に腰板の存在を想定するには掘り込みが浅いため疑問が残る。

土 坑

総数5基検出された。時期・性格等については不明な点が多い。ただ5号土坑のみは、焼土・スラグの堆積から小鋳治的性格であろうと想定される。

柱 列

柱穴3個で構成される柱列が2本検出されている。検出ヶ所は2本とも西地区の山脇で3号溝の西側にある。この3号溝は後述する2号耕作跡の山際に掘り込んだ側溝と考えられ、位置関係から仮に溝と共存するとすれば、農耕作業に関係する施設としてとらえることができる。類例としては石川町達中久保遺跡(付図)で1本検出されている。

柱 穴 群

西地区C-5・6グリッドに集中して40個検出されている。小規模なピットであるが、なかには掘り方と柱痕とが明瞭に分離できたものもあり、明らかに柱穴として認められる。ただ規則的な配列がみられず建物跡的性格の建造物とは性格を異にするものと思われる。時期については判断する根拠が少ないので、同じⅢ層内で検出された住居跡よりも上位から検出されているため、竪穴住居跡の時期からは下るものと考えられる。

耕 作 跡

西地区に2ヶ所検出されている。検出面では広範囲な黒色土の落ち込みとしてとらえられた。底面には凹凸があり地山傾斜にそって緩やかに傾斜している点から、比較的硬質な地山を掘り起し耕作に適する土づくりを行ったと考えられる。

溝 跡

西地区に3条検出されている。うち3号溝は斜面に対し直交して走っていることから、山裾に掘られた畑の排水溝と考えられる。現在の耕作範囲と多少ずれているが、当溝から斜面上方の地山が花崗岩の風化層になっていることから山裾を削り取り耕作面積を拡大した事が3号溝の検出によってうかがえる。時期は底面付近から検出された陶器片から上限を近世以降近代と考えることができる。2号溝も斜面に対し直交していることから、3号溝と同様もしくは地境としての機能が考えられる。1号溝は斜面に対し斜めに走っており、恐らくは山裾からの水抜きであろうと思われるが定かではない。溝内の堆積土がほぼ共通している。1・2号溝の時期は、2号溝の重複関係から2号住居跡よりは遅らず、また堆積土の状態は1号溝よりは新しい3号住居跡により近いことからして、一応ここでは3号住居跡と1号溝との間の幅広い時期のなかで考えておきたい。

(大越)

参 考 文 献

- 氏家 和典 1967 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史14』 東北史学会
 間田 茂弘・桑原 滋郎 1974 「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」『研究紀要!』
 宮城県多賀城跡調査研究所
 馬目 順一 1975 「仏具塙遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告(福島県文化財調査報告書第47集)』

福島県教育委員会・日本道路公団

- 鈴木 啓 1975 「下原遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告(福島県文化財調査報告書第47集)』
福島県教育委員会・日本道路公団
- 桑原 澄郎 1976 「須恵系土器について」『東北考古学の諸問題』 東北考古学
- 小笠原好彦 1976 「東北における平安時代の土器についての二・三の問題」『東北考古学の諸問題』
東北考古学
- 木本 元治 1978 「下原遺跡7号ピット出土の土器について」『しのぶ考古7』
- 玉川 一郎・山内 幹夫 1978 「谷地前C遺跡」『母畠地区遺跡発掘調査報告II(福島県文化財調査報告書第67集)』 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 目黒 吉明他 1978 「佐平林遺跡I~IV区」『母畠地区遺跡発掘調査報告II(福島県文化財調査報告書第67集)』 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 高木 和夫・大越 忠士 1979 「板倉前B遺跡」『母畠地区遺跡発掘調査報告III(福島県文化調査報告書第74集)』 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 日高 努・山内 幹夫 1979 「佐平林遺跡VI区」『母畠地区遺跡発掘調査報告III(福島県文化財調査報告書第74集)』 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 阿部 正行・大越 道正 1979 「達中久保遺跡」『母畠地区遺跡発掘調査報告III(福島県文化財調査報告書第74集)』 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 日高 努・大越 道正 1980 「佐平林遺跡V・VI区」『母畠地区遺跡発掘調査報告V(福島県文化財調査報告書第85集)』 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 阿部 正行・玉川 一郎 1980 「谷地前C遺跡」『母畠地区遺跡発掘調査報告V(福島県文化財調査報告書第85集)』 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 目黒 吉明他 1980 『母畠地区遺跡分布調査報告IV(福島県文化財調査報告書第83号)』 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター

図 版



1. 杉内B遺跡遠景(北から)



2. 杉内B遺跡東区遠景(北から)



3. 1号住居跡



4. 1号住居跡 カマド



5. 2号住居跡



6. 2号住居跡カマド



7. 2号住居跡カマドセクション



8. 3号住居跡



9. 3号住居跡カマド袖石



10. 2・4号住居跡



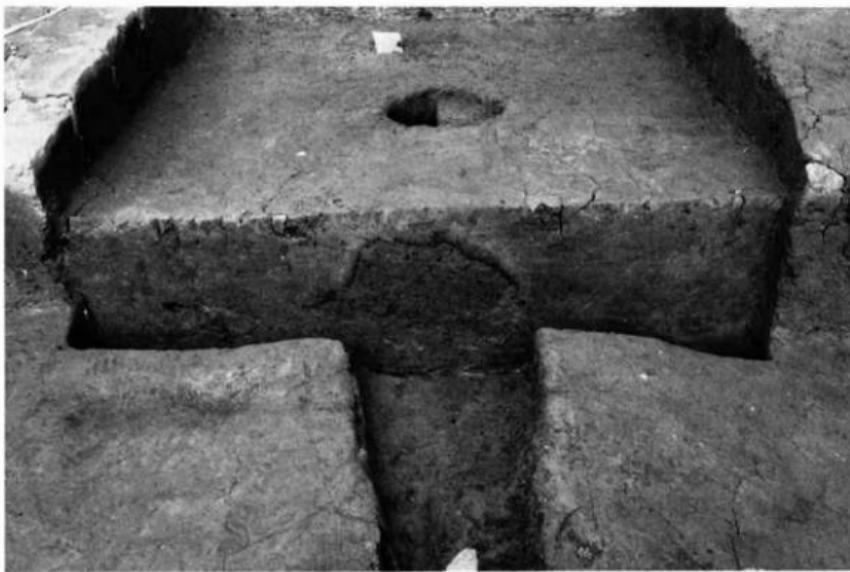
11. 5号住居跡



12. 5号住居跡貯藏穴遺物出土状況



13. 5号住居跡カマド遺物出土状況



14. 5号住居跡カマドセクション



15. 5号住居跡カマド掘り方



16. 2号土坑



17. 3号土坑



18. 2号柱列



19. 2号耕作跡



20. ピット群



2



5



3

6

21. 杉内 B 遺跡出土遺物

1 号住居跡(1)・3号住居跡(2・4・6)

4号住居跡(3)・5号住居跡(5)

第2編 杉内C遺跡

遺跡記号 IK = SU・C
所在地 石川郡石川町大字中野字杉内
時代・種類 鐺文・奈良・平安時代—集落跡
調査期間 昭和55年6月3日～7月18日
調査員 大越 道正 阿部 俊夫
松本 茂 安田 稔
協力機関 石川町教育委員会

第1章 調査経過

第1節 位置と地形

杉内C遺跡は石川町大字中野字杉内地内に所在する。この地域は阿武隈山系の西端を構成する丘陵部にあたり、西側1kmには阿武隈川が北流している。これらの丘陵部は阿武隈川に流入する開析谷が複雑に分岐して入り込み、起伏に富んだ平地の少ない景観を呈している。これらの開析谷のほとんどは現在水田として最奥部まで利用されている。

杉内C遺跡はこのような開析谷のうち、国道18号線沿いにある武道池より東入する谷のはば中央、谷が分岐するために形成された南に延びる小台地上先端部に位置する。面積は1,500m²と比較的小規模な遺跡で、標高は約300m、水田面との比高差は約5mを測る。現況は畠地であるが、一時水田として利用されており、1m程の段差を有する水田面が台地の稜線と直行して3面認められる。旧地形は西側のやや高い馬の背状の台地であったと思われるが、開田時に西側及び北側を主に削平しているらしく、東側や、水田面南側には黄褐色土の堆積が認められるものの、西側においては黄褐色土下層の砂質層が露呈している。このため遺構を検出した部分は台地の東側及び水田面の南側に多かった。

現在杉内C遺跡周辺の開析谷は、水田として利用されている。これらの水田は暗渠排水施設により乾田化しているが、現在でもこの排水を止めると冷たい地下水がまたたく間に湧き出る。水田としては、排水施設が設けられない限り、今も昔も適地とは言い難いと思われる。（松本）

第2節 調査経過

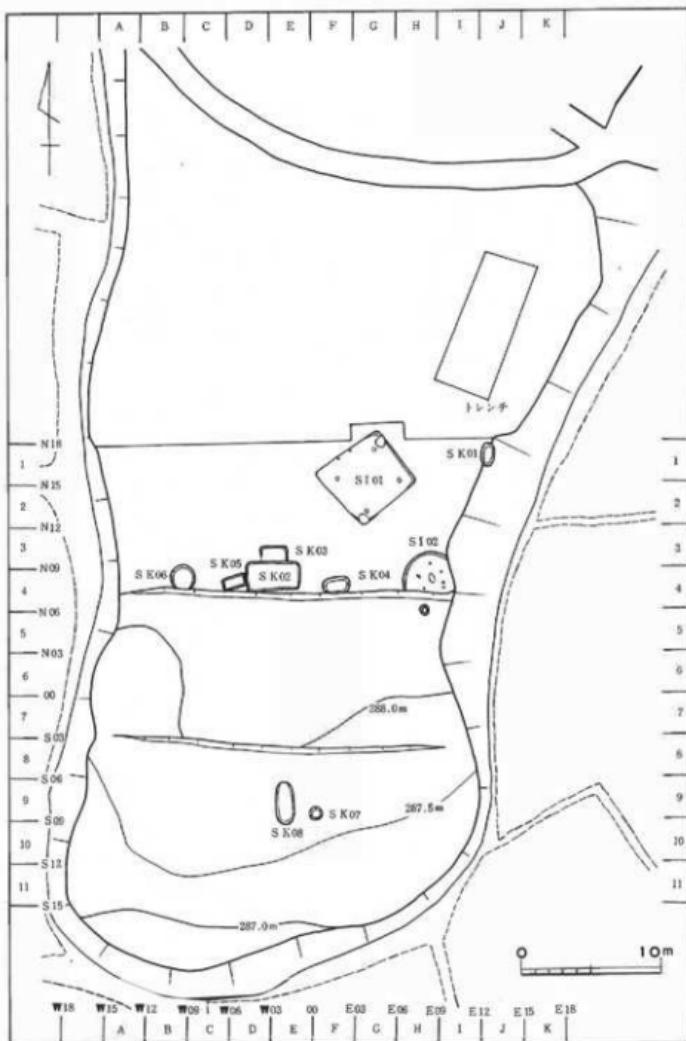
杉内C遺跡は1978年県文化センター遺跡調査課によって発見された遺跡である。1979年同課は対象面積1500m²について試掘調査を行い、奈良時代の住居跡1軒を検出し、遺跡の範囲1000m²を確認した。1980年度の母畑開発工事実施計画では杉内B・E遺跡と同じく杉内C遺跡全体は、工事の対象となりカットされる事となった。今回の調査はこの1000m²を対象として、杉内B・E遺跡と一連の調査を行う事とした。5月19日より杉内B遺跡から調査を開始し、8月5日の杉内E遺跡の調査終了をもって、杉内B・C・E遺跡の調査を終了した。杉内C遺跡の調査期間は6月3日～7月18日までを要した。試掘調査の結果、削平のため遺構・遺物の遺存状態が非常に悪い事が予想され、表土剥ぎはグリッドを設定し手振りで行う事とした。調査過程の概要是次のとおりである。

発掘調査日誌概要

- 6月3日 杉内C遺跡調査対象面積1000m²に3×3mのグリッドを設定する。
- 6月4日 調査区北側より表土剥ぎを開始する。
- 6月12日 奈良時代の住居跡を検出、一部調査区外へ延びるため拡張を行う。
- 6月16日 杉内C遺跡 標高杭ベンチマーク 288.0mを設置する。遺構確認面までの基本土層図をDライン、6・10ラインについて作成する。
- 6月18日 2号住居跡をH-4グリッド、カット面において検出する。表土剥ぎを終了する。遺構の精査を行う。
- 6月19日 2・3・4・6号土坑の調査を開始する。
- 6月23日 2号住居跡の調査を開始する。縄文晩期の土器の細片の出土が多い。
- 6月25日 1・5号土坑の調査を開始する。2号住居跡東区において一部床面を検出する。
- 6月26日 1号住居跡の調査を開始する。
- 6月27日 7・8号土坑の調査を開始する。
- 7月4日 2号住居跡のセクション図を作成する。壁際には焼土・カーボンの堆積が認められ、石片の出土量が多い。
- 7月18日 1号・2号住居跡の調査を完了する。全測図作成。遺跡より除外した北側500m²は、それほど削平を受けていない事が 調査区北側壁面で確認された。このため空堀に4×10mのトレンチを設定し遺構検出作業を行ったが、遺構は検出されない。
本日で杉内C遺跡の全調査を終了した。 (松本)



第1図 杉内C遺跡周辺地形図



第2図 杉内C遺跡遺構配置図

第2章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居跡

住居跡は、調査区の東端と北端から縄文時代晚期と奈良時代のものが2軒検出された。いずれも削平が著しく、特に1号住居跡の遺存状態は良好ではなかった。

1号住居跡 S101

遺構(第3図、図版3)

試掘調査時に検出されていた住居跡で、調査区の北端で検出されている。検出面は黄褐色土地山であるが、開窓の際の削平が激しく遺存度はきわめて悪い。

遺構内堆積土は床面上層の一層しかみられず、削平の激しかった南東コーナー部は表土を剥いだ段階で床面が露呈するという状態であった。このため自然堆積か人為的堆積かを判断することは困難であった。床面は、カマド部分からP₄にかけての北西コーナー部に貼り床がよく残っていたが、他の部分はやはり削平によって若干剥ぎ取られた感がある。

平面プランは一辺5m強の方形を呈し、南辺と北辺の中点を通る軸線の傾きは約40°西に偏している。壁高は最も残りのよい北東コーナーでは約40cmを測るが、他の部分は10cm未満である。周溝は確認されていない。カマドは北辺の中央部に焼土面が確認されたのみである。

ピットは主柱穴と考えられる4個(P₁～P₄)の他に4個(P₅～P₈)検出されている。P₅とP₆は北東コーナーと南西コーナーの対角に位置しており深さはそれぞれ15cmと34cmを測る。両者とも貯蔵穴と考えられるが、P₅は遺物が少なく浅いことから別の用途があった可能性もある。P₇・P₈はカマド両脇にあるもので、カマド部分にあたる上屋と関連のあった柱穴のものと考えられる。

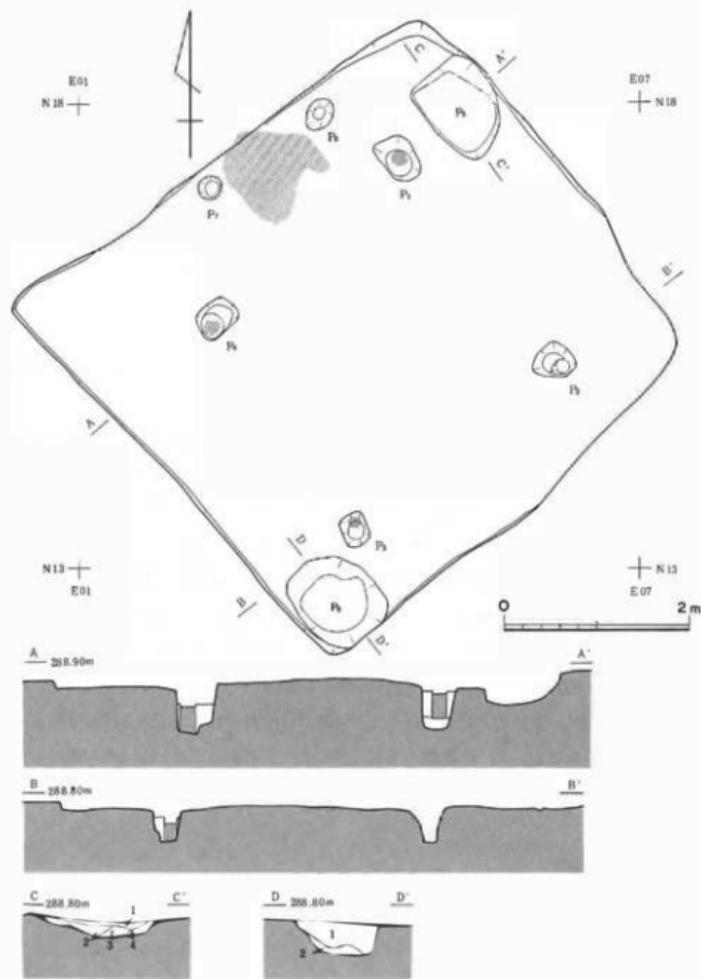
遺物(第4図)

住居跡の遺存状態が悪かったことから遺物も少なく、図化したものはすべて破片を復元実測したものである。

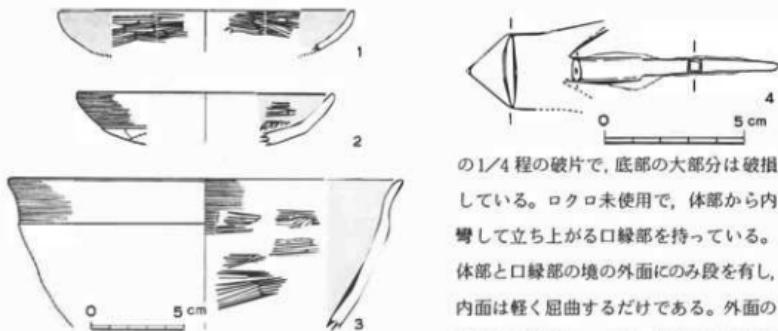
(土器)

杯1(第4図1) 南西コーナーのP₆上面より出土したもので1/4程の破片である。ロクロ未使用で内縁する口縁部を持ち、内外面黒色処理されている。調整は内外面とも横方向のヘラミガキが施されており、推定口径16cmを測る。

杯2(第4図2) 住居跡北東コーナーのP₅より出土したものである。体部から口縁部にかけて



第3図 1号住居跡



第4図 1号住居跡出土土師器・鉄錐

した後黒色処理を行っている。推定口径 14cm を測る。

鉢(第4図3) P₆内より出土したもので、体部から口縁部にかけての1/3程の破片である。ロクロ未使用で、口縁部と体部の境に軽い段を有している。調整は、口縁部内外面はヨコナデ。体部外面は粗いヘラケズリ、体部内面はヘラミガキを施している推定口径 21cm を測る。

〔鉄製品〕

鉄錐(第4図4) 住居跡南面コーナーの床面より出土している。錐身は五角形を呈し、左右に開く細くて長い逆刺がつく。全長 11cm を測り、錐身部分 3.5cm、茎部分 4.9cm である。断面は、茎部分が 4.5mm × 4.5mm の正方形、錐被部分が 2mm × 7.5mm の長方形である。身幅は 2.6cm で片側がやや丸味を帯びている。

まとめ

本住居跡は土師器を伴う住居跡である。開畠の際の破壊が激しく遺存状態は極めて悪くカマドの規模等も確認できなかった。遺構の時期としては、出土土器の特徴から奈良時代のものと考えることができる。

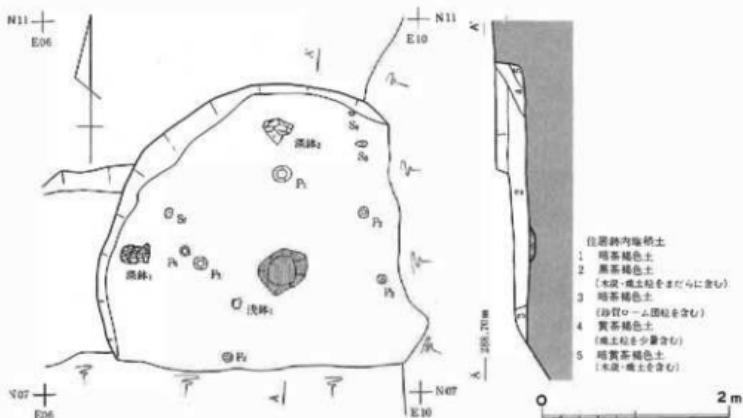
(安田)

2号住居跡 SI02

遺構(第5図、図版4)

調査区中央東端、H-3・4～I-3・4グリッドで検出された住居跡で、東側、南側は開田時にカットされており、住居跡のはば1/3強を調査できただけである。しかし住居跡の遺存状態は比較的良好であった。

堆積土は暗褐色土、黒褐色土をベースとした土で、堆積状態はほぼ水平堆積、壁際には壁の崩落土の堆積が認められ、自然堆積と考えられる。壁に沿って焼土・カーボンの堆積が比較的多く



第5図 2号住居跡

認められた。

平面プランは遺存部から推定して、円形、またはやや梢円形を呈するものと考えられる。径は約4m程を測ると推測される。壁高は遺存状態の良好な北側において約30cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。周溝は認められなかった。床は掘り込んだ地山の面をそのまま床面としており、貼り床は認められなかった。ほぼ水平で壁際を除いて固く締まっており良好な床面であった。炉は住居跡の中央と考えられる位置に構築されており、長径54cm、短径40cm程の梢円形を呈し、床面をさらに10cm程掘り窪めた地床炉であった。炉内には焼土の堆積が多く、炉底・炉壁とともに熱変のため赤褐色を呈していた。ピットは炉から約1m離れた位置に炉を囲むように径

第1表 ピット計測表

ピットNo.	1	2	3	4	5	6
径	20	10	10	10	15	10
深さ	40	$40+\alpha$	$40+\alpha$	$40+\alpha$	10	$40+\alpha$

10~20cmのものが6個検出され、本住居跡の柱穴を構成したものと考えられる。遺物の出土は炉跡周辺と壁際に多く認められ、炭化物も床面より検出されている。

遺物(第6図、図版14~16)

2号住居跡よりは浅鉢1点、深鉢2点と、多量の土器破片、石器類、石核、フレーク、チップ等が出土している。土器は遺存環境によるためか粘土化が激しく、取り上げ時に薬品処理を行い細心の注意を払ったにもかかわらず、一括土器中2個体は取り上げる事ができなかった。そのため図化できたのは浅鉢、深鉢各1点である。

〔縄文土器〕

浅鉢(第6図1) 炉跡の南西約40cm、床面より8cm程浮いた ℓ -2層中より出土した。体部から口縁部にかけて、 $1/2$ 程を欠損している。底部から直線的に外傾して平縁の口縁部に達する小型の浅鉢である。推定口径14.2cm、底径6.4cm、器高5.4cmを測る。内外面は粘土化が



第6図 2号住居跡出土縄文土器

激しく、文様・調整を正確に捉える事は困難であったが、文様に関してはほぼその実体を把握する事ができた。

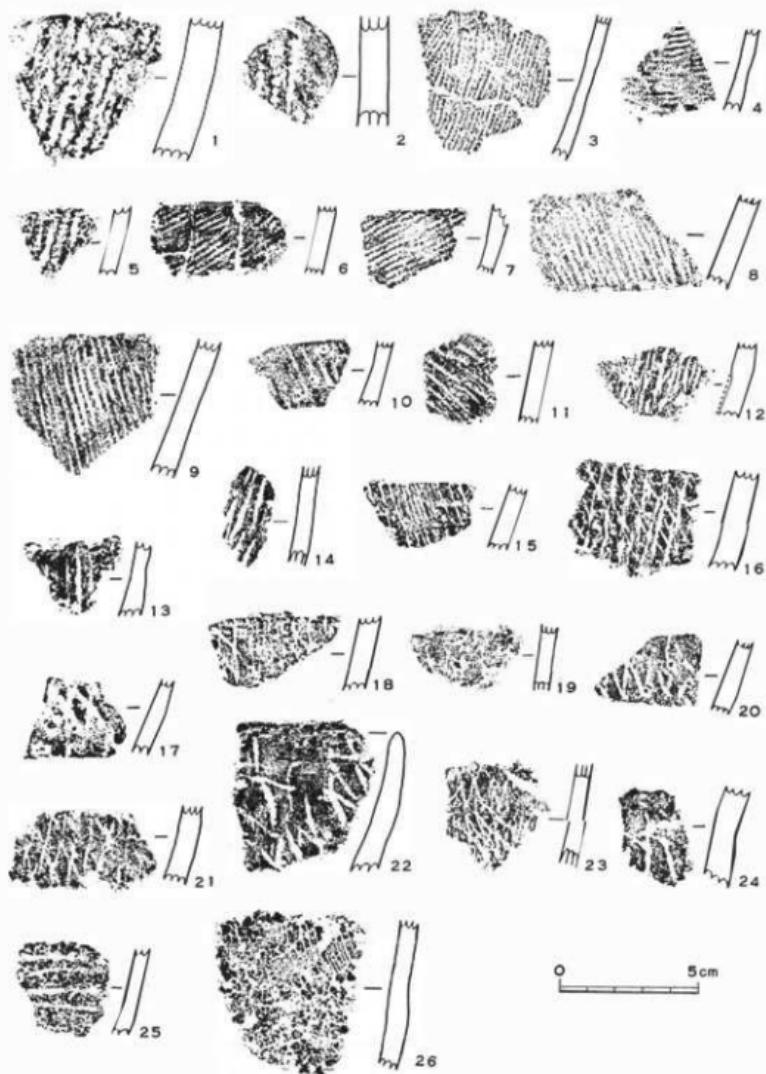
文様は口縁直下と底部直上に、横位に沈線を施し上下限を画している。文様帶内には所謂太腿骨文類似の単位文様が表されているが、三日月状の無文部が文様帶上部に施されておらず、下方のみが太腿骨文風に表出されたものと考えられる。単位文様中には太い縄文帯を2分する目的で充填文が加えられている。縄文はLRの単節縄文が施されているが、充填されたものなのか、磨り消されたものは判断できなかった。胎土には砂粒を多く含み粗く、焼成も悪い。

深鉢1(第6図2) 炉西側壁寄り床直より一括出土した粗製の深鉢の体部下半部であるが、粘土化が激しく復元困難なため図上復元を行ったものである。器形は彎曲がほとんど認められず、底部より直線的に開いたものと思われる。内外面ともに文様・調整を観察できる状態ではなく、胎土には砂粒、小石を含み粗く焼成も悪い。底径は6cm、厚さは0.4cm～0.5cm、底部で0.7cmを測る。

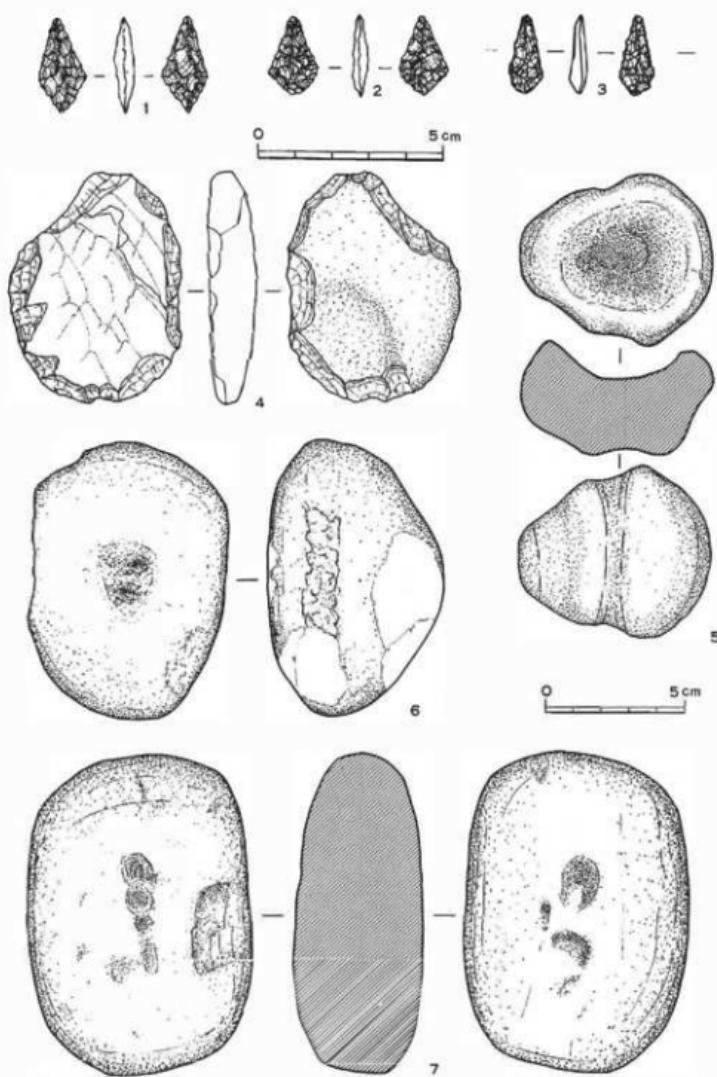
縄文土器拓影(第7図) 2号住居跡からは多量の土器破片が出土し、多くは堆積土中からの出土であった。これらの土器破片中、代表的な文様を有するものを抽出して説明を行う事とする。図示した26片は全て深鉢を呈すると考えられ、口縁部1(22)、他は全て胴部破片である。1・2は厚手の比較的焼成の良い土器でLRの粗い縄文が施されている。3～7は縄文のみが施されているもので、LRの縄文(3～6)、RLの縄文(7)が施されている。8～24は撫糸文が施されたものであるが、整然と施されるもの(8～10)、まばらに施されるもの(11～15)、所謂網目状撫糸文を呈するもの(16～21)、くずれた網目状撫糸文と考えられるもの(22～24)が認められる。25は平行沈線が横位に施され、26はハケ目文を有する土器である。

〔石器〕

石鏃(第8図1・2・3) 出土層位は(1)(3)床面直上、(2)は ℓ -2層中である。全て無茎の石鏃で、身長に比して幅があり、基部の尖る(1)・(2)と幅が狭く基部が丸味をもつ小型の(3)が認められた。

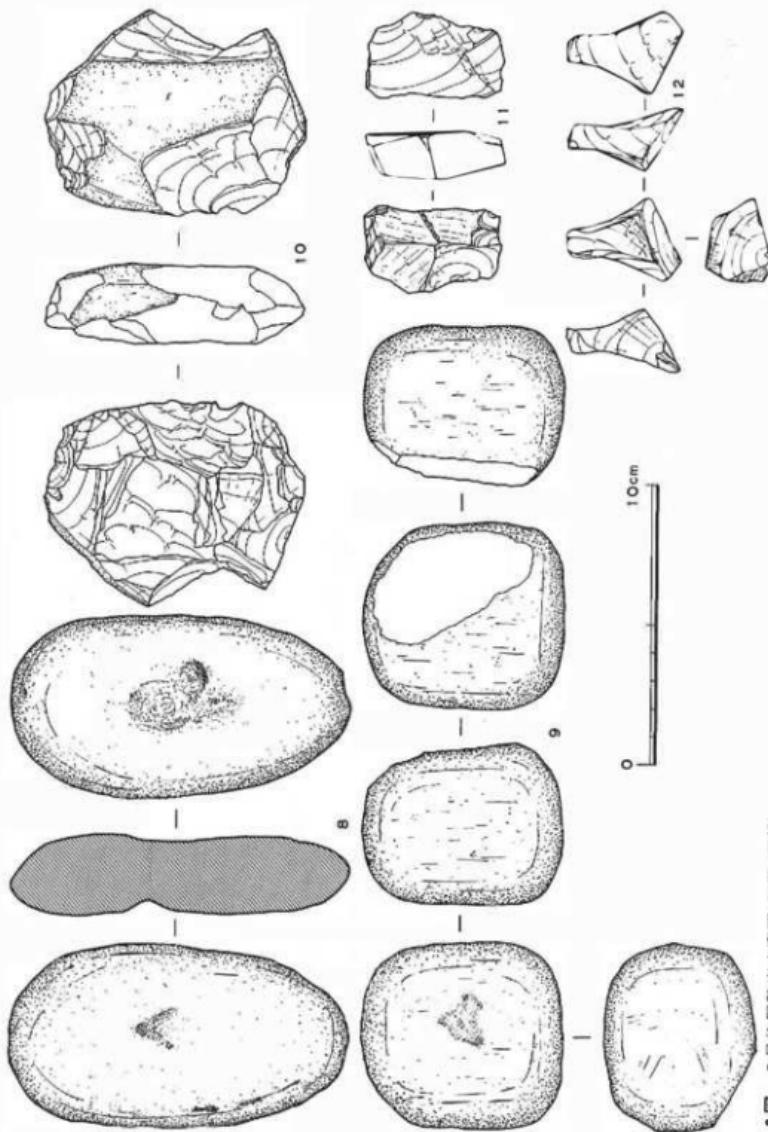


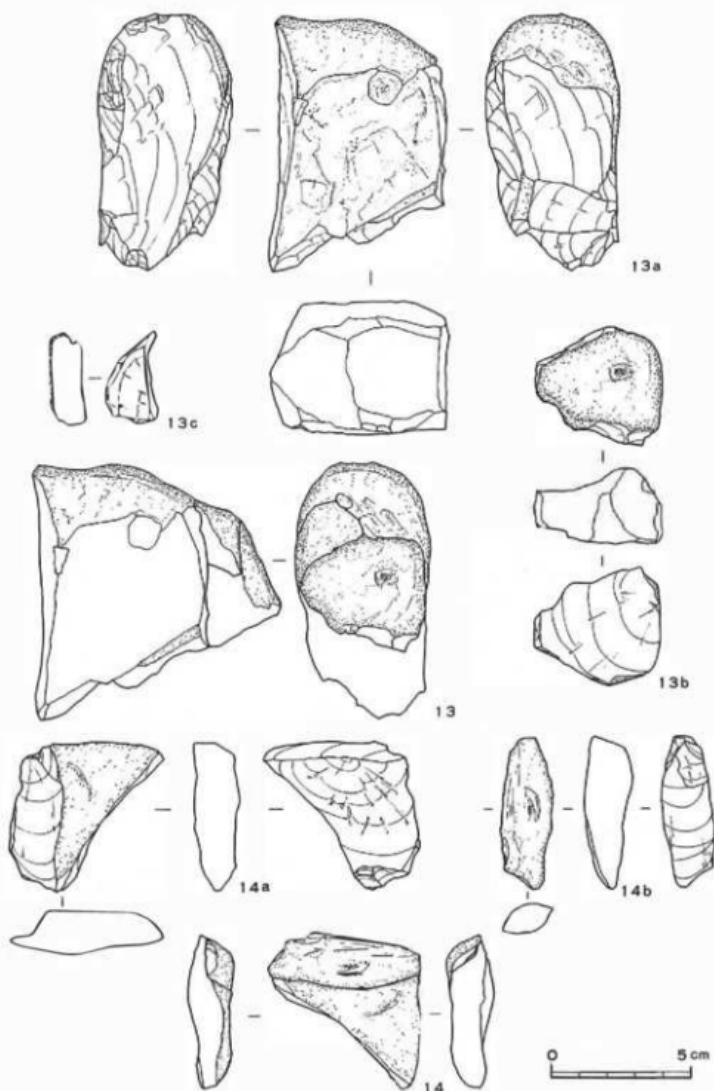
第7図 2号住居跡出土縦文土器拓影



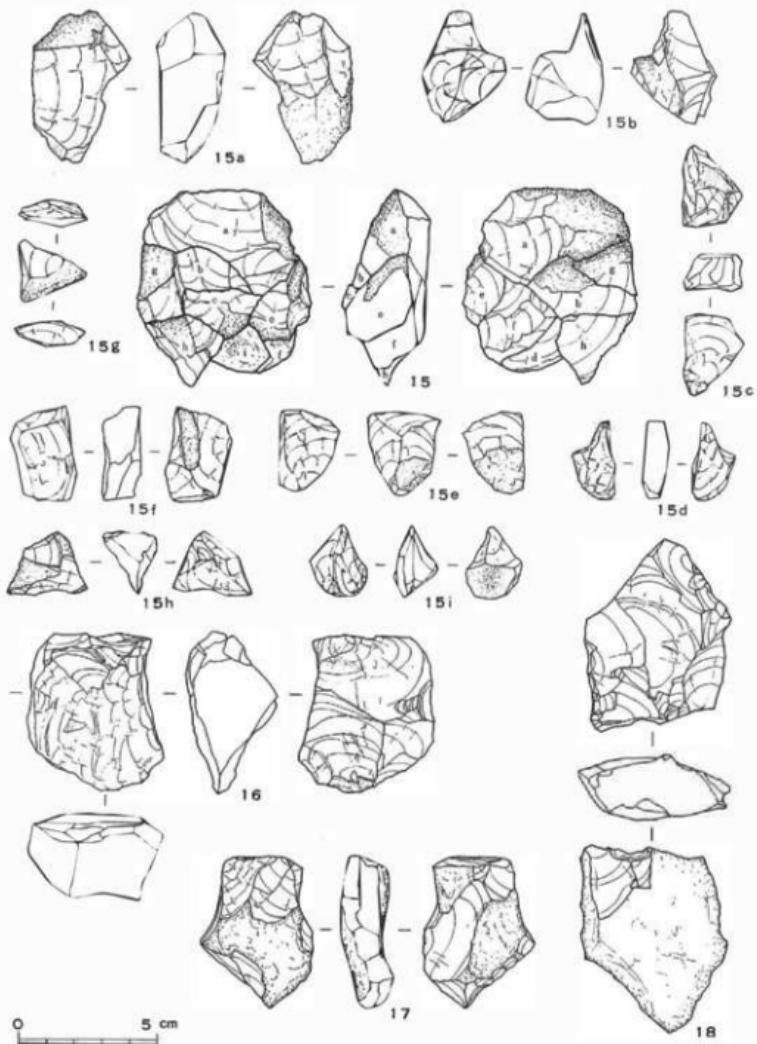
第8図 2号住居跡出土石器・礫石・磨石・凹石・石製品

第9圖 2号住居跡出土磨石・凹石・石核

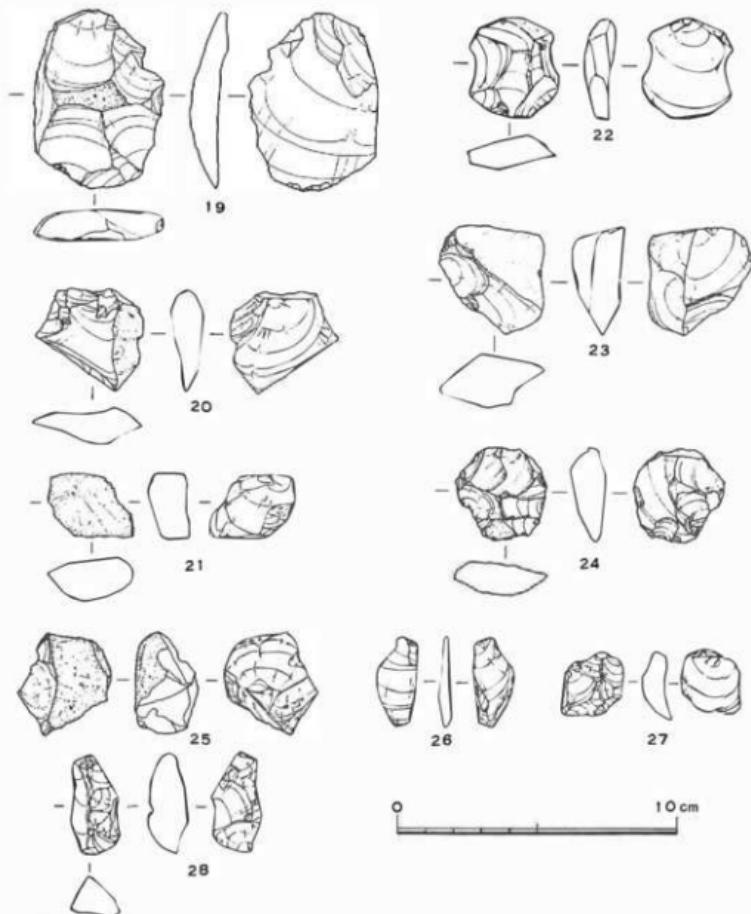




第10図 2号住居跡出土石核



第11図 2号住居跡出土石核



第12図 2号住居跡出土剥片

礫器(第8図4) 住居跡床面より5cm程浮いた状態で検出された。母岩から剥離した片面に自然面を残す梢円形の側片の周縁を両面から粗雑な剥離を行って、鋭さを欠く刃部を作り出している。

磨石・凹石類(第8～9図 6・8・9) これらの石器はいずれも複数の機能的要素を有しており、磨石、凹石と明確に区分し得ないため、一括して取り扱う事とする。

(8)(9)は床面、(6)はδ-1層より出土している。(6)(8)はいずれも器面が一部磨かれた事に

より滑らかとなっているが、凹部は面が荒れており、形状もまとまりがみられない事から磨りが行われたものとは考えられない。(6)は側縁に敲打によると思われる使用痕が認められた。(9)は5面が磨られており、四角形にするべく面取りがなされたものと考えられる。本石器は石製品の範疇で考えることが妥当かとも思われる。

用途不明石製品(第8図5) 安山岩質の粗い磨耗跡を素材とし、三面に加工が加えられている。片面には横位に2段の平行する隆起部が作り出され、その間を浅く窪ませている。先端は丸味を帯び、片面は深くえぐり窪ませている。

石核(第9～11図10～18) 石核は9点出土している。これらはいずれも打面を任意に設置しているもので、剥離作業に規則性のあるものは認められない。(10)(13)(15)(16)は自然石を母岩としており(13)(15)(16)は接合資料である。(15)は両面から剥離を行った後打面を剥離面上に移し打撃を加えているが、石質の関係で節理にそって小塊に分裂してしまい目的とする剥片を得ることはできなかったものと考えられる。(13)は原石を2つに粗割りした後、自然面を除いている。(16)は原石に熱を加えて割った後、剥離を行っている。(14)(18)は剥片を利用した石核で、(14)は接合資料である。(14)は主要剥離面の打面と同じ面から、縦長の片面に自然面を有する剥片を剥離している。(11)(12)は残核と考えられる資料である。

剥片(第12図19～28) 計測可能な剥片10点について図示した。形態的には縦長の(26)(28)円形に近い形の(19)(22)(24)(27)、原石の自然面の稜を有する不定形な(20)(21)(23)(25)に区別される。計測値は最も大型の(19)で6.5×4.5cmを測るが、他は4×4cmの範囲に集中する。打面は調整剥離面3、自然面2、不明5であった。

第2表 2号住居跡出土石器一覧表

固 名 称	石 質	重 き g	長 さ cm	幅 cm	厚 さ cm	固 名 称	石 質	重 き g	長 さ cm	幅 cm	厚 さ cm	
1 波紋岩	1.15	2.57	4.30	0.58		15 石 核 チャート質	14	7.00	6.29	3.19		
2 石 器 玉 軸	0.95	2.10	1.31	0.32		16 ×	起 岩	73	5.82	4.85	3.25	
3 × 貞 岩	0.70	2.11	0.90	0.91		17 ×	石 英	34	5.45	4.04	1.91	
4 健 慈 アブライト		8.28	6.21	1.70		18 ×	貞 岩	71	5.42	6.69	2.41	
5 石 製 品 安 山 岩		6.84	6.18	4.09		19 フ レ イ ク	貞 岩	15	6.30	4.46	1.00	
6 磨石・砕石	487	9.95	7.20	6.30		20 ×	フ リ ン ト	12	3.61	3.89	1.15	
7 ×	560	11.40	8.04	4.60		21 ×	フ リ ン ト	9.41	2.39	3.05	1.50	
8 × 安 山 岩	305	12.05	6.55	2.79		22 ×	起 岩	10.1	3.60	3.20	1.30	
9 ×	346	7.16	6.65	5.70		23 ×	起 岩	19	3.90	3.70	1.80	
10 石 核 研 灰 岩	213	9.21	7.35	2.90		24 ×	起 岩	9.20	4.40	3.25	1.30	
11 × 石 英	23	4.90	3.08	1.75		25 ×	×	23	3.61	3.35	2.24	
12 × 波 紋 岩 チャート質	12	4.10	2.95	2.25		26 ×	研 石	1.20	3.25	1.90	0.90	
13 × 铁 石	399	9.20	6.82	4.86		27 ×	铁 石	3.50	2.45	2.20	1.06	
14 × フ リ ン ト	No7 10 34	No8 5.50	5.41 4.30	1.99 5.55	5.53 1.70 1.71 1.12		28 ×	波 紋 岩 チャート質	9.90	3.60	1.70	1.44

まとめ

本住居跡は後世の削平を受け2/3程カットされてはいるが、ほぼ直径4m程の円形に近いプランを呈するものと考えられる。出土遺物には石片類が多く、当所において盛んに石器製作が営まれた事が推察される。本住居跡の時期であるが、浅鉢の存在から考えて、ほぼ晩期中葉に比定されるものと考えられる。

(松本)

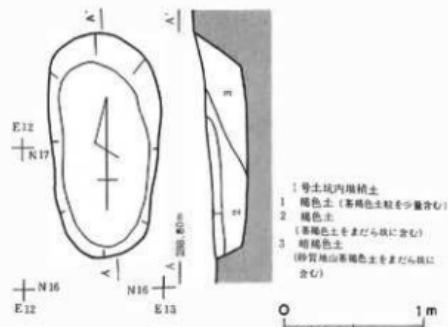
第2節 土坑・その他

杉内C遺跡からは9基の土坑とピットが多数検出されている。これらの遺構の時期や機能について判断し得るような遺物の出土は非常に少なく不明な点が多い。本節ではこれらの点に留意しながら、若干の説明を加えていく事とする。

土 坑

1号土坑 SK01(第13図、図版5)

I-1グリッドで検出された土坑で、開田時に削平を受け遺構東側の遺存状態は良くなかった。平面プランは長径163cm、短径55~78cmの椭円形を呈し、長軸はほぼ南北方向を指している。壁高は西側で35cm、東側では8cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、断面はナベ底状を呈する。堆積土は褐色土と暗褐色土に大別され、堆積状態は北側からの堆積



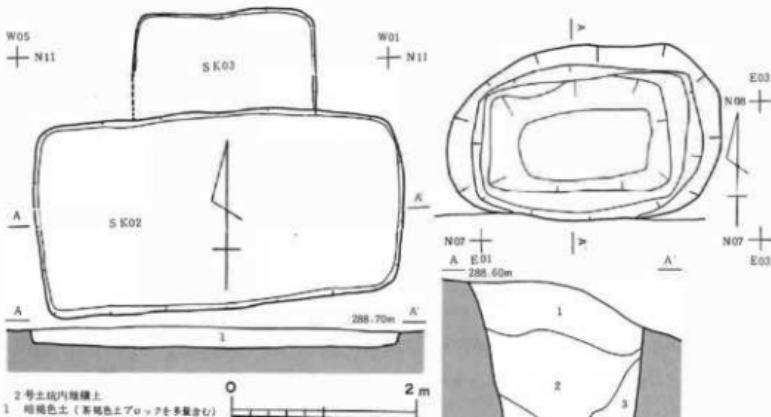
第13図 1号土坑

が観察された。2・3層中には地山の茶褐色土がまだら状に混入し、人為的堆積と考えられる。遺物は埋土中より縄文晩期の土器破片が一点出土している。

(松本)

2号土坑 SK02(第14図、図版6)

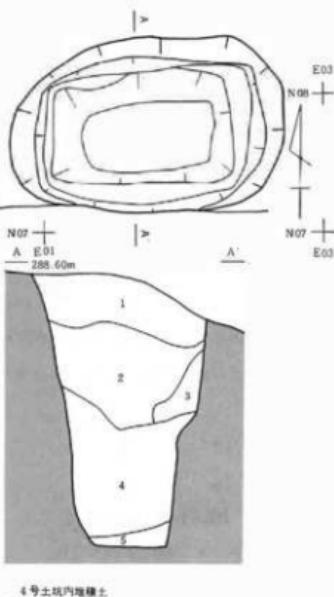
D-3・4~E-4グリッドに検出された土坑で、北壁中央で3号土坑、南西コーナーで5号土坑と重複している。重複関係は3号土坑の遺存状態が極めて悪いため不明であるが、5号土坑よりも新しい。プランは長軸4m、短軸2.15mの長方形を呈し、長軸はほぼ東西方向を指す。壁は



第14図 2・3号土坑

急傾斜で立ち上がり、壁高は15cmを測る。底面はほぼ水平であった。堆積土は1層で、茶褐色土ブロックを多量に含み人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物はロクロ未使用の土師器破片が埋土から10数片出土していることから1号住居跡とはほぼ同時期内と考えられる。
(松本)



4号土坑内堆積土
1 棕色土
2 喀斯特色土
3 喀斯特褐色土(砂質地山巣褐色土が2層にまだら状に嵌入)
4 茶褐色土(2層と砂質地山巣褐色土の互層)
5 黑褐色土(砂質で多量の水分を含む)

3号土坑 SK03(第14図、図版6)

D-3グリッドに位置する土坑で、2号土坑

と切り合い関係にあるが、新旧関係は不明である。プランは現状で南北1.08m、東西2.0mを測るが、南北に長軸を有する長方形を呈したものと考えられる。壁高は5cm前後で西壁では一部消失しており、やや緩やかに立ち上がっている。底面には凸凹が認められる。

堆積土は2号土坑と非常に似かよっており、人為的堆積と考えられる。

遺物はロクロ未使用の内黒土師器破片が埋土から1片出土しているため、切り合いが認められるものの2号土坑に近接した時期でとらえられる。
(松本)

第15図 4号土坑

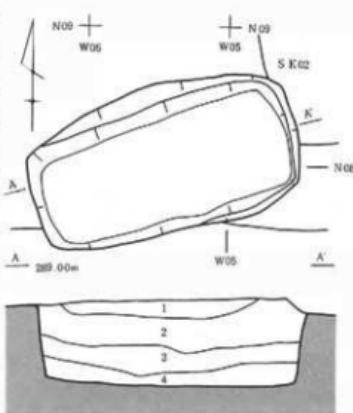
4号土坑 SK04(第15図、図版7)

F-4グリッドに位置し、南側を一部開田時にカットされているが遺構の遺存状態は良好であ

る。プランは確認面においては 1.98×1.26 mの梢円形を呈するが、中位よりは長方形に掘り込まれている。長軸方位はほぼ東西方向を指す。壁高は1.95mを測り、急傾斜で立ち上がり、中位で緩やかになった後再び急激な立ち上がりを示す。底面はほぼ水平である。

堆積土は5層に分層し得たが、4層中には地山の茶褐色土がブロック状に多量に含まれており、埋めもどされたものと考えられる。

遺物は、縄文土器の小破片10数片とチップ1片が埋土から出土している。
(松本)



5号土坑 SK05 (第16図、図版8・9)

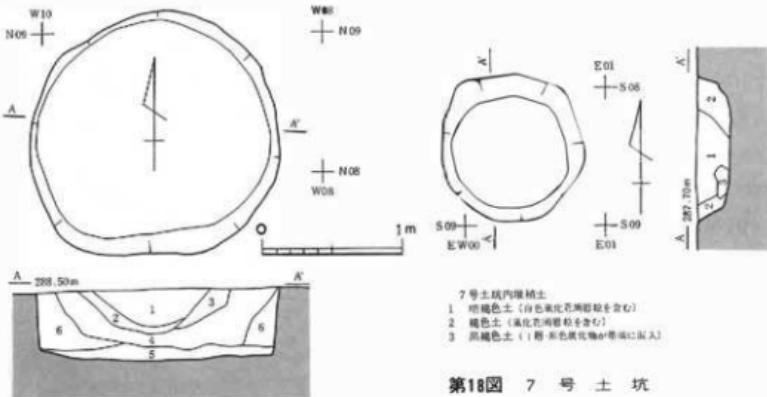
発掘区中央部、北側斜面で検出された。斜面に従って北側から南側に向かって削平されている。削平は特に南側で顕著である。2号土坑と切り合間

係にある。当土坑の一部が2号土坑によって破壊されており新旧関係は本遺構のはうが古い。長軸1.88m、短軸0.9mの東西に長い方形のプランを呈する。検出面からの深さは、55~65cm前後を測る。床面は、ほぼ平坦で、各壁とも急な立ち上がりを示す。堆積土は、暗褐色土、褐色土など4層からなる。各層は、水平的な堆積状況を示し、3・4層に茶褐色の地山粒子が斑文状に混入しているところから、堆積土は人為的に埋められた可能性が強い。長軸の傾きは、N-72°-Eである。堆積土からの遺物は、縄文土器破片4点、ロクロ未使用土師器甕破片11点が出土している。縄文土器破片はいずれも無文であり、表面は著しく磨滅している。
(阿部)

6号土坑 SK06 (第17図、図版10)

発掘区中央部北側斜面で検出された。5号土坑の西側に位置する。ほぼ円形のプランを呈し、径約1.75mを測る。検出面からの深さ約40~50cm。底面はほぼ平坦で、各壁は垂直に近い立ち上がりを示す。

堆積土は暗褐色土、黄褐色土、暗茶褐色土など6層からなる。1・2・3層で、レンズ状の堆積を示すが、4・6層で茶褐色の地山粒子がブロック状に混入し、堆積土は人為的に埋められたと思われる。遺物は、チップ2点、フレーク1点が堆積土から出土している。
(阿部)



第17図 6号土坑

- 6号土坑内堆積土
 1 暗褐色土（黄褐色土・白色土跡を含む）
 2 暗褐色土（黄褐色土・白色土跡を含む）
 3 黄褐色土（暗褐色土を含む）
 4 黄褐色土（黄色ブロッケ跡を含む）
 5 白質褐色土
 6 單質褐色土（白色ブロッケ・暗褐色土を含む）

第17図 6号土坑

第18図 7号土坑



7号土坑 SK07(第18図、図版11)

発掘区中央部、南側の斜面で検出された。プランは南北に僅かに長いが、ほぼ円形である。南北約1.5 m、東西約1.0 mを測る。検出面からの深さは約25 cmで、遺構の大半はすでに削平されたものと思われる。底面は、中央部に向かって僅かに傾斜しているが、ほぼ平坦である。各壁は緩やかな立ち上がりを示す。

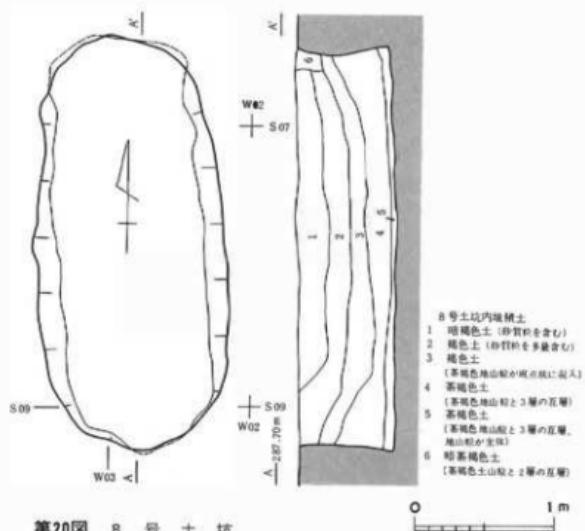
堆積土は暗褐色土、褐色土、黒褐色土の3層からなる。暗褐色土には、炭化物を含む黒褐色土がブロック状に混入しており、堆積土は人為的な堆積と考えられるが判断はできない。埋土中より縄文晩期の土器が2点出土している。うち1点が図化できた。

浅鉢(第19図)底部から体部にかけてほぼ1/4遺存する。器形は底部は上げ底を呈し、体部は直線的に開く。文様は施されていない。胎土には石英粒・砂粒を含み粗く、焼成は悪い。推定底径6.3 cm、器厚0.5 cm前後を測る。
(阿部)

8号土坑 SK08(第20図、図版12)

発掘区中央部、南側斜面、7号土坑の西側に位置している。プランは、東西が約1.4 m、南北が

約3.0mを測り、南北に長い橢円形を呈する。検出面からの深さ約70cm、底面はほぼ平坦である。各壁は急な立ち上がりを示す。堆積土は、6層からなる。各層は1・2層を除き地山粒子を含み、水平的な堆積状況を示しており、堆積土は人為的に埋められたと考えられる。出土遺物はなかった。長軸の傾きは、N-12°-Wである。(阿部)



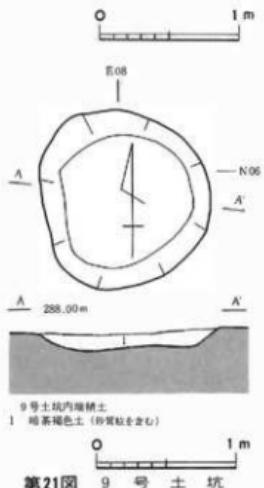
第20図 8号土坑

9号土坑 SK09(第21図、図版13)

発掘区中央部の東側斜面、2号住居跡の南側に位置する。堆積土は暗茶褐色土1層で地山粒子を含むが、遺構の大半は削平されていると思われ、自然堆積か、人為的堆積かは判断がつかない。

プランは、南北に僅かに長いが、径60~65cm前後の円形を呈している。検出面からの深さ約10cm。底面は、東から西に向かってやや傾斜するが、ほぼ平坦である。遺物は、底面から体部下半に段をもつロクロ未使用的土師器杯破片1点が出土している。

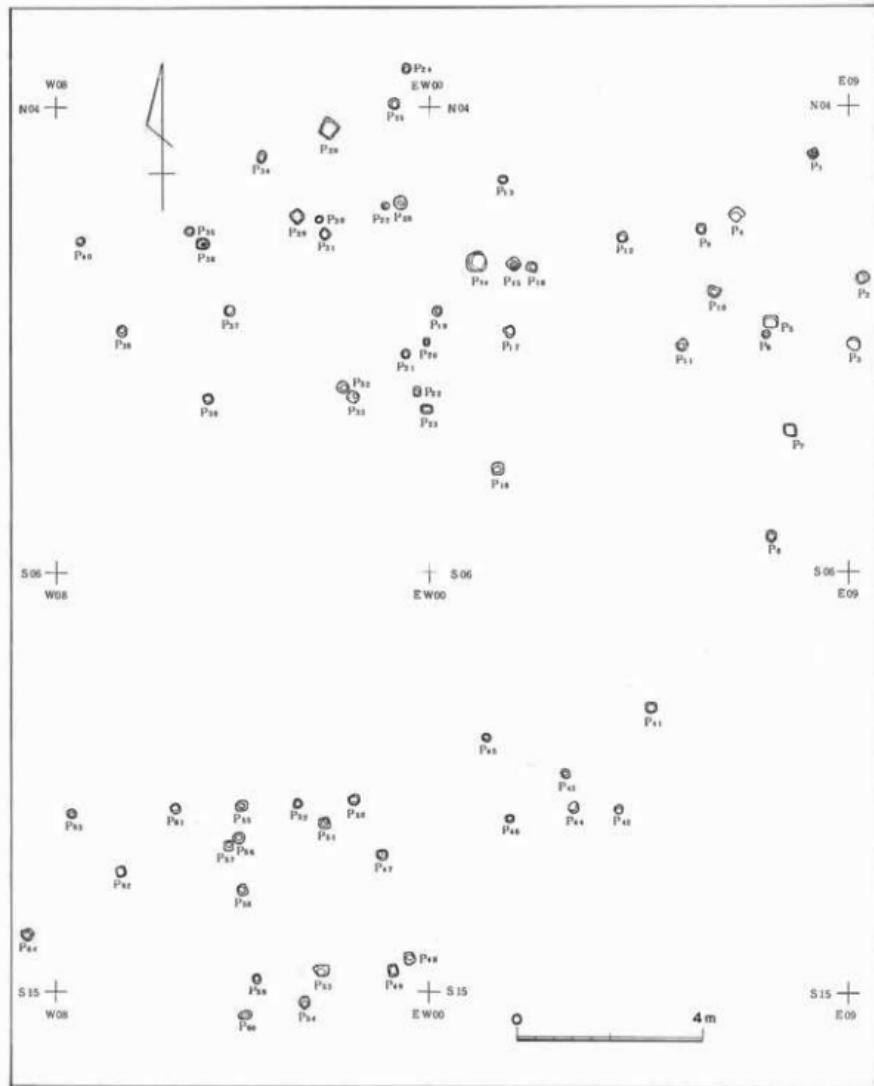
(阿部)



第21図 9号土坑

ビツト群(第22図)

調査区の中央部及び台地の南端部で検出された。他の遺構との重複関係はなく、両ブロックと



第22図 ピット群

も東西に広がりをみせている。検出面は削平のためすべて地山面である。

ピットの総数は64個で、柱痕の認められたものも数個存在する。大きさ、深さはまちまちで、統一性は認められない。すべて柱穴として考えた場合でも、建物としての組み合わせは認め難く、その性格は不明である。

遺物は出土せず、重複関係もないことから、時期については明言できるものはない。杉内B遺跡のピット群と本遺構の性格が同じものであるとすれば、やはりその時期もかなり下るものと考えられる。

(安田)

第3表 ピット群計測値一覧表

No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	単位(cm)	
																	深さ	径
深さ	9	32	33	20	31	18	35	11	15	32	33	22	17	19	18	17		
径	20×19	25	27	26×28	30×24	17	26×25	21	20×21	25	22	20×20	19	34	24×23	19×21		
No	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32		
深さ	19	37	33	11	27	11	29	10	11	6	9	6	16	18	9	33		
径	24×21	24×26	20	16	19	15×19	24×19	18	22	28	15	34×39	28×26	14	23	23		
No	33	34	36	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48		
深さ	40	8	20	11	29	22	20	17	23	21	22	27	9	7	51	29		
径	24×22	16×25	20	24	22	19	22	17	24	17	20	22	17	17	22	24×21		
No	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64		
深さ	35	18	38	13	49	44	27	25	53	33	30	20	14	49	25	44		
径	20×24	21	23	19	30×21	22	22	24	23×23	22×19	20	29×17	20	17×20	19	25		

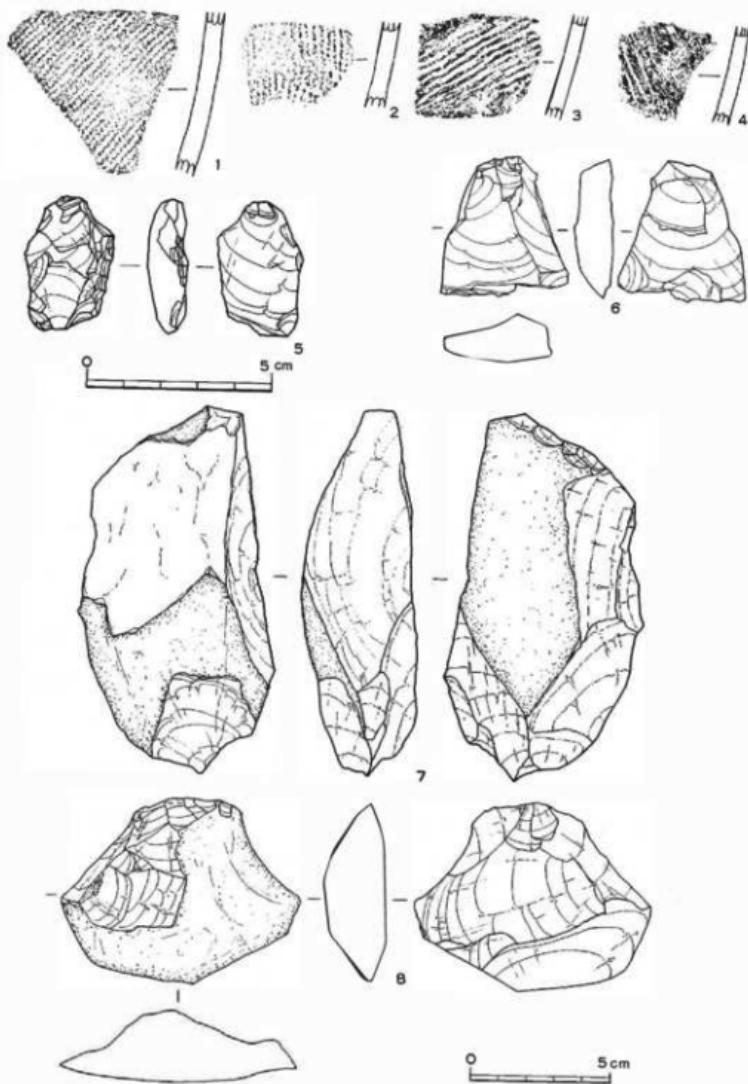
表土出土の遺物

表土からは、小量の縄文土器、数点の石核、剥片と多量の土師器破片、須恵器破片若干及び砥石1点が出土している。出土地点は遺跡の先端付近に集中し、遺物は、開田時に台地上位から押されたと考えられる土層中より出土している。これらのうちから、図化し得たものについて述べる事とする。

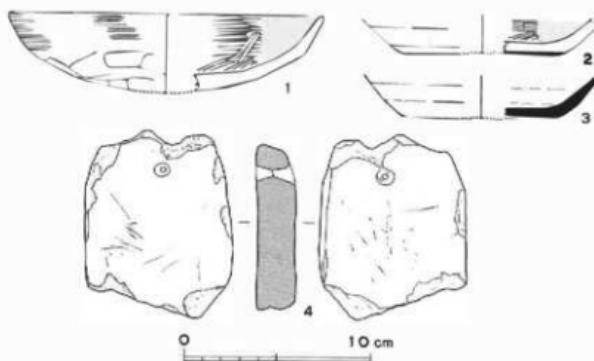
縄文土器(第23図1~4) (1)(2)は節の細かい縄文が施されるもので、LRの単節斜縄文である。(3)(4)は撚糸文が施される土器である。(3)は密に、(4)はやや粗く施されている。これらの土器は、2号住居跡出土遺物との共通性が考えられ、縄文晩期中葉に比定されよう。

石核・剥片(第23図5~8) (7)は硬砂岩製の石核である。周縁より中央に向かって打面を任意に移動させ、剥離を行っている。(8)は流紋岩製の石核で、片面に自然面を残す。(6)は石英粗面岩製の剥片と考えられる。(5)はチャートの剥片である。裏面に主要剥離面が認められ、一部に刃部が形成されている。

土師器(第24図1・2) 図化したものは2点ある。杯1は、X-2グリッドより出土した。口縁部から体部にかけて全体の約1/3が遺存している。ロクロ未使用で内彎する口縁部を持ち、体部と口縁部の境には稜を有している。外面の調整は口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリで内面はヘラ



第23図 表土出土縄文土器拓影・石核・剥片



第24図 表土出土土師器・須恵器・砥石

ミガキを施し、さらに黒色処理が行われている。推定口径 17 cm を測る。

杯 2 は、丘陵先端部表土中より出土した。底部から体部にかけて全体の約 1/3 が遺存している。ロクロ使用で大きめの底部を有し、体部は緩やかに立ち上がっている。外面の調整はロクロナデ、底部は回転糸切りの後、手持ヘラケズリで調整されている。内面は、ヘラミガキを施し、後黒色処理が行われている。推定底径は 8.5 cm を測る。

須恵器・杯(第24図3) F-1 グリッドより出土した。底部から体部にかけて全体の約 1/5 程が遺存する。底部は、回転ヘラ切りで切り離し、さらに手持ヘラケズリ調整されていると思われるが、破片のため断定はできない。

石製品(第24図4) 砥石が1点検出されている。石質は、綿雲母片岩で、最大長 9.8 cm を測る。断面の状況から判断すると、本来はさらに長い砥石であったと思われる。最大幅 7.8 cm、厚さ 1.8~2.1 cm。割れたと思われる一面を除く五面は、研磨により磨滅している。表裏二面には、鉄製利器によるとみられるやや深い切り込み痕が、さらに先端には鋭利な鉄製利器により、あけたとみられる径約 8 mm の貫通孔が観察される。貫通孔は、中央で径 4 mm と狭くなっており、表裏二面側からあけられたと思われる。

(松本)

第3章 考察

杉内C遺跡からは縄文時代晩期に比定される住居跡1軒、奈良時代に比定される住居跡1軒、その他土坑9基、ピット多数が検出された。これらのなかで土坑・ピットは、確實に遺構に伴う遺物の出土は認められず、所属時期については不明な点が多い。本章では検出された遺物・遺構について、特に住居跡及び住居跡出土遺物を中心とし、時代別に分け若干の検討を加えたい。

第1節 遺物について

今回の調査において出土した遺物は、縄文土器・石器を始めとする石器類・土師器・須恵器・鉄器などがある。これらの遺物については、第2章において個々に説明を加えた。本節では重複する点もあるが、若干の問題点と時間的位置を明らかにしておきたい。

縄文時代の遺物

土器 2号住居跡、1・5・7号土坑及び表土中より約200片出土している。時期的には縄文中期～晩期に比定されるが、晩期中葉の土器が主体を占める。

縄文中期～後期の土器としては2号住居跡堆積土中より出土した粒の大きな縄文が施された比較的厚手の土器が2片(第6図)ある。

縄文晩期中葉の土器としては2号住居跡から器形の判明する3個体の土器と約200片の破片の出土がある。これらを器種別・文様別に概観すると、入組文による所謂太腿骨文モチーフが表出された浅鉢と、縄文・平行沈線文・ハケ目文・網目状撚糸文・撚糸文が施された深鉢がある。

福島県内における晩期中葉の土器を出土する遺跡としては、いわき市寺脇貝塚(註1)・薄磯貝塚(註2)・新地町三貫地貝塚(註3)・会津坂下町金山遺跡(註4)・古殿町萱付遺跡(註5)・郡山市雇沢遺跡(註6)・一人子遺跡(註7)・石川町鳥内遺跡(註8)などが知られている。これらの遺跡出土の浅鉢と杉内C遺跡2号住居跡出土の浅鉢を比較すると、器形において前者が丸底盤の底部を有し、体部が内彎気味に立ち上がる器形を呈するものが多いのに対し、後者は明確な平底を呈し、体部が直線的に開く点、文様が所謂真性な太腿骨文とは異なり、やや簡素化の傾向がうかがわれる点などが、相違点として指摘されよう。網目状撚糸文・撚糸文を有する土器は一人子遺跡・寺脇貝塚の例では大洞C₂式の各種壺形土器の胴部文様として、また粗製深鉢の文様として用いられ、器種・文様を考え合わせて、『在地性の強い土器』(註8)との指摘がなされている。

石器 2号住居跡、および表土中より出土している。これらは、砥石を除いて2号住居跡とはほぼ同時期のものと考えられる。器種としては、石鎌・礫石・磨石・凹石・石製品・刃部を有する剝片・石核・剥片・チップ類である。

これらの石器のうち礫石として取り上げた(第8図4)は、周縁に鋭さを欠く刃部を作り出しておらず、スクレイパーとも考えられるが、偏平な河原石の剝離片を利用し、周縁両面から中央に向かって粗く剝離を行い、梢円形状に整形している様子もうかがわれる。近年岩手県内の同時期の遺跡で検出され、円盤状石器と提唱されている遺物と類似する性格を有するとも考えられる。本石器の用途については、不明な点が多い。石製品とした(第8図5)は、利器としての使用痕は認められず、形状自体に本来的な意義があったものと考えられる。類例としては、時期は異なるが郡山市びわ首沢遺跡(註9)やほぼ同時期の水沢市九年橋遺跡(註10)で出土した石器の中に、円盤状の片面に石皿状の窪みを有する石製品が認められる。びわ首沢遺跡においては、セックシンボルとしての機能が提唱されている。一方本石製品の他面には石棒先端部と共通すると考えられるくびれ部が作り出されており、セックシンボルの可能性の強い遺物と考える事も可能であろう。石製品・剝片・石核等に使用された石質についてみると、10種の石質が認められる。このうち真岩に限るとさらに20数種の母岩に细分され、杉内C遺跡においては石材選択に真岩に占めたウェートが大きかった事が考えられる。

奈良・平安時代の遺物

土師器 出土した土師器は、全部で1057片を数える。ロクロ未使用とロクロ使用のものに分られるが、杯破片においてはロクロ未使用24片、ロクロ使用65片であった。図化し得たものは、1号住居跡出土の杯2点・鉢1点、表土出土の杯2点である。このうち、ロクロ使用のものは、表土出土の1点だけである。1号住居跡出土の杯2点は、有段の丸底を呈するものと、丸底で体部立ち上がりが内彎し内外面共に黒色処理されているものである。いずれも東村谷地前C遺跡2号住居跡出土の杯と近似しており(註11)、同時期の所産と考えられる。表土出土のロクロ未使用的杯は、丸底で口縁部と体部の間に稜を有し、谷地前C遺跡2号住居跡出土の遺物より後出する可能性もある(註12)。なお石川町達中久保遺跡59号住居跡では、稜を有する杯と有段の杯が併出している。これらはいずれも、国分寺下層期の中で理解し得るものである。ロクロ使用の杯1点は、表杉ノ入期の所産である。

須恵器 表土より17片出土している。図化し得たのは1点だけである。9世紀初頭のものと思われる。

鐵鎌 1号住居跡から1点出土した。鎌身が五角形を呈する有茎の鐵鎌である。県内における鐵鎌の出土例は、比較的多い。谷地前C遺跡からは、種々の形態の鐵鎌が出土している。(松本)

第2節 遺構について

本遺跡は、開析谷に面する丘陵先端部に位置している。検出された遺構は、竪穴住居跡2軒・土坑9基、およびピット群である。調査区北側斜面に竪穴住居跡と土坑7基が、南側斜面に土坑2基が、それぞれ分布している。ピット群は、中央部から南側斜面にかけて広がっている。今回の発掘調査は、かなり小規模な調査であったため、集落の構造を具体的に解明できるような成果はなかった。

検出された2軒の住居跡は、伴出した遺物から次の時代に比定される。

縄文時代晚期の住居跡 …… 2号住居跡

奈良時代の住居跡 …… 1号住居跡

縄文時代晚期の住居跡

本県における晚期の住居跡を具体的に示す発掘例は、石川町鳥内遺跡の1・2・5号遺構(註8)や郡山市雁沢遺跡(註6)など数例にすぎない。鳥内遺跡の1号遺構は、径約2~3mの楕円形のプランを持ち、中央部で大形の河原石で作られた石囲炉が検出された。2号遺構のプランは、3.3×3.4mの不定形で、付属施設として石囲炉・埋設土器が認められた。5号遺構は、隅丸方形のプランで、2基の石囲炉は小児頭大的河原石で構築されていた。雁沢遺跡で検出された住居跡は、径約5mの円形プランを呈し、石囲炉を伴っていた。これらの遺構は、平面プランに若干の差異があるものの、石囲炉を伴うことでは共通している。

2号住居跡は、削平を受け全体の1/3程しか遺存していないが、本来は径約4mの円形プランを呈していたと思われる。2号住居跡は、平面プランの点で鳥内遺跡1号遺構・雁沢遺跡の住居跡と共に通している。炉は、鳥内遺跡・雁沢遺跡で検出された石囲炉と異なり地床炉であり、この点に違いが認められる。2号住居跡では、地床炉を囲むように6個のピットが検出された。径10~20cm前後で、柱穴と考えられる。柱穴と考えられるピットは、鳥内遺跡5号遺構・雁沢遺跡の住居跡でも検出されている。

以上、本県での発掘例を取り上げ、2号住居跡との関連で述べてみた。発掘例が少なく、住居跡の平面プランや住居跡と炉の関係、柱穴の配置等不明な点が多い。今後は、発掘例を増やしこれらの点についてさらに検討する必要があろう。なお、本遺跡の西方約70mに位置する杉内D遺跡は、今回の発掘調査の対象外となつたが、昭和54年11月県文化センター遺跡調査課の試掘で晚期に比定される縄文土器破片を出土している。2号住居跡を含む集落は、さらに西方に広がっている可能性もある。

奈良時代の住居跡

奈良時代の住居跡は、1号住居跡のみであり、これに集落の構成要素を求めるることはできない。また丘陵先端部に住居跡が作られた契機を、今回の調査で具体的に解明することはできなかった。1号住居跡と同時代に比定される住居跡は、東村佐平林遺跡V区(註13)1号住居跡、同村谷地前C遺跡2号住居跡(註11)・石川町達中久保遺跡2号住居跡(註12)などがある。1号住居跡は、規模や構造の点で大差ないが、検出された6個のピットのうち2個がカマド両袖側に位置していた。2個のピットは、カマドの上屋に関連する柱穴と思われ、カマドの構築方法や構造を考えるうえで、興味ある事例と言えよう。

その他の遺構

9基の土坑は、堆積土の状況から

人為的に埋められたと考えられるもの 1・2・3・4・5・6・8号土坑

自然堆積か人為的堆積か、判断つかないもの 7・9号土坑

とすることができる。遺物は、1・7号土坑で縄文土器破片、2・3・9号土坑で土師器破片、5号土坑で縄文土器破片・土師器破片が出土している。土師器破片は、いずれもロクロ未使用のものである。出土遺物から縄文・奈良時代に二分し、1・2号住居跡に対応させることも可能である。しかし、土坑はいずれも著しく削平され、また遺物量が少ない。さらに土坑・住居跡内堆積土の関連を具体的に知り得ず、土坑の時期や性格については不明とせざるを得ない。但し、9号土坑から、ロクロ未使用の有段の土師器杯破片が底面から出土しており、9号土坑は2号住居跡と同じく奈良時代に比定されよう。

64個のピットは、建物としての組み合わせはないが、数個について柱痕が認められる。他遺構との切り合い関係や出土遺物はなく、ピット群の時期や性格については不明である。(阿部)

参考文献

- 馬目順一他『寺脇貝塚』1966年
- 磐城高等学校史学部後援会『薄磯貝塚』1980年
- 玉川一郎「田丁場B地点調査概報」「三貴地」1978年
- 『会津坂下町金山A遺跡』「福島県史第6巻」
- 『古殿町壹付遺跡』「福島県史第6巻」
- 田中正能『雁沢遺跡』「郡山市熱海地区切抜・雁沢遺跡発掘調査報告書」1969年
- 馬目順一『一人子遺跡の研究』1970年
- 目黒吉明他『鳥内遺跡発掘調査概報』1971年

- 註 9. 郡山市教育委員会『びわ首沢遺跡』1980 年
- 註 10. 北上市教育委員会『九年橋遺跡三次・五次・六次報告書』1977・1979・1980 年
- 註 11. 玉川一郎・山内幹夫『谷地前 C 遺跡』「母畑地区遺跡発掘調査報告 II(福島県文化財調査報告書第 67 集)」福島県教育委員会・(財)福島県文化センター 1978 年
- 註 12. 阿部正行・大越道正『達中久保遺跡』「母畑地区遺跡発掘調査報告 III(福島県文化財調査報告書第 74 集)」福島県教育委員会・(財)福島県文化センター 1979 年
- 註 13. 玉川一郎・山内幹夫『佐平林遺跡(V 区)』「母畑地区遺跡発掘調査報告 II(福島県文化財調査報告書第 67 集)」福島県教育委員会・(財)福島県文化センター 1978 年

図 版



1. 杉内 C 遺跡遠景(南西より)



2. 杉内 C 遺跡遠景(西より)



3. 1号住居跡



4. 2号住居跡

5. 1号土坑



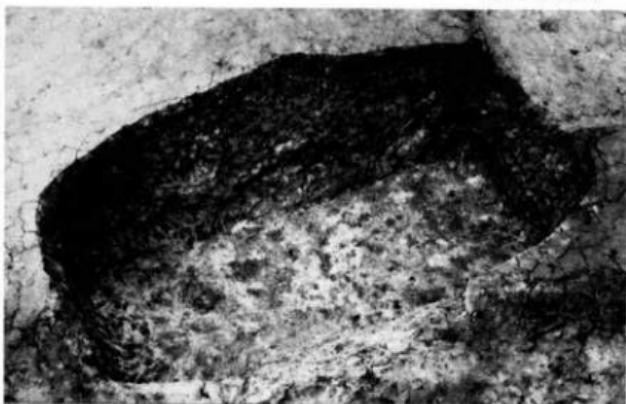
6. 2·3号土坑



7. 4号土坑



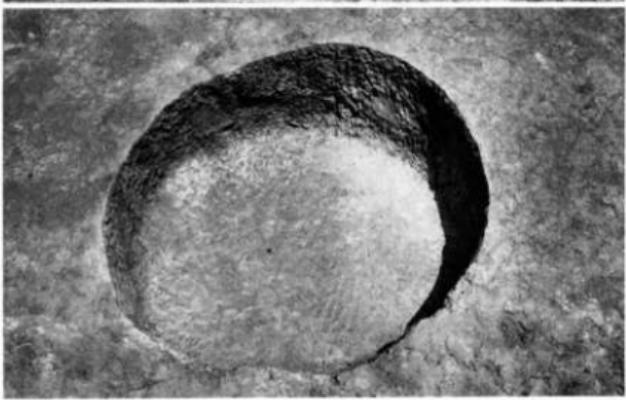
8. 5号土坑



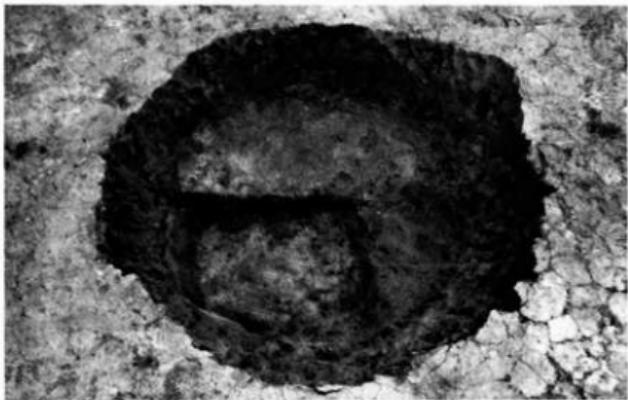
9. 5号土坑セクション



10. 6号土坑



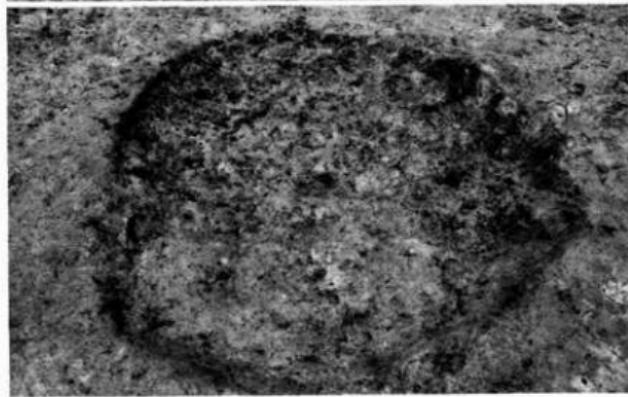
11. 7号土坑

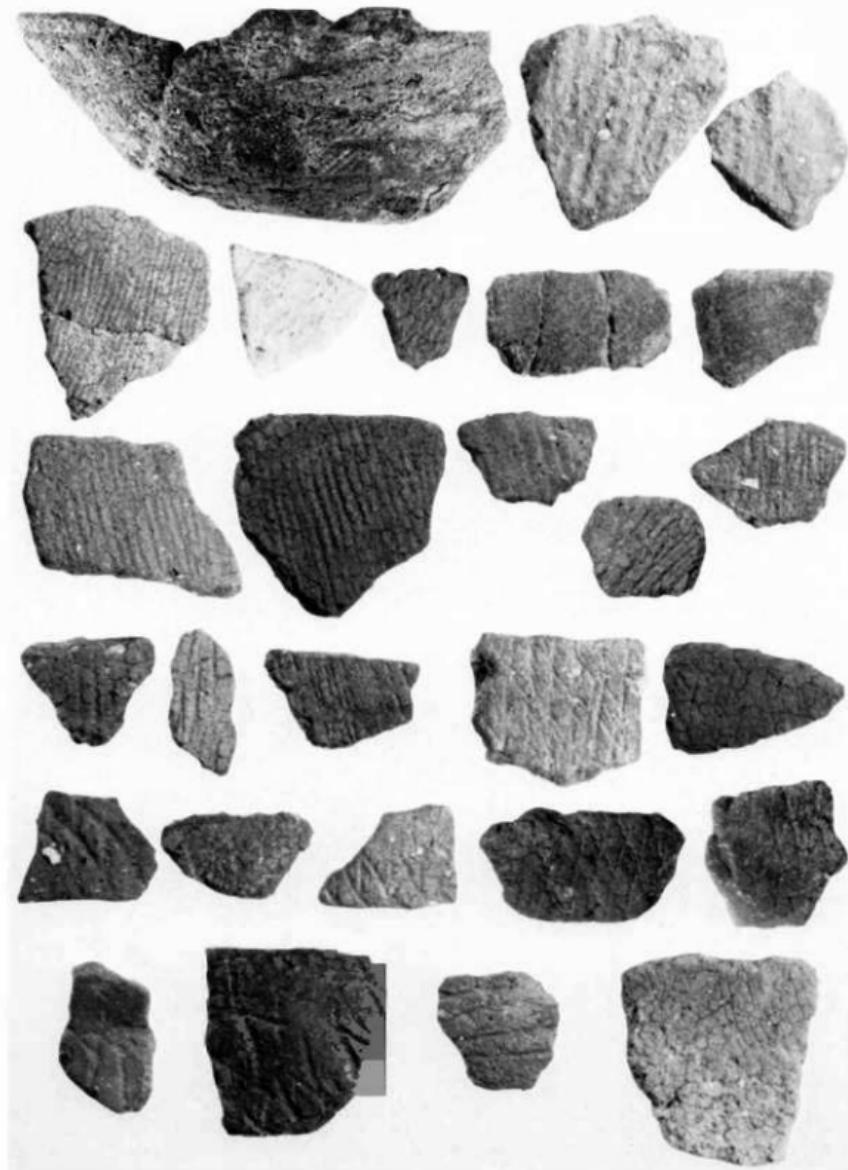


12. 8号土坑

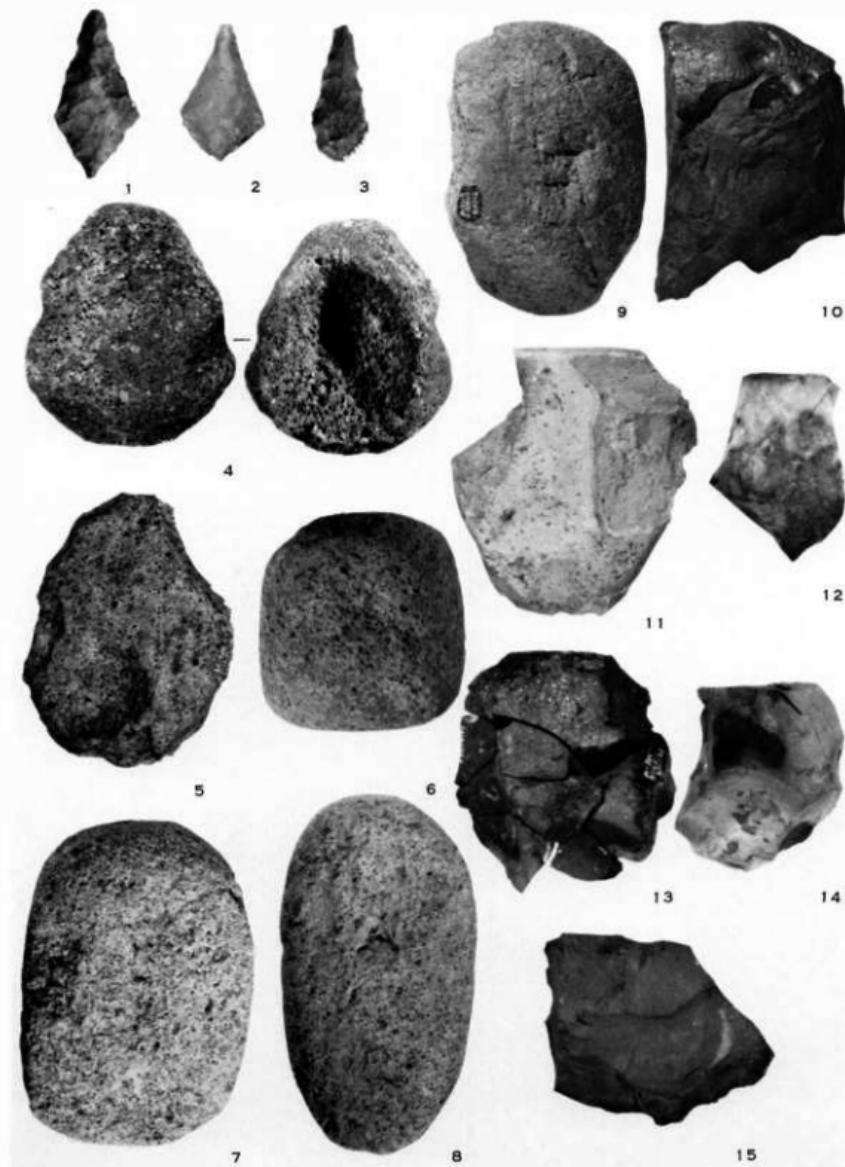


13. 9号土坑





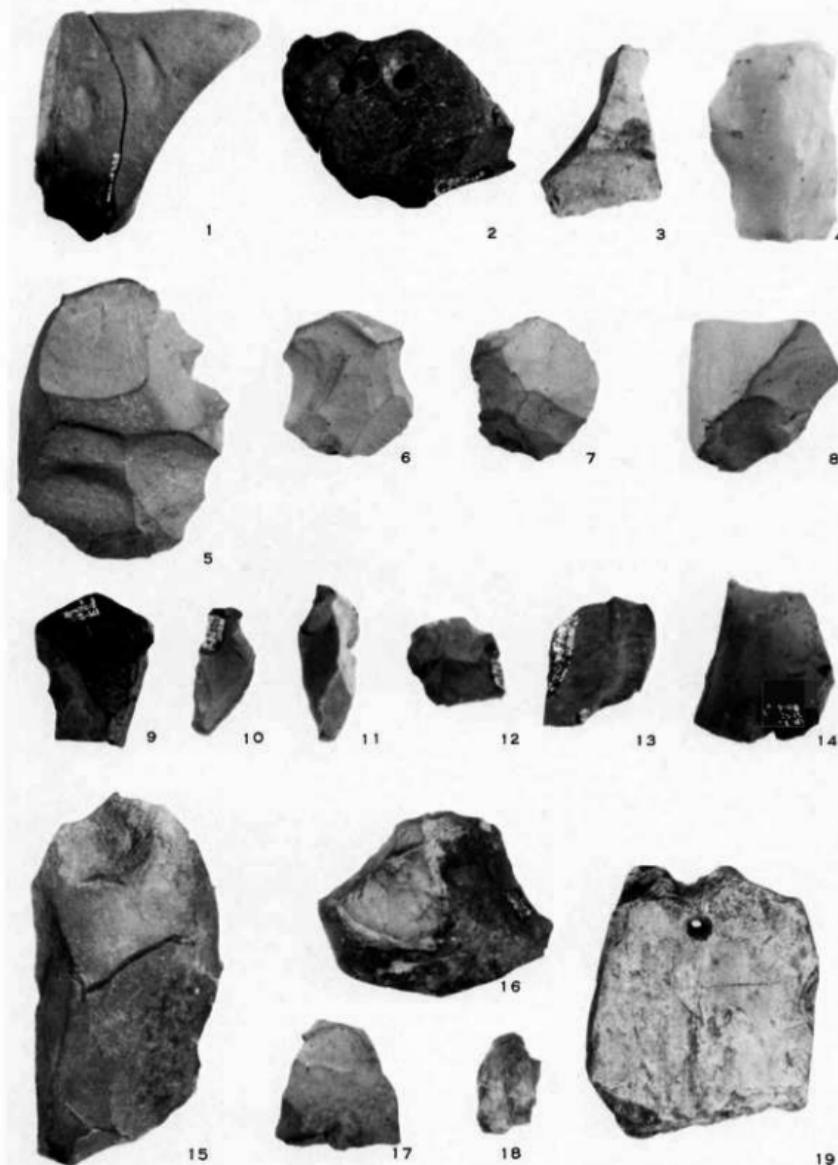
14. 2号居住跡出土縄文土器



15. 2号住居跡出土石器類

石鏽(1~3)・石製品(4)・礫器(5)・磨石・凹石(6~9)

石核(10~15)



16. 2号住居跡・表土出土石器類

2号住居跡出土 石核(1~4)・剝片(3~14)

表土出土 石核(15~16)・剝片(17~18)・砥石(19)

第3編 杉内E遺跡

遺跡記号 IK-SU-E
所在地 石川郡石川町大字中野字杉内
時代・種類 平安時代～集落跡
調査期間 昭和55年6月26日～8月5日
調査員 大越道正 松本茂
安田稔 石川俊英
協力機関 石川町教育委員会

第1章 調査経過

第1節 位置と地形

杉内E遺跡は石川郡石川町大字中野字杉内に所在する遺跡である。その面積は4,500m²におよび丘陵の東斜面から南斜面にかけて広がっている。遺跡の立地する丘陵は、細く枝分かれした阿武隈川の支流によって開拓された丘陵で、現在でも遺跡南側の沖積面を流れる幅1.5m程の小川は遺跡から約1.2km南西へ行った所で阿武隈川と合流している。現況は一部削平されて畠地となってしまっており、丘陵に挿まれた狭い沖積面には沢の奥まで階段状に水田が続いている。そしていくつもの舌状台地を有しながら東西に延びるこの丘陵の南側斜面には、杉内B・C・D遺跡が東側から並んでいる。

遺跡の立地するこの地域は阿武隈山系でも、西側に広がる丘陵地帯の一部にあたっている。同じような地形の下に営まれた集落跡としては、石川町だけでも源平A遺跡・小田口A遺跡・井戸上A遺跡・杉内B・C遺跡を挙げることができる。そしてそれはいずれも沢の入り組んだ狭い丘陵の斜面に立地し、充分な耕地面積を確保できたとはとても考えられないような場所ばかりなのである。

(安田)

第2節 調査経過

杉内E遺跡は昭和53年、県文化センター遺跡調査課によって発見された遺跡で、昭和54年に試掘調査を行っている。試掘調査では10,500m²を対象としたが、調査の結果、遺跡の範囲は4500m²に及ぶことがわかり、その範囲を要保存として呈示した。昭和55年度11工区の母畑事業の工事実施計画では、杉内B・C・E遺跡が工事実施区域に縫り込まれることとなり、事業所との文化財保護側の保存協議の末、杉内E遺跡については遺跡の立地する台地の先端のみ記録保存を行い、他は盛土工法によって対応することになった。

遺跡調査課では、5月19日より杉内B遺跡の発掘に着手し、継続してC・E遺跡を行い8月5日に終了している。3遺跡は近接していたことから同時に発掘を進行させた期間もあり、開始と終了時期が重複している部分もある。

発掘調査日誌概要

6月26日 下草刈りの後、3×3mのグリッドを20設定し表土削ぎに入る。

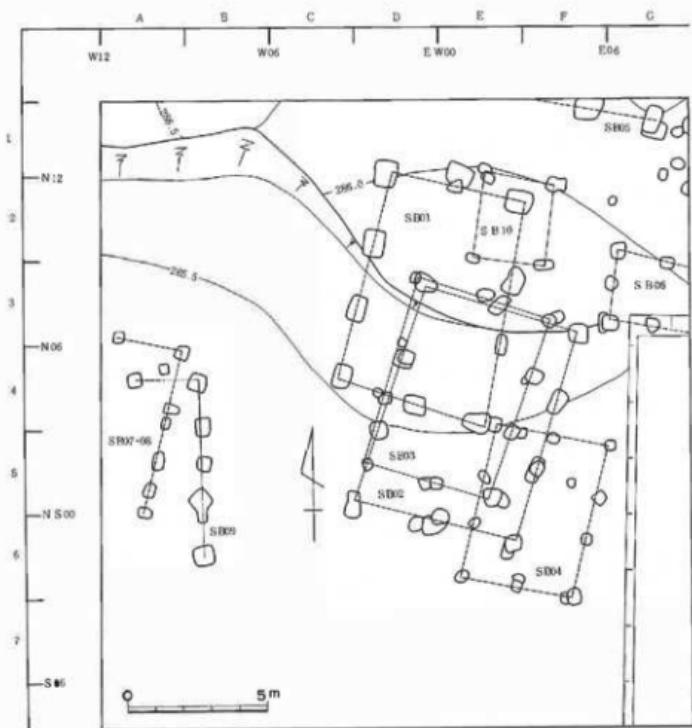
6月27日 E-5グリッド付近で須恵器の大甕が出土する。



第1図 杉内E遺跡周辺地形図

- 7月 3日 柱穴が数基確認され、平面プラン確認のため北側にグリッドを拡張する。
- 7月 11日 雨が続き作業の進展がやや遅れる。
- 7月 15日 ベンチマークを設定する。標高 286.0mを測定。
- 7月 17日 基本層位を実測して最後のベルトを撤去する。
- 7月 23日 遺構検出作業を進め、発掘期間の関係から、基準杭を入れた割り付け用紙に検出された柱穴を隨時図化していく。
- 7月 29日 建物跡の平面プランを確認した段階で、それぞれの断ち割りに入る。
- 7月 31日 7・8・9号建物跡が新たに検出される。
- 8月 4日 7・8・9号建物跡の断ち割りを行う。
- 8月 5日 完掘状態の写真撮影を行い調査を終了する。

(安田)



第2図 杉内E遺跡遺構配置図

第2章 遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は掘立柱建物跡だけで、竪穴住居跡・土坑などはまったく検出されていない。したがって第2章での節の見出しあは、第1節掘立柱建物跡・第2節その他の遺物の2節からなり、特別に住居跡・土坑などの節は設けていない。

第1節 掘立柱建物跡

調査区内で検出された建物跡は10棟で、そのうち全体規模を捉えることができたものは5棟である。すべての建物が重複関係にあるが、新旧関係を明確にできたものは少ない。またいくつかのブロックにわかれ集中している傾向があるようであるが、発掘面積の関係で明言することはできない。

1号建物跡 SB01(第3図、図版3)

調査区北側中央の緩斜面で検出された建物跡で大形の部類に入れられる。 P_1 堀り方が4号建物跡の P_3 堀り方を切っていることから、1号建物跡のほうが新しいことが知られる。東西2間、南北3間の南北棟で、西側柱列を通る軸線の傾きはN-12°-Eである。各柱間の寸法は、東側柱列北から2.70+2.45+2.70m、西側柱列北から2.50+2.50+2.70m、北側柱列西から2.45+2.45m、南側柱列西から2.45+2.55mを測る。柱間ごとの寸法には若干のばらつきがあるが、南北、東西ごとにその総計した長さを比較してみると10~15cm程度の差しかみられず、平面プランは整った長方形を呈する。堀り方は90×60cm程度の方形を呈しているものが多い

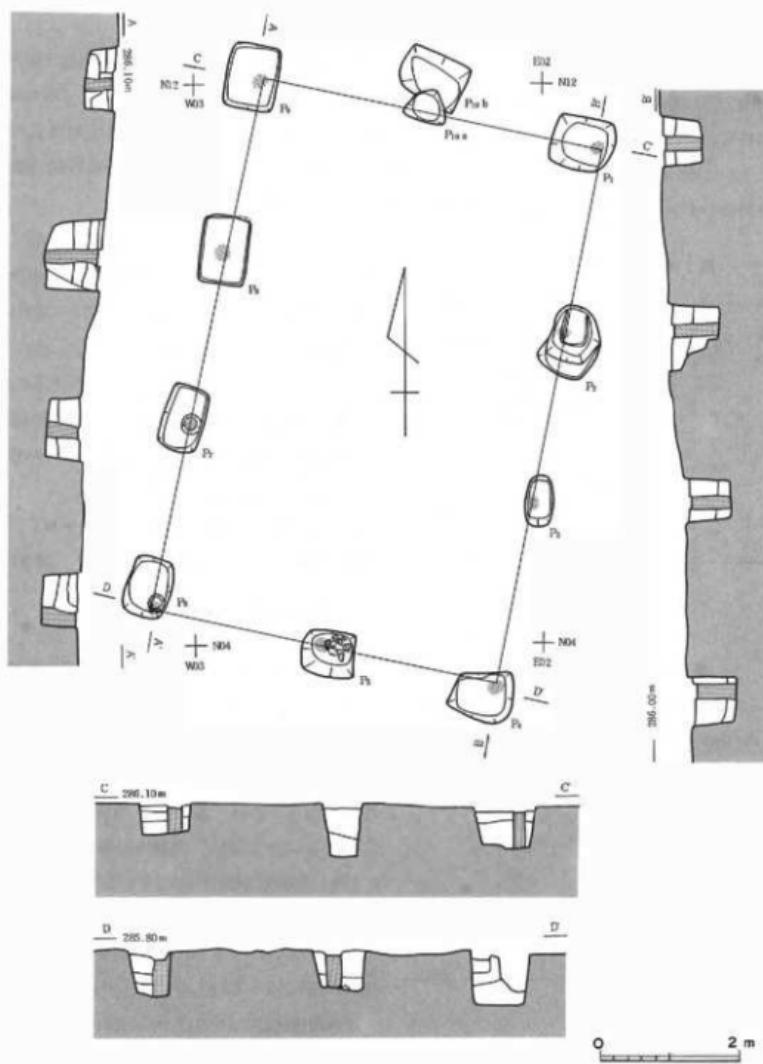
第1表 1号建物跡柱穴一覧表

Pn	面 り 方				柱 穴			
	東西長	南北長	深さ	平面形	底面状態	径	深さ	形状
1	90	75	60	方	形	平	坦	18
2	70	100	75	不整方形	三段割り	19	60	円
3	38	74	67	椭円形	平	坦	17	67
4	90	65	70	不整方形	平	坦	21	70
5	77	55	58	方	形	平	坦	23
6	62	85	66	方	形	平	坦	19
7	60	55	48	方	形	平	坦	18
8	68	100	54	方	形	平	坦	23
9	74	93	48	方	形	平	坦	21
10a	55	48	78	不整	形	平	坦	23
10b	95	68	68	方	形			

が、 P_3 は長円形でやや小さく異質である。 P_2 は3段階に分けて堀り込んで深さを得たもので、 P_5 の底面には河原石が敷かれていた。 P_{10} は一部切りあっているが、軸線を通すと P_{10a} に柱があったと考えられ、堀り方の堀り直しが考えられる。

遺物は P_3 ・ P_6 から各1点出土しており、 P_3 出土の杯底部破片には回転糸切り痕が残っている。

(安田)



第3図 1号建物跡

2号建物跡 SB02(第4図、図版4)

O-2~4からF-3~4グリッドにかけて黒色土面で検出された建物跡である。南北3間・東西2間の南北棟で、東側柱列の柱痕を通る軸線の傾きはN-17°-Eである。各柱間寸法は東側柱列北から2.60+2.60+2.80m、西側柱列北から2.70+2.70+2.70m、北側柱列西より2.80+2.80m、南側柱列北から2.80+2.80mを測り、平面形のゆがみとしては、東側柱列と西側柱列のわずか10cmの差しかなく、整った長方形を呈している。

第2表 2号建物跡柱穴一覧表

P No	掘り方			柱 痕		
	東西長	南北長	深さ	平面形	底面状態	径 深さ 形状
1	68	68	304	楕円形	ピットあり	38 104 方形
2	60	90	304	長方形	ピットあり	104 不整
3a	48	53	72	楕円形	ピットあり	- - -
3b	45	90	68	長方形	水平	- - -
4a	56	58	65	不整台形	水平	22 58 円
4b	50	-	60	-	水平	- - -
5a	50	20	65	三角形	水平	20 58 円
5b	-	-	62	水平	水平	- - -
5c	50	-	52	長方形	水平	- - -
6	55	50	77	不整方形	なべ底面	- - -
7	64	64	87	楕円形	水平	25 87 円
8a	53	53	73	方形	水平	18 73 円
8b	-	-	42	-	-	- - -
9	70	70	84	不整圓形	水平	19 64 円
10	56	76	88	長方形	ピットあり	- - -

掘り方のプランは一辺50~90cmの方形又は長方形を基本としている。埋土は地山の黄褐色土と青灰色粘土をブロック状に含む縮まりの強い暗褐色土で深さ67~85cmである。P_{1-2-3a-5a-6}の掘り方底面には柱を据えたと考えられるピットが掘り込まれている。P₃₋₄₋₅₋₈には重複が認められるが、柱痕を通る軸線から大きく外れるものではなく、建て替えと考えられる。

掘り方埋土中より遺物の出土は認められず、時期を限定することは困難である。(松本)

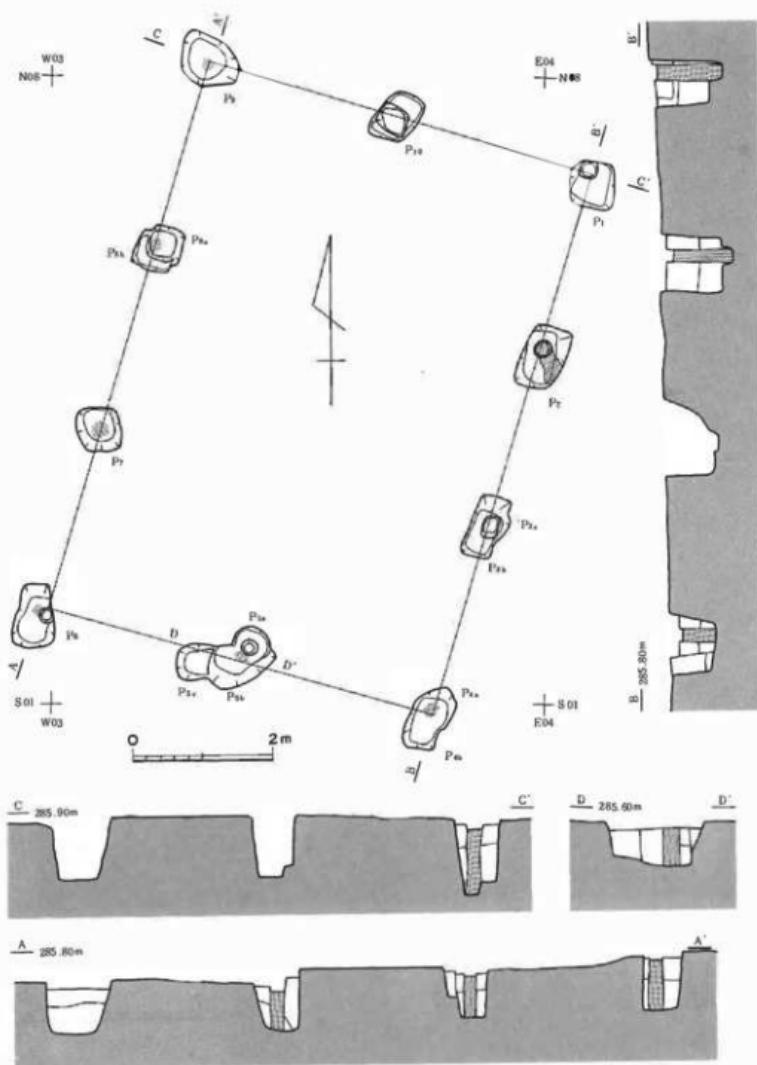
3号建物跡 SB03(第5図、図版4)

第3表 3号建物跡柱穴一覧表

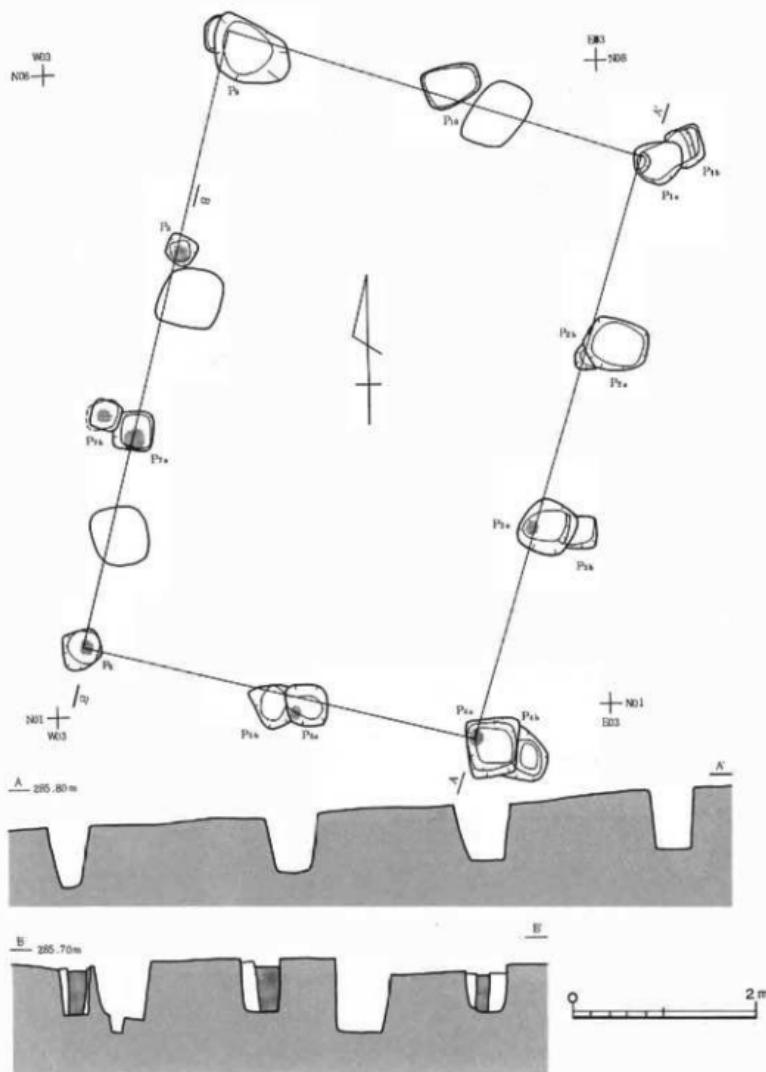
P No	掘り方			柱 痕		
	東西長	南北長	深さ	平面形	底面状態	径 深さ 形状
1a	45	55	65	横円形	平 塩	- - -
1b	-	45	35	方形	平 塩	- - -
2a	70	56	61	-	平 塩	- - -
2b	-	-	61	-	-	- - -
3a	58	58	62	楕円形	平 塩	15 円
3b	-	48	-	-	-	- - -
4a	55	63	66	方形	平 塩	17 円
4b	-	50	67	-	-	- - -
5a	46	43	-	方形	平 塩	14 -
5b	-	45	-	-	-	- - -
6	42	43	53	不整方形	平 塩	16 53 円
7a	41	41	62	方形	平 塩	23 62 円
7b	30	30	-	方形	平 塩	14 -
8	38	31	49	方形	平 塩	19 69 円
9	-	40	-	長方形	平 塩	- - -
10	62	45	69	-	-	- - -

調査区中央や東寄りに検出された建物跡である。東西2間×南北3間の南北棟で、重複関係にある2号建物跡よりも古いことがP₉の切り合いで確認された。柱間寸法は、東側柱列北から2.05+2.15+2.45m、西側柱列北から2.35+2.05+2.25m、北側柱列西から2.30+2.25m、南側柱列西から2.20+2.25mを測り、西側柱列を通る軸線の傾きはN-13°30'-Eである。掘り方は40~50cmの不整形方を呈し、柱痕は径約15~20cmの丸柱と考えられる。

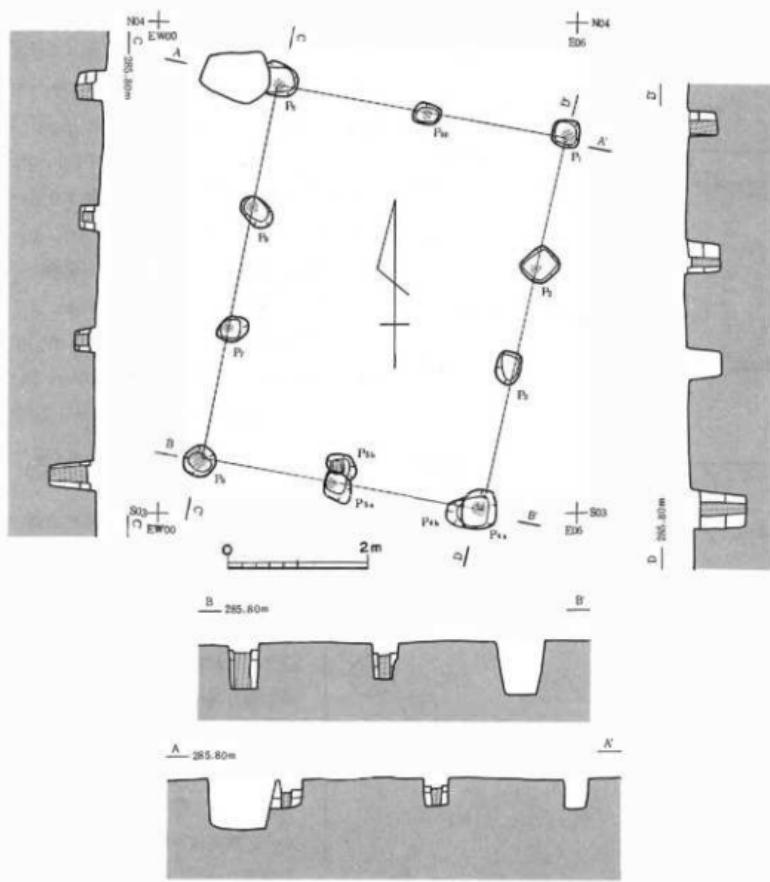
この建物跡はP₁~P₅・P₇にそれぞれ掘り方の一部が壊された柱穴が取り付いていることから、一度の建て替えが想定される。(大庭)



第4図 2号建物跡



第5図 3号建物跡



第6図 4号建物跡

4号建物跡 SB04(第6図、図版5)

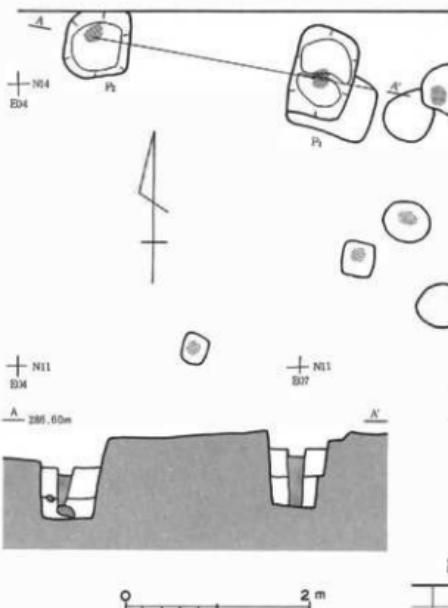
調査区南東部に位置し、第II層の礫混じりの黒色土層面で検出された。東西2間×南北3間の南北棟の建物で、西側柱列の柱痕を通る軸線の傾きはN-13°-Eである。各柱間の寸法は東側柱列北から $1.90 + 1.50 + 2.00$ m、西側柱列北から $1.80 + 1.75 + 1.90$ m、南側柱列西から $2.20 + 2.00$ m、北側柱列西から $1.95 + 2.10$ mを測り、東側・西側柱列の2間目が他の柱間に比べ狭

い数値を示している。しかし全体の平面プランでは南北が若干狭くなるだけで、整った方形を呈している。掘り方の平面形は方形又は不整形を呈し、大きさはほぼ一定している。掘り方壁は垂直に掘り込まれている。柱痕は P_3 を除いて検出され、大きいもので 26 cm、他は 15 cm ~ 20 cm の円形である。この建物には P_4 ・ P_5 ・ P_9 に切り合い関係がみられ、1号建物跡より古い建物であることが P_9 によって確認できた。 P_4 ・ P_5 に切り合い関係が見られたのはこの建物に一部建て替えが行われたものと考えられる。

第4表 4号建物跡柱穴一覧表

Pn	面 方 向			柱 痕			単位: cm	
	東西長	南北長	深さ	平面形	底面状態	径		
1	36	38	42	方	形	平	20	42 円
2	44	46	52	方	形	平	15	52 円
3	34	49	50	方	形	平	9	—
4a	50	56	76	方	形	平	20	76 —
4b	—	40	—	—	—	—	—	—
5a	40	39	52	方	形	平	18	52 円
5b	40	—	—	—	—	—	—	—
6	44	44	66	方	形	平	26	66 円
7	38	44	30	不整形	形	平	19	30 円
8	32	52	28	方	形	平	16	24 円
9	—	48	48	不整形	形	平	16	40 円
10	38	28	40	方	形	平	16	40 円

掘り方埋土からの遺物は出土していないが、平安時代以降と考えられる1号建物跡に切られることからそれ以前の建物跡と考えられる。(石川)



第7図 5号建物跡

5号建物跡 SB 05(第7図版6)

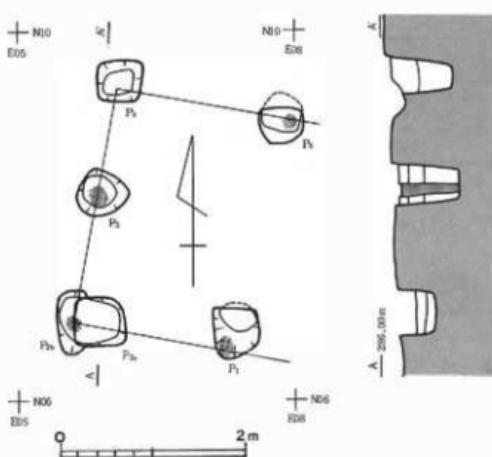
調査区内では、掘立柱建物跡群の最北端に位置する。第II層である疎混じり黒色土面で検出された。東西1間分しか検出されていないが、調査区外の北側に延びるものと考えられる。掘り方は方形を呈し、壁は垂直に掘り込まれている。柱痕は 16 cm ~ 18 cm の円形で、1号建物跡と同じくグライ化した粘土になっていたことから、検出は容易であった。埋土も黄褐色ロームと青灰褐色土を主としているもので、これも1号建物跡と同様である。柱間は 2.50 m を測り、N-89°-W の傾きである。(石川)

第5表 5号建物跡柱穴一覧表 単位: cm

Pn	面 方 向			柱 痕			単位: cm	
	東西長	南北長	深さ	平面形	底面状態	径		
1	66	94	80	長方形	平	周	18	80 円
2	70	70	90	方	形	平	16	72 円

6号建物跡 SB06(第8図)

調査区北東部に検出された建物跡である。南北は2間を数えるが、東西では東側が調査区外に延びているため2間以上になるものの規模は不明である。恐らくは東西棟になるものと思われるが、建物跡の偏度を西側柱列を基準として計測すればN-10°-Eである。柱間の寸法は、西側柱列北から1.20+1.40m、北側柱列西から1.40+……m、南側柱列西から1.65+……mを



第8図 6号建物跡

測る。掘り方は一辺が40~50cmの方形を基本としているが、各掘り方形態は相当崩れている。埋土は暗茶褐色砂質シルトとグライ化した粘土である。柱は10~15cmの丸柱と思われる。各柱穴からの出土遺物はなく時期の判断は困難である。また、P_{2a}に重複して検出されたP_{2b}は、柱痕の検出もなく、他の柱穴に柱の据え替えの痕跡もないことから、多分に掘り方の掘り直しの可能性が強いと考えられる。

第6表 6号建物跡柱穴一覧表

P番	掘り方				柱標			
	東西長	南北長	深さ	平面形	縦面状態	柱	深さ	形状
1	50	52	92	不整方形	平	規	-	-
2a	35	70	44	長方形	平	規	15	74
2b	-	52	40	方形?	平	規	-	-
3	50	50	72	不整方形	平	規	14	70
4	48	45	70	方形	平	規	-	-
5	50	40	-	不整方形	平	規	15	円

(大越)

7号建物跡 SB07(第9図、図版8)

調査区西端で検出された建物跡である。調査区西側は水田のため検出面が粘土化しており、充分な検出作業ができず、調査区内では4本までしか確認できなかった。南北2間以上、東西1間以上で、東側柱列を通る軸線の傾きはN-12°-Eである。柱間寸法は東側柱列北から2.70+2.50+……m、北側柱列西から……+2.40mを測る。掘り方の大きさにはばらつきがあるが、いずれも比較的整った方形を呈している。柱は柱痕から丸柱と思われる。掘り方どうしの切り合いはないが、8号建物跡と9号建物跡とは重複関係にある。掘り方内からの遺物の出土は認められず、時期を判断するのは困難である。

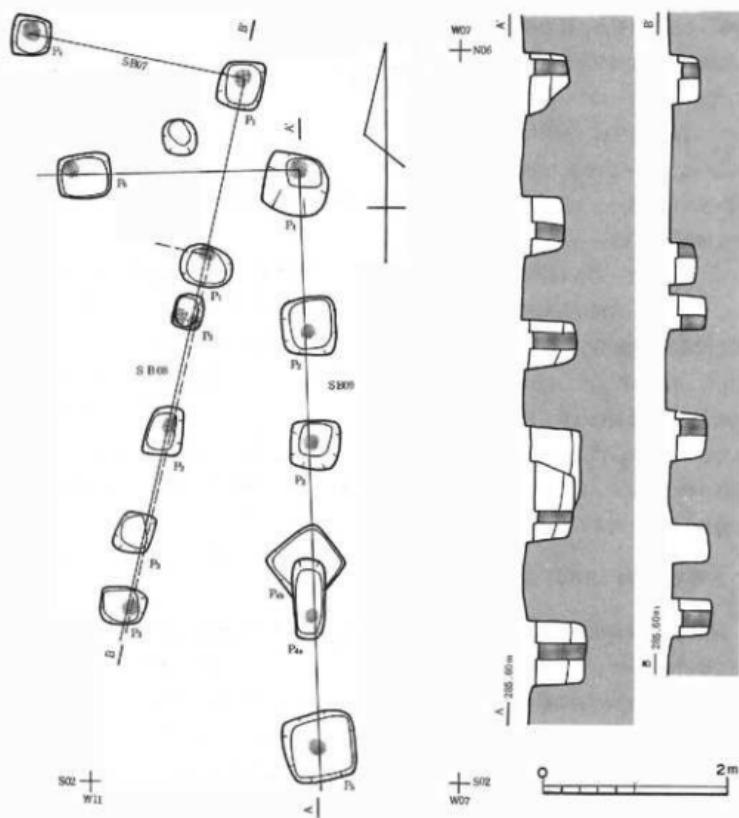
(安田)

第7表 7号建物跡柱穴一覧表

P No	断り方			柱 穴			単位, cm		
	東西長	南北長	深さ	平面形	底面形状	径			
1	68	52	30	方	形	平	17	30	円
2	30	38	40	方	形	平	15	40	円
3	29	47	40	方	形	平	17	45	円
4	42	42	35	方	形	平	20	55	円

第8表 8号建物跡柱穴一覧表

P No	断り方			柱 穴			単位, cm		
	東西長	南北長	深さ	平面形	底面形状	径			
1	57	44	30	椭	円形	平	14	30	円
2	40	54	45	不整方形	平	粗	17	45	円
3	49	40	43	不整方形	平	粗	18	43	円



第9図 7・8・9号建物跡

8号建物跡 SB08(第9図、図版8)

7号建物跡同様検出作業ができず、調査区西端で3基の柱穴しか確認されていない。南北2間以上で西側の調査区外に延び、南北棟になるのではないかと考えられるが、限定はできない。P₁～P₃の柱痕を通る軸線の傾きはN-12°-Eで、柱間寸法はP₁～P₂が1.90m、P₂～P₃が2.05mを測る。掘り方は不整形であるが、大きさにおいてはそれほど違はない。埋土はロームブロックを含む暗褐色土一層であるが、底面近くは若干グライ化してきている。柱は柱痕から径14～18mの丸柱と思われ、P₁が他に比べやや細くなっている。7号・8号建物跡とは重複関係にあると考えられるが、その新旧関係を捉えることは困難である。また遺物の出土がないことから、その時期も不明である。

(安田)

9号建物跡 SB09(第9図、図版8)

調査区西端で検出された建物跡である。柱穴は6個検出されており、7・8号建物跡同様西側に延びるものと考えられる。南北4間以上・東西1間以上の南北棟になると思われ、東側柱列を通る軸線の傾きはほぼ磁北と一致する。柱間の寸法は東側柱列北から1.75+1.25+1.90+1.45m、北側柱列西から……+2.45mを測る。掘り方は大きさにばらつきはあるものの整った方形を呈すものが多く、P₄のみが長楕円の掘り方に建て替えられている。埋土は大きく2層に分かれ、上層が黄褐色ロームブロックを含む暗褐色土、下層がややグライ化した青灰色の粘土である。柱痕もグライ化した粘土になっており、検出するのは容易であった。柱はその痕跡から径13～19cmの丸柱であったと考えられるが、やや太さにはばらつきがある。

各柱穴からの遺物の出土は認められず、時期の判断は困難である。また7・8号建物跡との新旧関係も、柱穴どうしの切り合いがないことから不明である。

(安田)

第9表 9号建物跡柱穴一覧表

単位: cm

Pn	面 り 方					柱 痕				
	東西長	南北長	深さ	平面形	底面状態	径	深さ	形状		
1	70	65	45	不整形	平	垣	18	48	円	
2	57	63	45	方	形	平	垣	14	45	円
3	51	52	59	方	形	平	垣	16	59	円
4a	57	58	50	長楕円形	平	垣	15	50	円	
4b	34	87	58	方	形	平	垣	15	50	円
5	77	71	65	方	形	平	垣	18	65	円
6	57	47	54	方	形	平	垣	19	54	円

10号建物跡 SB10(第10図)

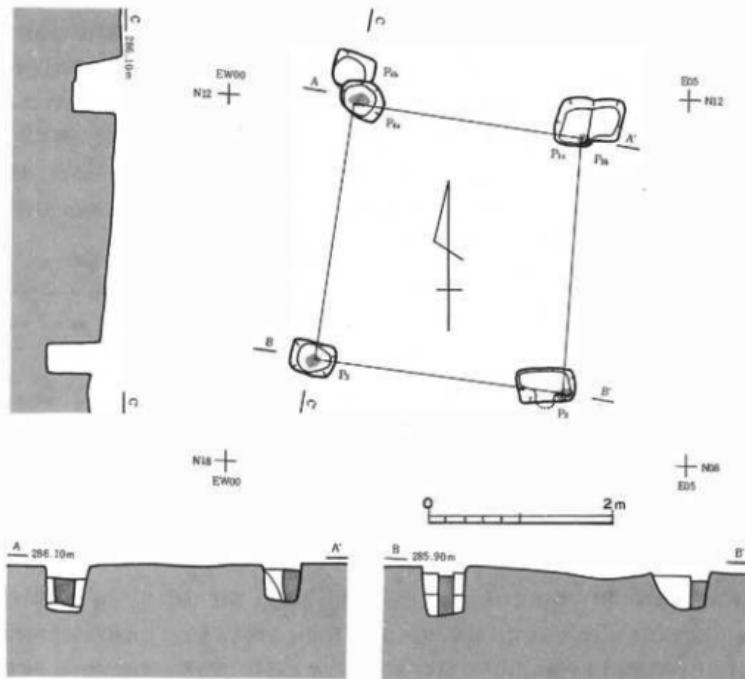
調査区北東部において検出された1間×1間の建物跡である。各柱穴間はP₁～P₂で2.80m、P₂～P₃で2.70m、P₃～P₄で2.85m、P₄～P₁で2.50mを測り、検出された柱痕を結ぶ線でつくられる平面形はやや歪んだ方形を呈している。このため各柱穴間を結ぶ軸線は各々若干の相異をみせているが、P₁とP₂を結ぶ軸線でみれば磁北から7°東へ偏している。掘り方はP₁・P₄で

一边 50 cm 程度の方形であるが、P₂・P₃は長方形に近い形をとっている。掘り方埋土は、黄色砂質土もしくはグライ化した粘土の 2 層に分けることができる。柱は柱痕から察するに径 15~20 cm 前後の丸柱であったと考えられる。P₁・P₄には切り合ひが確認されているが、軸線から大きく外れるものではないことから建て替えと考えられる。

第 10 表 10 号建物跡柱穴一覧表

Pn	面 り 方			柱 頭			単位 cm	
	東西長	南北長	深さ	平面形	底面状態	径		
1a	45	54	45	不整形形	平	粗	20	45 円
1b	—	46	30	不整形形	平	粗	—	—
2	63	47	54	長方形	平	粗	18	54 円
3	50	35	64	長方形	平	粗	16	64 円
4a	50	37	52	不整形形	平	粗	22	52 円
4b	45	40	46	不整形形	平	粗	—	—

当建物跡は柱穴こそ重複していないが、プラン全体からみれば 1 号建物跡と大半が重なり合うことから、時間的には前後関係があるといえる。しかし、柱穴どうしの重複がないことや、双方の建物跡に明確に伸出する遺物が認められていないことから、その前後関係は不明といわざるを得ない。
(大越)



第 10 図 10 号 建 物 跡

第2節 その他の遺物

ここでは遺構外より出土した土器を取り上げ紹介する。また試掘時において出土した土器も、これまであまり類例をみないものであることから合わせて報告する。

〔弥生式土器〕

壺(第11図) 口縁部から頸部にかけての破片である。外方にやや開く口縁部を持ち、口縁部文様帶に繩文原体の圧痕を有し、口縁下に交互刺突文のくずれた刺圧が加えられている。頸部に狭い無文帶を有し、わずかに残っている体部には細繩文がみられる。

〔土師器〕

試掘調査の際に3・4号トレンチから出土したものである。**第11図 弥生式土器拓影** 土師器として扱ってはいるが、これまでの土師器とは若干焼成の異なるもので、須恵系土器あるいは赤焼土器といわれる範疇に入れるべきものかも知れない。尚3・4号トレンチは、今回の調査区では北端に位置することになる。

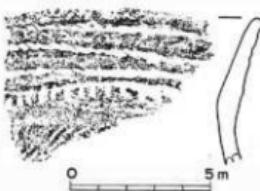
小皿1(第12図1) $\frac{1}{3}$ 程の破片で、内面のロクロによる凹凸が顕著である。底部から短く外反する厚手の体部を持ち、口縁径 9.8 cm、底部径 6.0 cm でその差は小さい。底部には回転糸切り痕がみられ、再調整は行われない。

小皿2(第12図2) 完成品で小皿1と同様の形態を有している。ただ小皿1では、内面に若干の深さが存在したが、これはほとんど深さを持たないといってよい。底部には回転糸切り痕を有し、口縁径 9.2 cm、底部径 5.5 cm を測る。

高杯1(第12図3) 杯部と脚部が接合している資料である。外面には軽いヘラケズリがみられ、内面接合部には指ナデがみられる。また内面には積み上げ痕が観察される。他のものと比べてやや厚手で、ロクロは使用されていないようである。

高杯2(第12図4) 杯部のみの破片で体部の $\frac{2}{3}$ が欠損している。体部から口縁部にかけて大きく外方へ開き、口唇部でさらに外方へ折り曲げられている。脚接合部は高台風を呈し、接合面は浅く窪んでいる。磨滅が激しく調整方法等は不明であるが、ロクロ痕などは観察されず入念な再調整なども行われていないようである。推定口径 20.6 cm、接合部径 7.8 cm を測る。

高杯3(第12図5) 杯部のみの破片で、脚との接着部と口縁部の一部を欠損している。体部から口縁部にかけて強く外方へ開き、口唇部でさらに外方へ折り曲げられている。胎土に大粒の石英を含み、器面は磨滅している。口径 20.5 cm を測る。



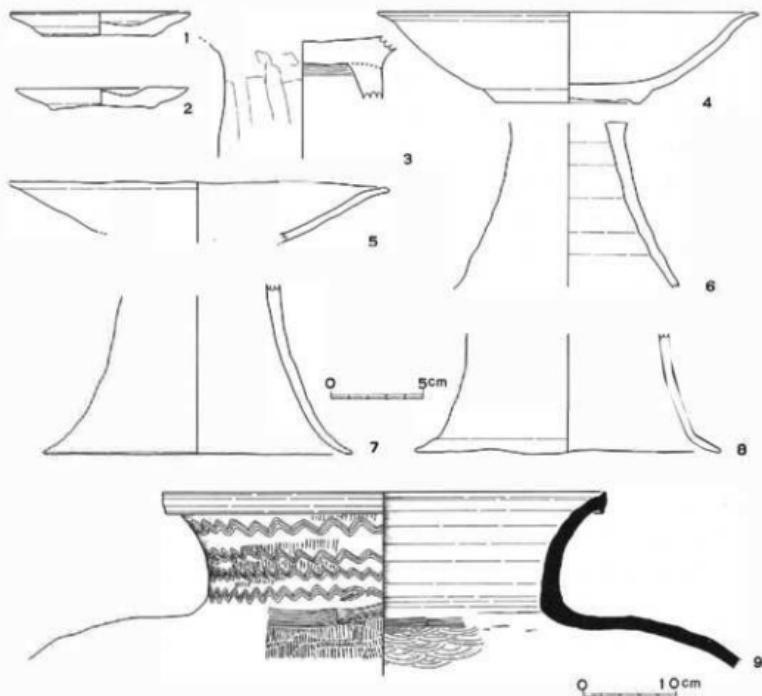
高杯 4(第12図6) 脚部の $\frac{1}{2}$ の破片で裾部を欠いている。杯部との接着部からゆるやかに外方に開いている。内面には積み上げ痕がみられる。胎土には大粒の石英を含み、やはり磨滅が激しい。

高杯 5(第12図7) 脚部の $\frac{2}{3}$ の破片である。杯部との接着部からゆるやかに外方へ向かって弯曲し、裾部でやや強く外方に開く。胎土は粗く、器面は磨滅している。裾部径は16.6 cmを測る。

高杯 6(第12図8) 脚部の $\frac{1}{2}$ の破片で上部を欠いている。他の脚部に比べて、直線的に外方へ開き、裾部で強く外側に折り曲げられている。裾部はかなり波打っている。胎土は粗く、器面は磨滅している。ロクロ未使用と思われ、裾部の径は16.4 cmを測る。

〔須恵器〕

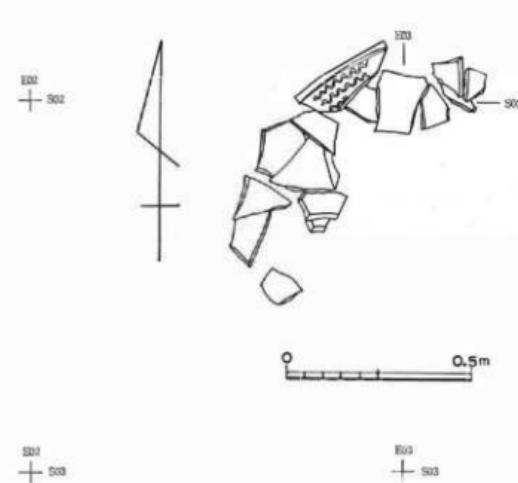
甕(第12図9) E・F-6グリッドの遺構検出面よりやや上部で一括して検出された資料である。大形のもので、強い張りを持つ肩部から直立気味の頸部を経て外反する口縁部に至る。口



第12図 表土出土土師器・須恵器

唇部は上下にわずかに突出して外方に面を作り、2条の浅い沈線がこの部分にまわっている。外面は平行叩き痕を残し、頸部では叩きの後に軽いヘラナデを施し、さらに櫛描きのやや雑な波状文を施している。内面は円弧文を呈す圧痕がみられるが、一括出土した底部付近の破片では平行の圧痕がみられる。頸部内面はヘラナデして最終的な仕上げとしている。復元口径 48 cm を測る。

この他に図示できなかった



第13図 須恵器壺出土状況

ものとして、土師器杯・甕・高台付杯・須恵器壺・青磁破片がある。量的には土師器が圧倒的に多く、青磁破片は1点のみである。須恵器壺類の中には長頸になると思われる破片も数点あり、土師器高台付杯には非内黒のものが多く、前掲した小皿と同じような焼成方法が考えられる。

(安田)

第3章 考察

第1節 遺物について

今回の調査による出土遺物は、土師器・須恵器・青磁破片で、完形品ではなくすべてが破片である。したがって細かな分類作業等から検討を加えることは困難であり、また明確に年代考定資料となるようなものも出土していないことから、時期的な位置づけについては充分な考察は行えない。ここでは出土遺物の説明に重点をおくことにする。

〔弥生式土器〕

L-II層から出土したもので、口縁下の交差刺突文から広義の天王山式に入るものと考えられる。しかし、口縁部文様帶において縄文原体の圧痕が見られることと、交差刺突文自体が天王山式のものに比べてかなり衰退化していることから、踏瀬大山遺跡のものに類似している点も指摘でき、したがって天王山式でも時期的にやや下降するものと考えることができる。

〔土師器〕

今回の調査で出土した土師器はほとんどが表土及びL-II層から出土したもので、遺構から出土したものはきわめて限られている。ここでは全体の破片にみられる傾向と特徴を述べる。

杯でみられるものはロクロ使用のものと未使用のものがみられるが、大半はロクロ使用のものである。ロクロ未使用のものでは口縁部と体部の境にヨコナデによって生じる軽い段を持つものが数点みられる。ロクロ使用のもので底部切り離し技法を観察できるものは1号建物跡の掘り方より出土したもので、回転糸切り痕を有している。その形態及び技法から、ロクロ未使用のものも含めて、奈良時代から平安時代の年代を考えておきたい。

甕において口縁部破片では、ヨコナデとロクロによるものがみられ、体部破片においてはハケ目、ヘラケズリ、ヘラナデ調整のものがみられる。最も多く出土しているのはヘラナデ調整のもので、ハケ目によるものは少數である。全体的にみてロクロ使用のものは少ないが、これまでの出土例から、甕では口縁部においてのみロクロ使用の有無が判断できるものも存在することから、その数量にはやや不明確な点がある。時期的には調整技法等から、奈良時代から平安時代のものと考えられるが、限定はできない。

試掘時に出土した土器は高杯になると思われるものと、小皿である。高杯は試掘トレンチの一本からまとまって出土したもので、本調査においても試掘時ほどのものは出土していない。器形的に類似しているものとしては多賀城跡出土の須恵系土器の中にみられるが、杉内E遺跡の高杯にはロクロは使用されていないようである。小皿だけをとりあげて時期を求めるならば、平安時

代が考えられる。

〔須恵器〕

図示できたものはL-II層より出土した大甕だけで、その他に表土及びL-II層より破片が出されている。器種的には甕・壺類が多く須恵器全破片数の9割近くを占める。杯類は少なく、体部から口縁部にかけての破片ばかりである。大甕は口縁部に4段の波状文を施すものであるが、かなり難な波状文であることから、時期的にはやや下降するものと考えられる。

第2節 遺構について

今回の調査で検出された遺構は掘立柱建物跡のみで、合計10棟検出されている。全体規模を知ることができるものは2間×3間のものが4棟、1間×1間のものが1棟検出されている。10号建物跡のように柱を4本しか持たないものは、東村西原遺跡の2号建物跡等に例がみられるが、やや異質な建物と考えられ、基本的には2間×3間で建造されるものが多いようである。

10棟の中で新旧関係のわかるものは、掘り方どうしが切り合い関係にある1号建物跡と4号建物跡、2号建物跡と3号建物跡で、それぞれ1・2号建物跡が、4・3号建物跡を切っている。その他の建物跡はこみ入った重複関係にはあるものの新旧関係は不明である。

掘り方の大きさ及び埋土からみると、1号建物跡と5号建物跡の間には類似性がみられ、方位もほぼ同様であることから、両建物は同時に存在していた可能性がある。他の建物跡では、方位が似かっていても掘り方の大きさや埋土状態が異なったりで、積極的に同時存在と考えられる建物はみあたらないようである。

第11表 掘立柱建物跡一覧表

遺構	柱間構造		棟方向	柱間寸法		桁行	梁行	方位	掘り方形態	柱痕形	備考
	東西	南北		桁行	梁行						
SB01	2	3	南北棟	2.45~2.70	2.45~2.55	7.70	4.90	N-12°-E	方形	18~23cm	SB04を切っている
SB02	2	3	南北棟	2.60~2.80	2.80	8.00	5.60	N-17°-E	不整形	18~38	SB03を切っている
SB03	2	3	南北棟	2.05~2.45	2.20~2.30	6.65	4.45	N-13°30'-E	方形	14~23	
SB04	2	3	南北棟	1.50~2.00	1.95~2.20	5.40	4.05	N-13°-E	方形	15~26	
SB05				—	2.50(?)	—	—	N-89°-W	方形	16~18	
SB06		2	東西棟	1.40~1.65	1.20~1.40	—	—	N-10°-E	不整形	14~15	
SB07		3(?)	南北棟	2.50~2.70	2.40(?)	—	—	N-12°-E	方形	15~20	
SB08		3(?)	南北棟	1.90~2.05	—	—	—	N-12°-E	不整形	14~18	
SB09		4(?)	南北棟	1.25~1.90	2.45(?)	—	—	磁北	方形	13~19	
SB10	1	1	(?)	2.50~2.85		—	—	N-7°-E	不整形	16~22	

第3節 遺構の年代とその性格

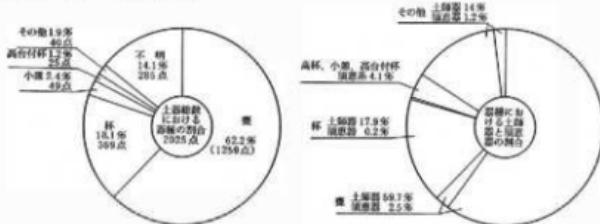
調査で出土した土器破片の総数は2,025点にのぼり、土師器が1,880点、須恵器84点で土師器が全体の93%を占めている。この数値を平安時代と考えられる集落跡と比較してみると、宮城県西原遺跡では土師器95%、須恵器5%、同県西手取遺跡では土師器89%、須恵器2%、同県手取遺跡では土師器89%、須恵器3.5%となっており、調査面積及び遺構の種類は異なってはいるが、土師器がほぼ90%を占めその傾向を同じくしている。

以下器種別にみてみると、杯と甕の2種で全体の80%を占めている。この傾向も上記の3遺跡と同じであるが、杯と甕の出土量を比べてみると、西原遺跡では杯47%、甕48%、西手取遺跡では杯31%、甕60%、手取遺跡では杯47%、甕45%とほぼ同率を示す遺跡と、杯が甕の1/2の数値を示す遺跡がある。杉内E遺跡においては杯の割合が甕の1/3程度であるが、破片の大きさなどからいっても杯が全体的にみて欠落しているとは感じられず、形態的な差及び磨滅度によって生じる差であると思われる。

この他に土師器とは焼成がやや異なる(宮城県教委報告書では赤焼土器となっている)ものの比率をみると、西原遺跡ではみられないが、西手取・手取遺跡では約5%、杉内E遺跡では約4%で、ほぼ同じ割合で出土している。

以上、地域的な違い、比較遺跡の数など問題となる部分も多いと思われるが、杉内E遺跡の土器の出土傾向は、平安時代と考えられる集落跡とはほぼ同じ出土傾向を示していると言えることができる。のことから、当遺跡は掘立柱建物跡しか検出されなかったとはいえ、やはり平安時代の集落の一形態、あるいは集落内の一部分の形態を示している遺跡であると考えたい。(安田)

第12表 出出土器集計表



参考文献

- 宮城県教育委員会、宮城県多賀城跡調査研究所 1980 「多賀城跡 政府跡 図録編」
宮城県教育委員会、日本道路公団 1980 「東北自動車道遺跡調査報告書II・III」

図 版



1. 遺跡の遠景(北より)



2. 遺跡の遠景(西より)



3. 1号建物跡



4. 2・3号建物跡

移内 E 遗跡



5. 4号建物跡



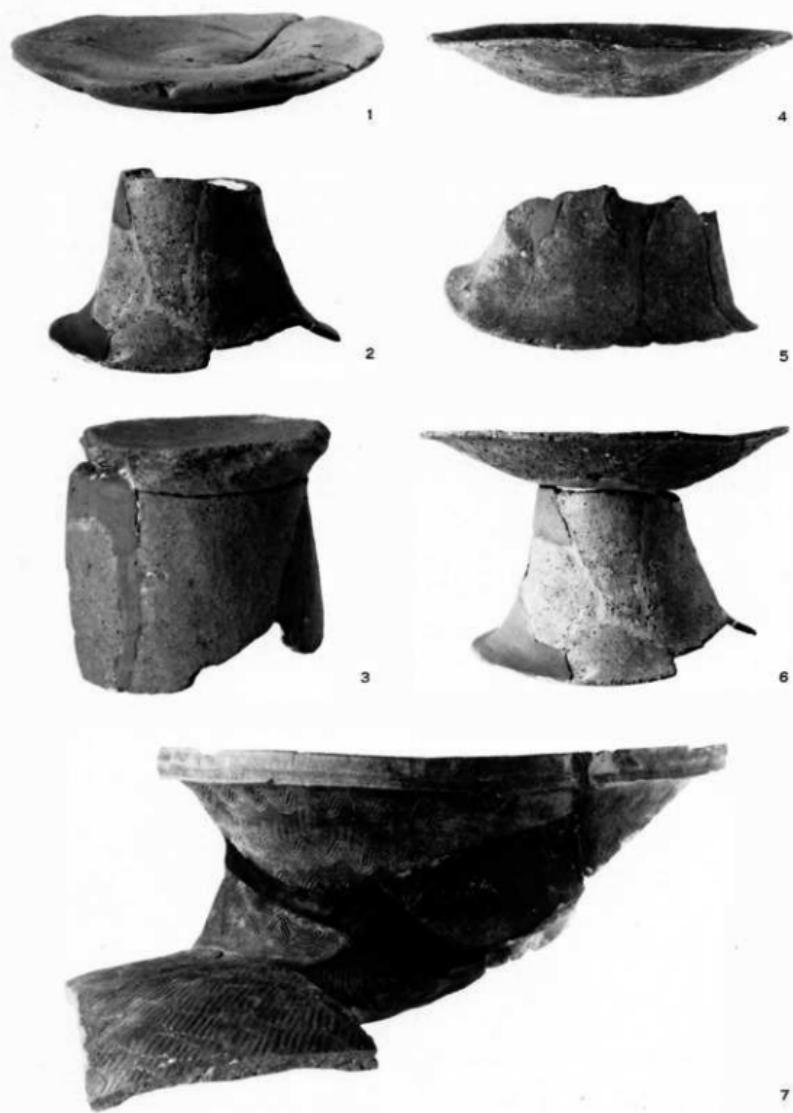
6. 5号建物跡



7. 6号建物跡



8. 7・8・9号建物跡



9. 杉内E遺跡出土 土師器・須恵器 1~6 試掘3号トレンチ出土
7 E・F-6グリッド出土

第4編 十三塚 E塚群

遺跡記号 IK = 十三塚E塚群
所在地 石川郡石川町大字沢井字十三塚
時代・種類 時期不明・塚群
調査期間 昭和 55 年 12 月 1 日～ 12 月 12 日
調査員 玉川 一郎 安田 稔
石川 俊英
協力機関 石川町教育委員会

第1章 調査経過

第1節 位置と地形

石川町大字沢井は、阿武隈川およびその支流である社川、矢武川によってはさまれた、東西方向に連なる丘陵や河岸段丘面で構成される地域である。丘陵部は標高300～330m程の残丘であり、その内部に郡山層に比定される礫層を含んでおり、郡山面相当の段丘面が侵食をうけて残丘化したものと考えられている。これらの残丘は、いたるところで小規模な独立丘陵に化している。

郡山面相当のこれらの残丘の縁辺には、標高295m前後の西の内面以下に比定される河岸段丘が広範な発達をするが、特に阿武隈川に面した地域にそれが顯著である。これらの段丘面は、礫、砂泥などの河川・湖沼性堆積物によって構成され、上面を2m前後のローム層、さらに50cm前後の黒ボク土に被われるのが一般的である。

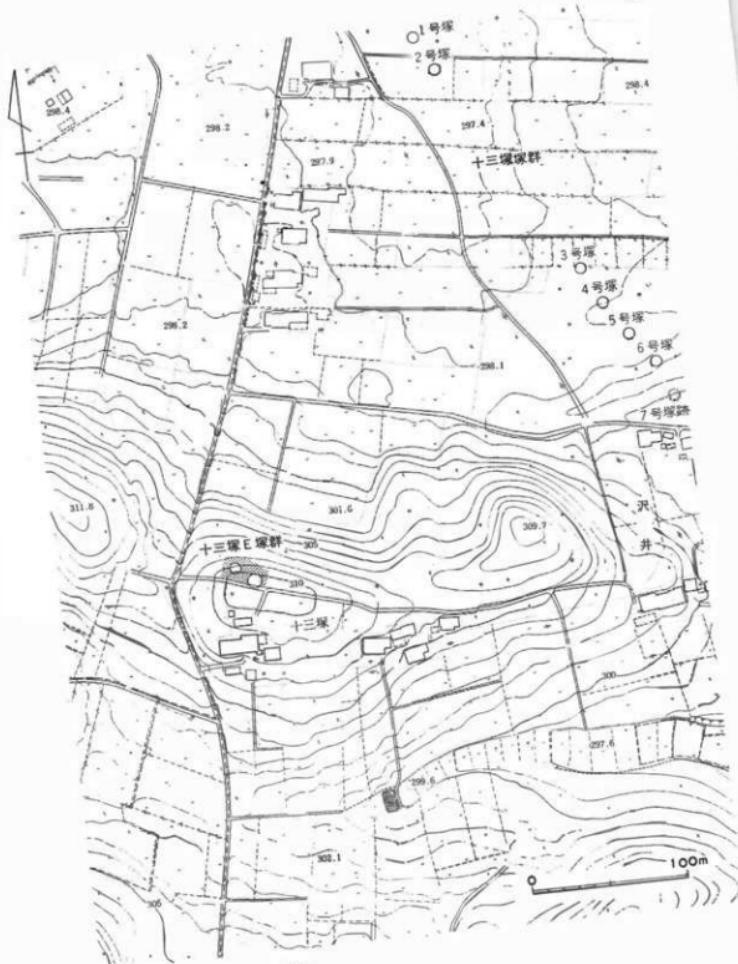
十三塚E塚群は、石川郡石川町大字沢井字十三塚地内に所在する遺跡である。遺跡は前述した郡山面相当の丘陵が、比高差約20mの段丘面上に島状に残った小規模な独立丘陵の、中央部最頂部付近に位置している。丘陵の頂部は標高約311mである。

遺跡付近の段丘面は、県南地方有数の遺跡の密集地帯で、本遺跡周辺にも多くの遺跡の分布が知られる。その中では郡山面以下の段丘面の、縁辺部に集中した分布を示す大規模な集落遺跡がある。集落遺跡は未確認の時期はあるものの、縄文時代以降古代に至るまで連綿と続くものであり、そのうちいくつかは調査され、部分的ながら集落の片鱗のつかめたものもある。代表が本遺跡西方500mに位置する達中久保遺跡であり、奈良～平安時代にかけての住居跡が100軒以上も検出されている。しかしこれらの集落遺跡も段丘面内部に移るにつれ小規模化し、多くは散布地として把握される遺跡の在り方をして来る。

本遺跡周辺にも散布地がいくつある。調査区の東側は十三塚E遺跡とした縄文土器の散布地と重複しているが、ここでは試掘調査の結果、縄文早中期の常世式、前期の浮島式土器が數片出土している。また遺跡の南斜面は十三塚B・C遺跡であるが、ここでは土師器破片が表採されている。しかしいずれも試掘では遺構らしきものが確認されていない。

また遺跡北側の段丘面には、柳田国男・堀一郎によって紹介された石川郡沢田村大字沢井字十三塚(柳田他 1948)に該当すると思われる十三塚塚群がある。これらの塚は25m間隔に一直線に配された塚であり、昭和54年に県文化センターによって6基の塚が調査されている(阿部他 1980)。本遺跡とは最も密接な関連のある塚群であろう。

(玉川)



第1図 遺跡周辺の地形図

第2節 調査経過

十三塚E塚群は、昭和55年3月の分布調査で確認された遺跡である。この付近は、県教育委員会文化課によって昭和51年に分布調査が実施され、詳細な遺跡の分布状況が把握されている地域ではあるが、本塚群はこの際の分布調査では所在の知られていないかった遺跡である。しかし昭和52年度の十三塚B・C遺跡の試掘調査時には、塚群の立地する丘陵の頂部付近で縄文土器を表面採集しており、塚の所在はこの時点では未確認ながら、十三塚E遺跡として縄文土器散布地に考えていたし、周辺地域の発掘調査の時点でも地元住民からは塚の所在が指摘されていた。

昭和54年度には付近の開発計画が具体化し、十三塚塚群の本調査が実施されたが、種々の事情で実質的な工事は55年にずれ込んだ。そこで55年度の工事計画が提示された55年春に、本遺跡の塚の所在を確認し、その取り扱いについて協議した結果、丘陵頂部にある塚であり、工法を変更して対応することが不可能であるとの結論に達し、本調査を行い記録保存することになった。委託をうけた県文化センター遺跡調査課では、十三塚E遺跡の縄文土器散布遺跡の試掘とあわせ、年度早々に調査に着手したいと考え、地権者の承認を得るべく関係機関に協力を依頼したが、補償問題などで交渉は難航し、結局周辺地域では工事が開始された11月末に承諾を取りつけることが出来た。調査は12月1日に開始し12月12日に終了した。調査の経過は次の通りである。

- 12月1日（月） 塚周辺の草刈り作業後、現況地形測量・写真の撮影。午後1号塚を2分法によって断ち割りを開始する。
- 12月2日（火） 1号塚断ち割り継続。午後2号塚断ち割り開始。
- 12月3日（水） 1号塚断ち割り完了。2号塚断ち割り継続。レベル移動を行う。
- 12月4日（木） 1号塚セクション実測。2号塚断ち割り完了。2号塚旧表土面下に土坑のあることが判明した。
- 12月5日（金） 1号塚セクション実測完了。2号塚下面の土坑の平面プラン検出作業。
- 12月8日（月） 2号塚セクション実測。1号塚残存盛り土の掘り下げ作業。
- 12月9日（火） 土坑が集中分布する可能性が出たため、重機を導入し、調査範囲を広げて表土剥ぎを行った。
- 12月10日（水） 1号土坑を2分法で精査開始。調査区内遺構検出作業継続。
- 12月11日（木） 1号土坑セクション写真撮影後、実測。簡易ヤリカタ設定。午後2号土坑を検出し、ただちに精査開始。
- 12月12日（金） 2号土坑セクション写真撮影後実測。1、2号土坑平面実測を行い調査を完了した。(玉川)

第2章 遺構と遺物

第1節 塚

1号塚（第2・3図、図版2～4）

調査した2基の塚では西側の塚である。丘陵が西側に傾斜する先端付近に立地している。現況は直径8m前後の円墳状を呈しており、現表土面からの高さは80cm程度であった。西寄りの地点に盗掘坑が認められた。地形の傾斜に平行に2分割して内部を調査した。

調査の結果、盛土は旧地表面上に、最大75cmの盛り土をしていることが判明した。盛り土遺存範囲は断面で観察した限りでは、基底幅6.45mあり、これらが流出した部分もないことから、本来の塚の形状は直径6.5m前後であったものと思われる。盛り土は非常に細かなユニットに分層できたが、基本的には、旧表土面上にはほぼ全面にわたる薄い盛り土をした後、斜面下位から上位面に積み上げたものである。特に斜面下位部では傾斜と逆方向の、将棋倒し状に順次積み上げたことが観察できた。盛り土は暗褐色ないし茶褐色シルトを主体とし、ロームをブロック状に多量に含むものであるが、比較的締まりはあるものの、古墳の封土に見られるような固さではない。

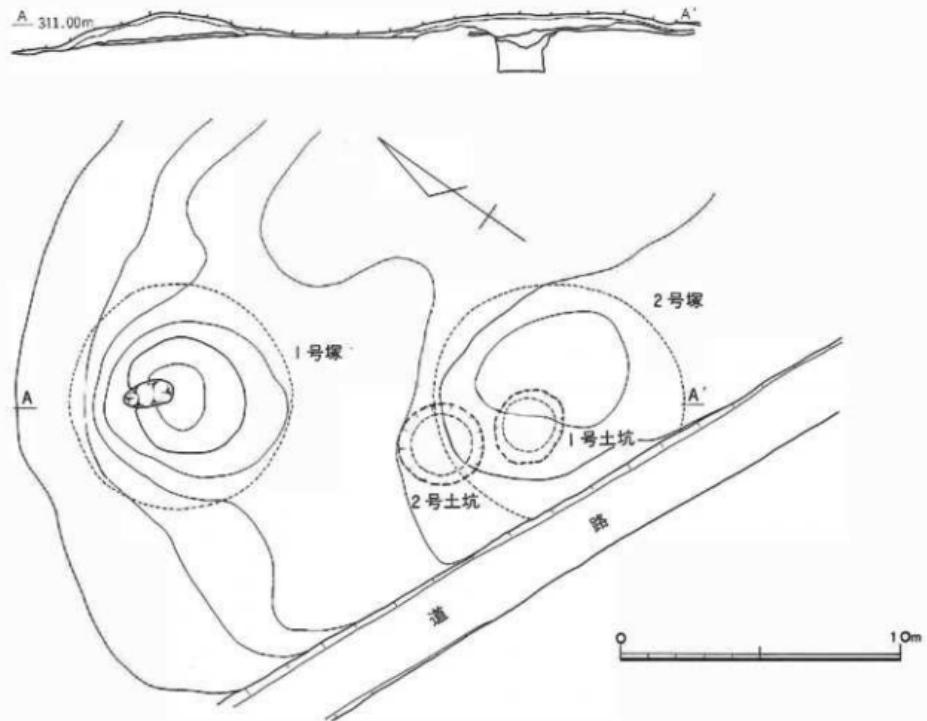
旧表土面と考えられるのはⅡ層の黒色シルト層である。この層は全面にわたって良好に叩き締められ、固結していた。また旧表土層の分布は塚の周縁部には見られず、この部分では下層の地山ローム面に直接盛り土を施しており、これらの点から考えると、塚の構築にあたっては旧表土面を整地し、突き固め、さらに末端は地山をいくらか削り出して繩張りをした可能性がある。盛り土下面には遺構と認定されるものもなく、遺物も出土しなかった。

（玉川）

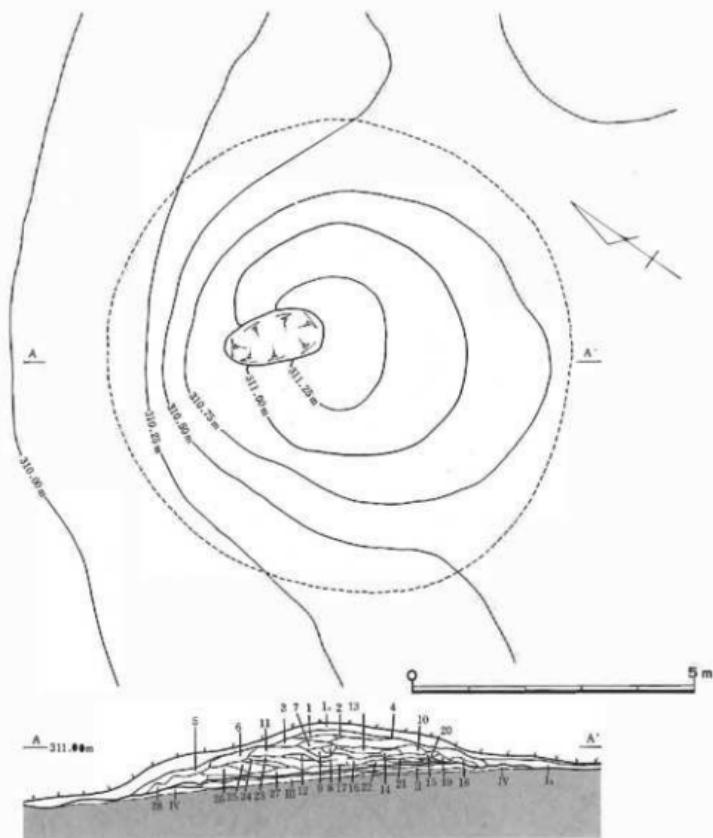
2号塚（第2・4図、図版2・5・6）

東側に位置する塚である。ほぼ丘陵の頂部に立地するが、南側は私道によって削平されている。現表土面からは約50cm高い、直径10m前後の塚と考えられたが、上面は比較的平坦であり、1号塚のような塚らしさの感じられない現況であった。中央部付近を2分割して内部の調査を行った。

調査の結果、盛り土は旧表土面上に約40cm程の厚さで認められた。しかしこれらは暗茶褐色シルトを基本とした分層できない単層部がほとんどであり、人為的な盛り土と考えるには積極的な根拠に欠けるが、旧表土面上部に分布し周辺地域の自然堆積上には見られない土層であり、一応盛り土と考えておく。分布域は東西で10.2mを測り、現況で観察される塚状の高まり部にはほぼ一致する。なお塚部中心からやや西に寄った地点には、地山面で検出された1号土坑があるが、表土上層と考えられる黒色シルトはこの部分でも土坑内部に産みながらも所在している点から見



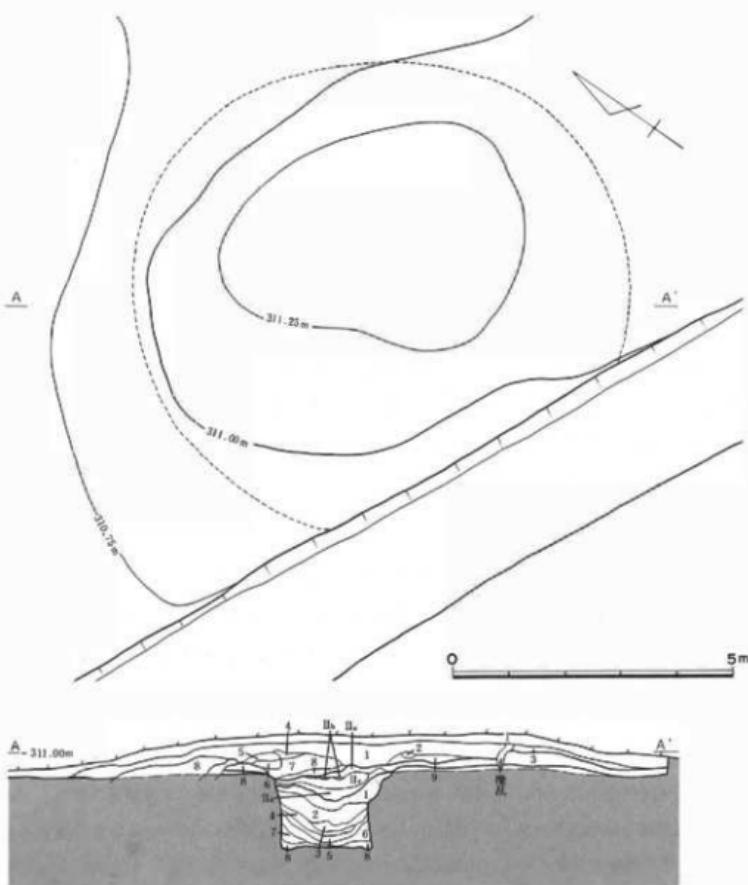
第2図 十三塚E塚群全図



1号塚地図

- 1. 布茶褐色シルト（表土）
- 1'. 布茶褐色シルト
- II. 黒色土（シルト）塹内の沿谷面は板張されて固められている。
- III. 布茶褐色粘質土
- IV. 布茶褐色ローム
- 1. 布茶褐色シルト
- 2. 食茶褐色ロームアーチ
- 3. 布茶褐色シルト
- 4. 布茶褐色シルト〔黄褐色ロームをブロック状に含む〕
- 5. 布茶褐色シルト
- 6. 布茶褐色土〔ローム多量に含む〕
- 7. 布茶褐色土
- 8. 布茶褐色土
- 9. 布茶褐色土〔ローム多量に含む〕
- 10. 布茶褐色シルト〔ロームをブロック状に含み木炭柱を含む〕
- 11. 布茶褐色シルト〔ロームをわずかに含む。木炭柱点(6)〕
- 12. 布茶褐色シルト〔ロームアーチ含む〕
- 13. 布茶褐色シルト
- 14. 布茶褐色シルト〔ローム多（含む）〕
- 15. 黒褐色シルト
- 16. 布茶褐色シルト〔木炭れ点(6)〕
- 17. 布茶褐色シルト〔ロームをブロックに含む〕
- 18. 布茶褐色シルト
- 19. 布茶褐色シルト
- 20. 黒褐色シルト
- 21. 布茶褐色シルト
- 22. 布茶褐色シルト
- 23. 布茶褐色シルト〔ローム多量〕
- 24. 布茶褐色シルト
- 25. 布茶褐色シルト
- 26. 布茶褐色シルト
- 27. 布茶褐色シルト
- 28. 布茶褐色シルト〔ロームをブロックで多量に含む〕

第3図 1号塚



- 2号墳地図土
 1 暗黄褐色シルト
 2 茶褐色土
 3 黒褐色土(粘質しまり有り)
 4 暗茶褐色シルト
 5 暗茶褐色シルト(粘質褐色土含む)
 6 黑褐色シルト(しまりなし)
 7 暗茶褐色シルト
 8 暗茶褐色シルト
 9 暗茶褐色シルト
 IIa 黒褐色土(粘質しまりあり、板張されている) (川底土)
 IIb 暗黄褐色シルト(ローム砂多く含む) (川底土)

- IIc 暗褐黑色シルト(底白色粉状バクス多量に含む) (川底土)
 板張され剥離した部分が多い
 IIa 暗褐黑色シルト(ロームより黑褐色へ移バクスは内部では見えない)
 1 暗褐茶褐色シルト
 2 暗褐茶褐色シルト(より暗い)
 3 暗褐茶褐色シルト(ローム混入多い)
 4 暗黄褐色シルト(ローム生)
 5 暗褐茶褐色シルト(ローム生)
 6 暗黄褐色シルト(ローム生)
 7 暗黄褐色シルト(ローム生)
 8 暗褐黑褐色シルト(しまりなし)

第4図 2号塚

て、直接の関連はない遺構と判断される。この部分では分層できる茶褐色シルトを主体にした盛り土部がある。また隣接する2号土坑上部では、埋土が旧表土面より盛り上がっているが、塚の盛り土はこの上面をそのままにして積み上げている。ただし塚下部の旧表土面および2号土坑埋土上面は比較的固く突き固められており、整地はしていないまでも、基礎的な根固めは実施しているらしい。塚盛り土中および盛り土下部からは、1号土坑以外、塚に直接の関連を有す遺構は検出できなかった。遺物も皆無である。

(玉川)

第2節 土 坑

1号土坑 SK01(第5図、図版7~9)

2号塚の中心より西寄りの地山ローム面で検出された土坑である。検出面での平面形は、東西2.84m、南北2.4mの長円形を呈し、検出面下約50cm付近までは傾斜して落ち込むが、下半部は直径1.95m前後の円筒状に落ち込んでいる。土坑底面は、直径1.9m前後の円形で、平坦である。また底面の側縁は、幅20cm前後、深さ2~3cmで周溝状に窪んでいる。検出面から底面までの深さは1.32mを測った。底面側約30cmはローム層を貫いて基盤の黄褐色砂岩質腐れ疊層中に掘り込まれている。

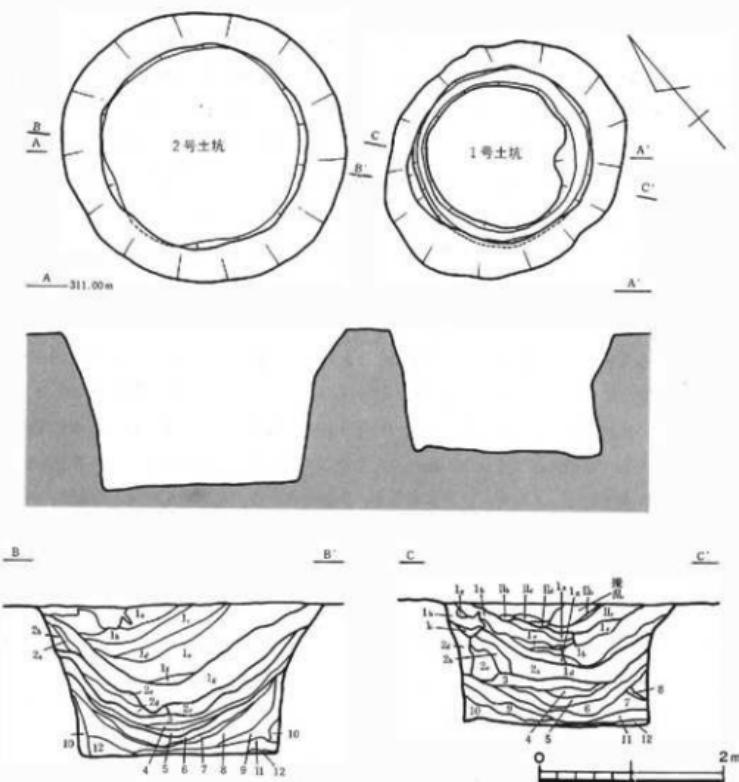
土坑内の堆積状況は、基本的には4層に大別されるが、各層はそれぞれ5~6層程度の細分が可能である。土坑内堆積土最上層は、2号塚構築時の旧表土面と考えられる黒色ないし灰茶褐色シルト層(Ⅱ層)である。土坑中央部に窪んだ堆積状況を呈し、土坑外のⅡ層黒色土に連続しているので、本土坑が2号塚より古い時期の遺構であることを、層位学的に立証している。逆に考えれば、2号塚は、本土坑がほぼ完全に埋まりきった時期に構築された遺構であるともいえる。

なお、この旧表土面もいくつかに分層できるが、Ⅱc・Ⅱd・Ⅱe層には灰白色の砂状のパミス(粉状パミス)が多量に含まれ、特にⅡe層は粉状パミスの単純層とも呼べる堆積層である。52年度の周辺地域の試掘調査以来、周辺地域の基本堆積土第Ⅱ層(黒色土)中に本層の薄い散在帯が認められ、その都度沖積世の降下火山灰であろうとの見通しを立てていたが、本土坑のように明瞭な形で確認できたのは、われわれの調査の中では初めてのことである。同様に沖積降下火山灰であろうと考え、現在重鉱物分析の途中にある。

旧表土層以下は黒褐色ないし茶褐色のロームを主体としたシルトの堆積層である。いずれも基本的には土坑壁際に高く、中央部に窪んだ堆積状況を呈し、しかも各層は整然とした厚さ5~10cm前後の堆積層である点から見て、土坑外にあった堆土の自然流入による埋没過程を想定することができよう。3~6層中にはローム層下に堆積している砂岩質腐れ疊が混在していた。

遺構内からは遺物は1点も出土しなかった。

(玉川)



- 1号土坑内堆積土
- II. 黒色土(シルトロームを含む) 1. 帽状褐色シルト
 - II. 黒色土(灰白色粉砂+ミス合む) 2. 稲葉茶褐色シルト[ローム,壁面含む?]
 - II. 底基褐色シルト(灰白色粉砂+ミス多量含む)
 - II. 底基褐色シルト(灰白色粉砂+ミス多量含む)
 - II. 底基褐色シルト(灰白色粉砂+ミス純粹に含む) 3. 稲葉褐色シルト(砂質腐泥層をわずかに含む)
 - II. 底基褐色シルト(より無Mあり) 4. 稲葉褐色シルト(砂質腐泥層をわずかに含む)
 - II. 帽状褐色シルト 5. 稲葉褐色シルト(砂質腐泥層をわずかに含む)
 - II. ロームブロック 6. 稲葉褐色シルト(砂質腐泥層をわずかに含む)
 - II. 帽状褐色シルト 7. 稲葉褐色シルト[ロームほどど]
 - II. 帽状褐色シルト 8. 稲葉褐色シルト
 - II. 帽状褐色シルト 9. 稲葉褐色シルト
 - II. 帽状褐色シルト 10. 稲葉褐色シルト(粘性ややあり)
 - II. 帽状褐色シルト 11. 茶褐色粘土質シルト
 - II. 帽状褐色シルト
- 2号土坑内堆積土
- 1. 帽状褐色ローム(砂利混在含む)
 - 1. 帽状褐色シルト[ローム多量に含む]
 - 1. 帽状褐色ローム(ローム多量に含む)
 - 1. 帽状褐色ローム(よりも黒い)
 - 1. 帽状褐色ローム(ほんざロームだけ)
 - 1. 帽状褐色ローム
 - 1. 帽状褐色シルト[ローム,砂利混在含む]
 - 2. 帽状褐色シルト(ローム)
 - 2. 帽状褐色シルト(ローム)
 - 2. 帽状褐色シルト(ローム)
 - 2. 帽状褐色シルト(ローム)
 - 3. 帽状褐色シルト[ローム多く含む]
 - 4. 帽状褐色シルト[ローム多く含み粘性が強い]
 - 5. 帽状褐色シルト
 - 6. 帽状褐色シルト
 - 7. 帽状褐色シルト
 - 8. 帽状褐色シルト
 - 9. 帽状褐色シルト[ローム,壁面含む]
 - 10. 稲葉褐色砂(壁面砂岩の崩壊土)
 - 11. 稲葉褐色粘土質シルト
 - 12. 稲葉褐色粘土質シルト

第5図 1・2号土坑

2号土坑 SK02(第5図、図版7・10・11)

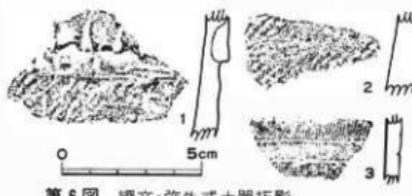
1号土坑の西側に位置する土坑である。両土坑間は幅約50cm程の狭い犬走りを形成するだけで、非常に接近した土坑である。地山ローム面で検出した。検出面での平面形は直径3.0～3.1mの整った円形を示し、検出面下80cmまでは内側に緩い壁面の傾斜があるが、下半部は直径2.25mの、これも整った円筒状に掘り込まれている。検出面からの深さは、1.65mあり底面は平坦である。いくらか西に低い底面の傾斜が認められた。本土坑も下半部の約60cmはローム層を貫いて、基盤の砂岩質腐れ疊層中に掘り込まれている。

土坑内堆積土はロームを主体とした黒褐色ないし茶褐色のシルトで構成されるが、1号土坑に認められた旧表土層に比定できる堆積層はない。堆積状況から見て1a～1gまでの、基盤の砂岩質腐れ疊を含む、ほぼ純粋なロームの堆積層と、2～12層の、ロームを主体としてもいくらか有機質が含まれる黒褐色化した堆積層に、大きく2分される。前者はロームがブロック状に混在し、分層された各層は東側に厚く、西側には分布が広がらない。東に傾斜した将棋倒し状にあり、各層は比較的厚い堆積層であるのに対し、後者は粒子が細かく碎けた、厚さ3～5cm前後の堆積層でその堆積状況も、壁際に高く土坑中央部に壅んだ状況を呈すという違いがある。下層は一般的に考えて自然の営力による埋没を想定させるが、上層はその点、人為的な埋没の可能性がある。

上層の堆積が東側から西側へ進行した過程が読みとれるので、人為堆積の可能性は、東側に位置する1号土坑の拂土に関連したものかも知れない。とすれば本遺跡で検出された2基の土坑が、新旧の時期差を有するものであって、2号土坑が最初に掘削され、これがある程度自然に埋没した段階で1号土坑が掘削されたものであると考えることができる。遺物の出土はない。(玉川)

第3節 遺 物

遺構外から出土した縄文土器が3片と弥生式土器1片がある。縄文土器は調査区東端の地山ローム面上から、弥生式土器は西端の表土層出土のものである。第6図1は口縁部付近の破片である。幅1.3cm程の平坦な擬隆帯を貼りつけて、下方に刻目がある。体部の地文は縄文と思われるが判然としない。胎土に纖維の混入が見られる。第6図2は1と同一個体と思われる破片で体部



第6図 縄文・弥生式土器拓影

には縄文が見られる。これらは大木2b式土器に比定されよう。第6図3は弥生式土器破片である。間隔7～8mmの細い平行沈線を施し、沈線間を磨消している。地文は節の細かなLR縄文である。南御山II式段階に比定されよう。(玉川)

第3章 考 察

十三塚E塚群の調査では、2基の塚と2基の土坑を調査したことになる。1号塚はその盛り土の状況から直径7m程の明らかに塚と認定できる遺構であった。旧表上面をある程度整地し、突き固め、盛り土をしている。きちんと手続きをとった塚であり、そこには当然のことながら構築の目的があったはずであるが、これを考古学的に証明する手懸りは、何も得られなかった。2号塚は、盛り土の状況が1号塚とは様相を異にするものであり、塚として積極的に支持し得る根拠に欠けている。ただ2号塚も、旧表上面が突き固められており、とにかく盛り土のあることと、この点をもって一応塚と考えておきたい。

ところで本遺跡の立地する丘陵の北側裾部から段丘面にかけては、昭和54年度に調査した十三塚塚群がある。これは柳田国男・堀一郎が、県内の十三塚としてあげた南会津郡大宮村大字大新田(現南郷村)、西白河郡古関村十三原(現白河市)、石川郡沢田村大字沢井字十三塚(現石川町)の3つのうち、沢井村十三塚に比定して間違いない遺跡であろうと思われる。この十三塚は現存したのは6基であったが、その在り方からして約300mの間に、間隔25m程度に配された、直線状の分布をとったものと考えられる(阿部他1979)。それに比べ今回調査した2基の塚は、周辺で破壊されたものがあった可能性を含めて、丘陵の頂部に立地するものであり、直線状に配されたと思われる十三塚塚群の延長線上からも西に大きく外れている。このような相異点は、やはり本塚群を十三塚塚群のまとまりとは一応離して考えた方が良いと思われる。十三塚については村境や郡境を意図した境塚であろうとの考え方や、飢死者・戦死者の靈をなぐさめたとする供養塚であろうとの考え方などがあるが、これを文献の面や考古学的な面からその本質を証明できたのはほとんど皆無なのが現状である。

丘陵の頂部付近に立地し、単独あるいは2、3基程で構成される小規模な塚は、国営総合農地開発事業に関わる工区内の遺跡分布調査で、相当数が確認されている。特に本遺跡の位置する石川町沢井近辺と須賀川市雨田・下小山田付近で確認例が多い。立地や群構成などの面から見れば境塚的な性格を強く感ずるものであるが、これらの調査次第では、ある程度の結論が導き出せる可能性が残されているといえよう。

また本遺跡の西側を通る、西白河郡東村大字岩井戸から石川町大字新屋敷へぬける古道は、地元住民から「常陸街道」と呼ばれており、十三塚塚群は旧赤羽村と旧沢井村を二分する村境の塚であった可能性は、十三塚塚群の報告の中で既に指摘されている(阿部他1979)が、本塚群に関しても同様な可能性がある。

2基の土坑は直径が3m近く、深さのある、土坑としては大型のものであった。堆積土の状況

からいえば、1号土坑は自然の営力による埋没、2号土坑は下半部が自然埋没、上半が人為的な埋没であろうと考えられた。とすれば両土坑ともに、掘り上げたままの状態で機能をもたらせた可能性が大である。しかし両者は同時に機能したと見るよりは、前述したように2号土坑上半部の埋没が、1号土坑掘削時の埋土によるものと考えられるので、1号土坑の掘削までには2号土坑が半分程度埋まるまでの時間的な幅があったとするのが妥当なようである。さらに2号塚の盛り土は、1号土坑がほぼ埋まり、黒色土である旧表土層が形成された後に盛られており、以上の層位学的な所見からは2号土坑 → 1号土坑 → 2号塚への3遺構についての相対的な変遷を考えられる。これらの両土坑の性格や構築の年代を決定する手立ては、以上の外にない。

ところで1・2号土坑の類例が、本遺跡から西方約1kmにある石川町上森屋段遺跡(菅原文他1977)に見ることができる。上森屋段遺跡は国営総合農地開発事業母畠地区の、昭和51年度工事に先立って、県教育委員会文化課によって発掘調査が実施されているが、この1・2号土坑が、規模や構造の面から見て同一の遺構であると考えられる。これらは本遺跡例同様ほぼ東西に相接して並んでいる共通点もある。上森屋段遺跡2号土坑は、弥生時代中期後半の小堅穴墓を切って掘り込まれており、弥生時代中期後半をさかのぼる時期の遺構でないことは明らかであるが、遺構に伴う確実な遺物がなく、限定した構築時期が比定できない。

県内では類似遺跡としては以上の1例しか提示できず、本遺跡のこれらの土坑を正当に評価するにはなお時間が必要である。ここではきわめて酷似した遺構が周辺地域に存在する事実だけを指摘しておく。

遺構に伴ってはいないが、本遺跡からは縄文土器・弥生式土器破片が若干ながら出土した。縄文土器は前期前半に位置づけられるが、本遺跡自体が縄文散布遺跡である十三塚E遺跡とオーバーラップする遺跡であることは前述した通りである。十三塚E遺跡の試掘調査では、遺構の存在は否定的ながらも早期末葉から前期前半にかけての土器片が数片出土しており、丘陵頂部付近が、本遺跡も含め縄文時代の小規模な散布地であることの表れであろう。弥生式土器については、その在り方が皆目不明である。

(玉川)

参考文献

- 柳田国男・堀一郎 1948 『十三塚考』
菅原文也他 1977 『石川町上森屋段遺跡発掘調査概報(福島県文化財調査報告書第60集)』 福島県教育委員会
目黒吉明他 1978 『母畠地区遺跡分布調査報告II(福島県文化財調査報告書第67集)』 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
阿部正行他 1980 「十三塚群」『母畠地区遺跡発掘調査報告IV(福島県文化財調査報告書第84集)』 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター

図 版



1. 遺跡の遠景



2. 調査後全景



3. 1号塚調査前全景



4. 1号塚セクション



5. 2号塚調査前全景



6. 2号塚セクション



7. 1·2号土坑全景



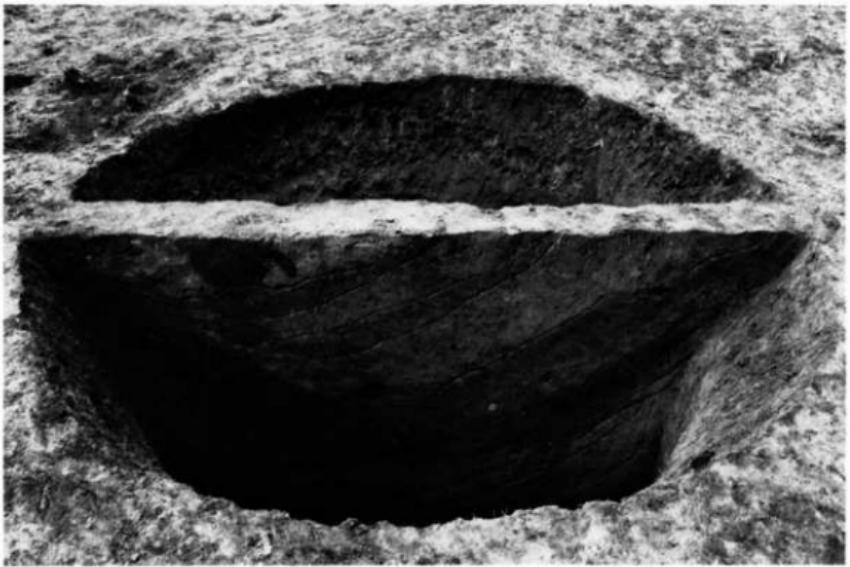
8. 1号土坑全景



9. 1号土坑セクション



10. 2号土坑全景



11. 2号土坑セクション

財)福島県文化センター遺跡調査課組織表(昭和55年度)

課長 目黒 吉明

母畠地区担当

専門文化財主査 渡部 正俊
文化財主事 阿部 正行
文化財主事 玉川 一郎
文化財主事 大越 道正
文化財主事 阿部 俊夫
文化財主事 橋本 博幸
文化財主事 石本 弘
文化財主事 松本 茂
文化財主事 高橋 信一
文化財主事 芳賀 英一
文化財主事 安田 稔
嘱託 石川 俊英

阿武隈地区担当

文化財主査 長谷川 力
文化財主事 高木 和夫
文化財主事 大越 忠士
文化財主事 寺島 文隆
文化財主事 鈴鹿 良一
文化財主事 山内 幹夫
文化財主事 福島 雅儀

補助員

越田 順子 長沢真智子 瓶子 敏子 児玉真知子
伊藤 登茂 郷 知江 福地真由美 橋本 昌子
佐藤 康子

福島県文化財調査報告書第95集

国営総合農地開発事業
母畑地区遺跡発掘調査報告 VI

昭和56年3月31日 発行

編 集 財團 法人 福島県文化センター(遺跡調査課)

発 行 福島県教育委員会(〒960)福島市杉葉2-16

財團 法人 福島県文化センター
(〒960)福島市春日町5-54

印 刷 (株)平電子印刷所 美術写真印刷研究室
(〒970)いわき市平北白土字西ノ内13
